しを仕て奥さんの耳に入れて貰はうと思つて居るョ」と頻に述懐を云たに由て愚妻が「マァ〳〵お待ョ私しが内の人に咄しを仕てねん子と切る様に仕やうから……」と慰めて歸つた趣で御座るモシ此事が本邸の夫人に露顯し妻妾合併と來た日にやァ僕は出入を差止られ隨て狼君なり尊公じり批杓一家に對して工合が悪く成だらうと思ふが……　無鹿「ソレこそ大變だぜ僕の別莊へも度々ねん子と批杓の來た事もあるからね　星丘「サァ其だテ事小なりと雖ども關係は實に大なりでげエしやう　無鹿「ソコで此紛議を鎮火させるには堂すりやャ好かネ　星丘「鎮火の手段も矢ぱり政黨同樣で反間苦肉の計略を用ひねば成んが其計略と云は先づ批杓にねん子を思ひ切せるが第一　無鹿「デモあの熱い〳〵じや容易に思ひ切らんぜ　星丘「所を思ひ切せる手段があると云は彼批杓の髯が中々の珍し物ずきで遠から此家の妹のおべたを目掛て居るがコリャ白拍子と違つて素人だけに餘程手重からうと思つて彼奴も手を出し兼て居ますじや　無鹿「ヘエー　星丘「ソコで僕が極内々でか。ぎ七婆を味方に取込みねん子の餓鬼に吹込で批杓を穴熊屋の内に引かせると當家の女將軍が欲得の上からハッタと怒て何でも批杓を外に遣まいと氣を揉出すに違い無い、其時に僕が好子の振をして「批杓を呼には是々に限る、お前は見ぬふり聞ぬ振で居さつせェ妹の事は萬事引受るに由て余に任せなせェ」と說得して向島か中洲邊に連出しておべたを批杓の心に隨がはせる樣にする、サァさうなつて批杓がおべたを手に入

たが最期ねん子ソッチ除でおべたや〳〵で爽凍り第六叱宜尻天と成じや、ソレねん子の手は切たと成て先づ當分は四海浪風おだやかに納りが附で御座らうが　無鹿「併しその後が又々沸騰するぜ　星丘「沸騰したら又その時のこと政治家は其目前の障碍を巧みに處置するが肝心、サウ先の先まで考へちやア手が伸ないじや　無鹿「何樣ソリャさうだが此家の妹が旨く承知すりやァ好が　星丘「ソコが尊公の信用を借なくては出來ぬ所でげすネ、尊公が「ヨシ〳〵おせわ萬事余が受合た」と一言掛て下さりやァおせはが屹度おべたを僕に預くるに極て居ます　無鹿「だが受合たと云からには詰り金が出るだらう、　星丘「仕方が無い是も資本だと思つて百圓お出なさい、スルと批杓が僕に堂か仕て遣と云た時に「イヤ夫は既に熊膽の手で取計つて御座りますれば決して御心配には及びません」と立派に言て、ソレナ、又々私恩を賣て柵みを掛て置が上分別　無鹿「成ほど〳〵コリャさうだ、イヤ百圓奮發して遣ませうが、早房君、ソレでねん子が手明に成たら……　星丘「手明に成たら　無鹿「火移りの悪い先生だ其後を僕が引受ると仕やうじや無いか　星丘「エー尊公がアノ十六になる赤襟上りのねん子を……コリャ驚た柳橋のでさへ（小がしのこと）餘り年が不釣合だと思て居るに　無鹿「なんの年が物を言やァしまいし　星丘「だけれど君あんな生利は面白く無いぜ畢竟相手が鯰だからアレで濟で往がマァ差向で一時間居て御覽じろ、イヤハャ鼻持が成たものじやァ御座らぬ、既に此の間も御別莊であのだる子が滋矢

良を愚弄する體を御覽で有たらうが百年も馴染だ狆兒見た樣に側にくつ附たり膝に寄掛つたり紙卷烟草を吸附て遣たりする所は餘り空々しくて堪るものじや有ませんぜ、ソレとも試しに遣なら遣て見るも宜がまづ二度か三度で否に成から無駄だらう、夫位むだな金が有なら貧民救助にでも出した方が少しは氣が利て居やうぜ　旗鷹「君だつてグルリと廻りやァ其愚弄に逢ふ連中の癖に大さう惡く云ふじや無いか但しだる子に臂を頂戴したから戀の意趣で言のかも知れ無ぜ　早馬「大違ひ大違ひ此利彦などは尊公の如き小兒科で無から孤兒いぢりは仕らぬョ柳橋の一件でさへモウ實に荷に成て困て居る位だもの　旗鷹「コウ〳〵際どい所で惚けは恐入るネ、ソコで愈々ねん子は往んかネ　早馬「ハテ扨執念の深いことお止しなさい〳〵、夫にネ實の所が赤沙汰が年甲斐も無くあのねん子に氣が有てお欲にも周旋せい〳〵と度々云さうだから批杓の方がチョンになりやァ直にお欲と相談して赤沙汰に足がらを掛る道具に遣はにやァ成んに由て……　旗鷹「サウかネ、夫じやまだ〳〵大事の寶物だナ　早馬「モシ旦那お店の寶物に手を附ちやァ往けませんヨハ、、、ア　旗鷹「ハ、、、然らば喰物は外に搜すとして右の計略を施こすと仕やう　早馬「宜しいと手を叩く音ポン〳〵〳〵下にて返事の聲ヘエーイ

第十八回　鶴の一聲で熊と狼の仲直り

却説く　狼と熊鷹との間に起つたる石炭一件利益分配の紛議は狎合早房の兩人が中合はせたる爭論の爲に益々火の手が大きく成て案の如く濱矢良殿の手を經て赤沙汰干鰯兩殿の耳にぞは入たる個樣なる紛議に口を利て置けば無謝では有まい假ひタント取れぬ所が何かの時には役に立ゆゑ我等が立入て仲裁を入るゝに若ずと拔目の無い殿たちなれば內々にて早房狎合より事情を悉しく聞取て後に熊鷹　狼を別々に招いて和解するが宜ぞやと說得したるに此兩人も紛議の爲に早房狎合等に餘計な謝儀を取らるゝは損だと算盤の上から和戰の利害を割出して何にも仰せに從ひませうとお受を仕たれば去ばとて日を定め赤沙汰どのゝ邸にぞ關係の人々は集つたる

赤沙汰どのは宜敎師ソッチ退れ道德の說敎なら余が仕て遣うと云ふ樣なる顏付をして熊鷹　狼の兩人に向ひ　赤沙汰「今日兩氏を態々招いたは外でも無い仄に聞ば兩氏の間には石炭の事とやらで聊か葛藤を起して早房狎合の兩氏が其委任となつて段々の裁判に涉り何分にも示談に及び兼るに由て此上は不本意ながらも公廷に持出すに　向　として居る場合じやソウなが權利義務の爭ひで是非とも其歸着を定めねば相成ぬと云ふ意地づくの譯なら仕方が無が大抵の事なら余たちが仲には入つて和解を仕たいものじやが　千鳥「實は其咄しを濱矢良君から聞て當家の主人公も余も驚いたョ兩氏が十餘年來の交際は兄弟も及ばぬ程の中で商法向の事も手を引合て遣て居るのに今日に成て　爭　を初めるは宜

ない事じやと思ふのウ、是が世間へ聞えては指折の紳士の體面にも第一關係するじや有まいか、なんの雙方で少しづゝ勘辨を仕合さいすりやァ咄しの附く事じやろウ、悪い事は言んに山て早う和談を附たが宜と余も思ふて其事を咄すのじや　熊麿「誠に以て有がたい事で御座ります　馬「詰らぬ事が閣下がたのお耳には入まして恐縮の仕合に御座います　赤沙汰「ナニ其やァ懇意の間柄ゆゑ少しも憚る所は無が公裁などに成ては夫こそ新聞紙屋の良材料を呉て遣やうなものじやに山て　干潟「恐縮と思ふなら此場で示談を附さつしやれィ　熊麿「畏まつて御座いますが實は此事の起因と申すは狼より狎合を以て不當の請求を仕つたが始めで……　馬「イヤ〳〵私しは最初の約束に依て當然の請求を仕つたるに熊麿が早房を代理といたして……　赤沙汰「コレサ〳〵兩氏とも堂したものじや其爭ひを聞く位なら何も余どもが仲裁を仕やァせんワ　干潟「其通りじやモウいさくさ無に和解し仕じや無か　熊麿「恐入ました、のウ狼君それじやァ御沙汰に從つて　馬「いかにも示談を致すと極ませう　干潟「オヽ夫が宜〳〵、と既に示談に成さうな機會を見て　仰仝「アイヤ暫く〳〵　狼氏は兩閣下の御威光に恐れて是非の分別を致す暇も無く和解示談のお請を致しませうが苟も此三百郎不肖ながらも法律の片端を嚙つて同人の爲に權利保護の任に當ります以上は示談するにしても幾分の權利を全くしませんでは承諾が仕り悪い儀に御座います、と言出せは早房も臂を張て　早房「是は怪からぬ僕は兩閣下の御盛意を伺て成程と敬服いたしたから心底を抛ても和解をば熊麿君に勧め樣と思つて居るに貴公が狼氏の爲に權利と云ふ詞を用ゐるならば僕も亦熊麿氏の爲めに權利の二字を眞甲に翳て飽までも條理を貫かうと力身返れば　干潟「默ちッしやい兩氏余たちは裁判官じや無ぞ　各方の爲に權利義務の有無を裁決して遣うと云て此へ招いたのじやァ無いぞ畢竟懇意の間柄で爭ふは宜ないに山て仲裁し樣と信切に思ふて其事を勧めて既に當人たちが左樣いたさうと勘考を附たに其談判の委任を受た貴公たちが別に趣意を述べる理由は無はづじや夫とも當人は承知でも代人は不承知だと云ふことが道理の上に有かいのウ、よもや有まいがや　赤沙汰「然るに貴公たじが彼是と此場で云ふは丸く納まる事を納めさせぬ存念で所謂健訟の弊と云ふべきものじや默て扣へて居たが宜いワ、と早房狎合の兩人を散散に叱り附て　赤沙汰「サァ熊麿狼直に此で示談を附たが宜らうがや　干潟「ムヽ善は急げじやげな後れると又葛藤が出に山て示談せい〳〵　熊麿「委細承知仕りました然らば一寸御免を蒙りお次の間に參つて　馬「何樣示談を開くと仕ませう　赤沙汰「それじやさう仕たが善らう、と云ふに任せて熊麿狼は早房狎合と共に四人にて次の一間には入り暫く有て元の席に返り　熊麿「御信切なる御仲裁に預り御蔭を以て都合よく示談も出來まして　馬「この通り雙方更て約定書を認めまして御座います、と約定書を赤沙汰干潟の前に出して見せ　四人「段々御配慮を仰ぎ有がたい仕合恐入て御座います　干潟「ムヽ夫で

余どもゝ安心したワ 赤沙「是から相變らず中好するが宜ぞ爭論などは紳士の間に有べきものじや無ぞ 伊仝「誠に一途の料見より失敬を申上まして 呈「恐縮の至り幾重にも 田入「御寛宥を願ひ上げます、 干鰯「ナニ〳〵モウ濟だ事じや誤まるにァ及ばぬ 赤沙「ソレも依賴主の爲を思ふての事じやから敢て惡くも無てのウ……先々是で浮雲が霽て仕舞た……是から一杯やらう奥の座敷へ來たまへ……サァ干鰯さんあちらへお出を願ませう

歸り路のヒソ〳〵咄しに 呈「堂だ廿く往たじや無か 伊仝「サウさ彼で無ちやァ納りが附ないからネ夫にしても漸く雙方から一割五分ヅゝの挨拶じや少ないじや無か 呈「ム、十分じや無けれど欲には限なしだ先づそれで滿足するサ 伊仝「滿足し無と言て仕方が無いが此方どらは是くらゐ骨を折て一割五分ヅゝ赤沙汰と干鰯は一寸口を利たばかりでグルリと廻りやァ二割にも三割にも成だらうが好株だネ 呈「ソリャ顏が好から叶はないョ堂で御同樣の所は名題下と來て居るから狂言廻しに使はれて骨が折て肝心の所は座頭連中に儲けらるゝと極て居るョ 伊仝「だから割が惡いものサ併し赤沙汰が何にも聞かずに示談せい〳〵と押付て干鰯が御同樣を默らつせいと大聲で叱た所なんざァ舞臺が大きくて良仕たぜ、あすこいらァ丸で高島屋だつたョ、と云ふ所に後の方にて銅鑼の音ボーン「何だ、ムー聲色か「エー惚りしたぜ「馬鹿〳〵しい

第十九回 雙方せり合の新淨瑠璃

此は狎合が宅の場。主人三百郎は相替らずの留守、妹の女教師狎合べん子は今しも此家に尋ね來つたる清元の三味線引に向ひ べん子「ソコで胸吉さんァノ淨瑠璃の節附は出來たかエ 胸吉「所が先生べん子「ナンダ先生だと止てくんな唾壺を替に往ァしめエし 胸吉「でもお前さんの事を先生々々と皆さんが仰しやるじやァ有ませんか べん子「學校の分らず屋手合にやァ何とでも言せて置だが、先生と云るゝ奴にあァ昔ッから碌なものは居ないョ 胸吉「左樣サ併し西鄕先生と云ふ大立物が有たじやァ御座エませんか べん子「アリャァ別物サ、ソコで胸吉先生肝心の節附は堂したエ 胸吉「サァ師匠とも色々相談をして遣て見たが何だか文句の譯が分らなくつてお染らしく無ゆゑ困つて居ますョ べん子「さうだらうが堂でも好から此次の日曜日の間に合う樣に明日の晩までに節附も手もチアンと拵えて明後日が聞せで其日から直に稽古に掛つてお呉な 胸吉「ソリャ大變、シテ此淨瑠璃が堂なるのでエすか、お前さん濱町の一件のお惚氣筋なら御免を蒙りますぜ べん子「胸さん馬鹿ァ云ちやァ往ないョ、一體あの淨瑠璃の出來た因緣を咄して聞せるからマァお聞ョ、此節例の束髮洋服の貴夫人連中の內に日本音曲改良會員といふ蹴返が有とお思ひョ、ソコで又貴紳學士連中に其贊成者が有る中で是まで

の淨瑠璃や唄は文句が下品だから高尚優美に書直すが良と云ふ組と、イヤ〳〵言文一致の趣意で唱歌の文句は何でも通俗の方が良と云ふ組と二ッあつて其高尚組と通俗組とが喧ましい議論をした末が、ソンナラ我々の方では見事に高尚の文句に仕て見せやう、而白い然らば我々の方では通俗で遣て聞せやうと大張合の大騒ぎと成て來たは宜が、運の盡に私しが稽古に往先でソレお前も知てお出の批杓令夫人ネあの奥方が原の生れは祇園町の舞子はんと來て居るから今でも内々は藝自慢の所に濱矢良令夫人が七八年前までは芳町に出て居た往來の島はめで度しまで有たから同じく藝自慢ヨ、ソコに附込で神主上り見た樣なヘボ歌讀どもがおべッかを言て「拙者が唱歌の添删を仕つりますに由て是非とも令夫人がたの御一曲を」と煽動あげたので、トウ〳〵此令夫人御連中がお遣あそばすと極て新作の出來たのが私しの手に廻つてお前に頼んだ譯だネ、夫だに由て明後日から此夫人たちの所へお前稽古に往て呉なくッちやァ成ないぜ……私しが一所に往からチッとも間の悪い事ァ無いヨ……ナンノ淨瑠璃だつて三味線だつて碌に出來るものかネ、堂でも宜として追付て置さ……併しお前は男が美つて口先が甘いから令夫人や令嬢を迷はせちやァ往ないぜ……夫じやァキット頼んだヨ 駒吉「エ、分りました夫じや一夜づけ同樣に附ますからお前さんまた後で皮肉を言ちやァ困りますぜ……ソコで片方の千本一朱とやら云ふ組でも新瑠璃が出來ましたかネ べん子「千本一朱、ム、言文一致か、其方でも大出來で常磐津に頼ださうだヨ 駒吉「そいつァ面白い、當日が樂しみでけすネ、べん子「樂しみ所か苦しみだらうヨ併し是も商賣の煩ひだからネ……

扨て當日に成て貴婦人連中の催されたる音曲改良會には批杓情實干鰮赤沙汰濱矢良の殿たち熊膽狼狆合河合早房等は云に及ばず貴顯紳士令夫人令嬢數百人出席し玉ふたり其景況はくだ〳〵しければ到底「美人が少くて、音曲が不出來で、お世辭が澤山で、高慢がブラ付て、而白くも何とも無つた」と云ふ數語にて十分その趣を盡し得たりとして此に略して記さず但し淨瑠璃の改正文句は左の通り

○高尚優美派にて改作したる清元のお染

久松染子道行鷺浮寐

今はむかしのかたり草。かたるもうしや。牛島の。堤のほとりほど〳〵と。まだ浦わかき姫ごぜの。覺束なくも唯ひとり。さまよひ玉ふぞ痛はしき「待に久しき久松と。かたみの契りかたければ。花のつぼみの振の袖。しぼりてちかひ立か弓。ひいて返らぬ旅の空。あぢきなき世を捨ばやな。隅田の川邊を打つれて。心細くも來たまいぬ」やよ染子の君。和御前は矢はり山家屋へ歸らせ玉はれや「我手枕に通ふなる。梅が香したふ鷺の。子飼の中より恵うけ。いとも尊とき姫君

を。舍人の身にて憚りや「染子はしばし顔を見て「ァ、ようがまし其詞。詮なき事なの玉ひぞ「さばかり妾を嫌ひなば。一人り米來へ往て見よ「ますらをの矢たけ心は。さもありなんが「いとけなき。振分髪の頃ゆしも。俱に手習ひなせしかば。たれをしてるや難波津の。草紙に書し三ッ文字「おん身に見せて問たるに。戀と云ふ字との玉ひし。其お詞の淺からぬ。安積の山の山の井の。深き戀路の初めぞや。かばかり思ひ侍べるに「恨みつらみも何ゆゑと。袖にすがりて泣たまふ。御心根ぞいたはしゝ

その次が

○言文一致派で新作の葵の上

「三ッの車に法の道。火宅の内をば出るだらう「夕顔の。花の咲てる其家に。破れ車を附る人。ないがなんぼか悲しかろ「自ぶんのむねの苦しさに。人の恨みもなほひどく。忘れかねたる我思ひ。せめてちッとは慰さみましよと。市子の弓によせられて。此まで浮れて來たワいなァ「小座敷の。妻戸の陰に隠れて居たが。姿見えねば咎め手も無い 神子「こりや不思議。誰だか知ぬが貴夫人の。破れ車にお乘だがお腰元らしい人が。牛も居ない車の。梶棒に取ついて。メソ〳〵と泣て可あいさうに。若あのレキじやァ有ませんか 舍人「大方は推量して居るよ。包み隠さずお名乘なせェ「この世の中は。娑婆電光の境とて。僅かの中の事だから。恨まう人も無く悲しまう身も無に堂して浮れて出たらうか。わしを誰だとお思だ。六條の黄昏といふ。年增の生靈じやないわなァ。わしが若い盛りには。春の三月花盛り。向島では花見の座敷。秋の八月月見には。中洲あたりの遊山船。おもしろおかしく暮したが「年增になつたら朝顔の。しぼんだ樣な面じやとて。見捨られたが口惜い。腹がたつ。その恨みをばはらさうと。おばけになつて參つたぞ「我人につらいけりやァ。かならず其身に報いが來る シテ「エ、恨めしい 四「なぐつてやらう 神子「こりやひどひ。六條の黄昏さまと云ふお方が。チン〳〵喧嘩ははしたない。お止なさいよ シテ「いんにァモウなぐつてやらにやァ。腹の虫が治まらないョ。と枕に立より。ドシリとなぐれば 神子「こうなつてはと立よつて。おいらは後で苦を見する「今の恨みは有し報ひ

第二十回　商賣を引ぬが秘傳

去程に早房利彦が計略果して其圖に中り熊慰長者の一言にて烏鵜亭の女將軍おせわは「旦那が引受ると仰しやれば宜う御座います 妹のおべたの事は堂なりと早房さんにお任せ申ませうと」二ッ返事、早房が取持にて批杓どのは大悅び白拍子と逢つて素人は猶更以て尊い七十五日は愚なこと七十

五ケ月は大丈夫生延ると現を抜して御迷あそばされ再び鳥鵜亭へ入せ玉ひ毎夜々々の御通ひ御氣根の程こそ恐入り奉つたれ、去ば左しも是までは御龍愛を蒙つたるお出やねん子も憐むべしおべたのべた附きに見替られ古風に云ば秋の扇と棄られて五十圓の御手切他人となつたるぞ是非も無き。夫にて批杓どの、權妻おとびの方は鎭火したれど可愛やねん子の胸中推量られて哀れなりと云ふ所だが此ねん子は更に何とも思はず平氣で澄し込で「ナニ鯰の旱は仕やアしまいし批杓が來なけりやア片手でも小柳でも澤山あるヨ」と好鴨を搜して居る見込み早房はお欲と相談なし密にねん子を呼び「お前も批杓さんをおべたに取れて指をくわえて居ちやア顏が立まい所で赤沙汰さんがお前を是非と遠から言てお出でなさるから堂だ諾とお言な」と說得すれば半分聞ずに委細承知染賃は幾許と手取早い掛合「姉さん宜しい、早房さん屹度それ丈は取て下さるね」と念を押て咄が纏まり直に赤沙汰どのへ乘替たる機轉の早業、赤沙汰どのは野狐が寶珠の玉を拾た樣に此上も無ものと思召しねん子ねん子やと御龍愛斜ならず「ナンじや批杓が出の着物を拵へて遣つたとソレじや余は出と着物と兩方ながら拵へて遣らう、ヘン批杓が一夜泊りで給の島に連て往たと咎じや無いか余や上等瀛車で京都に連て往て遣う」と上を越たる派手風流——珊瑚珠の金簪が欲しい、宜しい拵へて遣る吉兵衛を呼に遣れ——上布の荒い飛白が着て見たい、譯は無い竺仙に搜させろ——金の指輪、ソリヤ丸

忠——金の時計、オイ天賞堂と——何でも彼でも乞目が出る暫時の榮華、あはれ雀屋のだる子チャンとお出やのねん子チャンは如何なる月日の下にて生れしや果報の程の目出たさよと新橋の南北に掛て羨まぬものぞ無りける

此に穴倉やと申は此赤沙汰殿がねん子を龍愛し玉ふ宿坊なるが女房のおたぬは鳥鵜亭のおせわが實の妹にて殊に内輪は一ッも同前なれば此宿坊ならば仔細あらじ鳥鵜亭にては却ておべたにもねん子にも氣兼有て思ふ十分に腕が揮まいと云ふ懸念より熟談の上にて赤沙汰を此穴倉やには引込たると知られたり。奥の一間にて最前より密談を開たるは早房にお欲おたぬおせわの四人「イヤ〳〵ねん子を引せちやア往ないヨ引せた日にやア夫ッ切で何にも成ないぜ「其通り〳〵商賣に出て居りアこそ向がお客で來て私たちも取卷てお座敷にも出るし、餘計なものも偶には取し、お茶屋さんがたも商賣が出來て氏子繁昌だけれど引されて仕舞つちやア當人は好らうが外が詰らないからね「サウとも〳〵當人に獨り占をされて詰るものか余だつても彼鼻毛が熱く成て來るから此方の相手を脊負で買せて旨い酒も只匁で飲ると云ふものだが、夫を引されてチンと成ちやア手も無く盜的に淡はれた樣なものだぜ「お前さんがサウ云ふ氣で居て下さりやア私たちも心丈夫ですヨ凡そ藝者衆が引たが最期振向ても見ず旦那は外へ出しはせず自分たちの身内にばつかり引たくる算段をして外にやア四

文のメリも出させない様にするから仕方が無ものさ「ホンニ其通り私なんざァ藝者をお客に引せたお蔭で幾ら損を仕て居るか知ないョ」「サウかお前が損をする事が有か」「アリマス共ソレ毎月六七度か十度も來て散財したお客が來なくなるから損じやァ有ませんか馬鹿々々しい」「ム、尤だ〳〵然らばお前がたはねん子を説得して赤沙汰が引せると云ても否だと云する様に骨を折たまへ余はまた藝者などをお引せなさるは此節から世間の評判に成て宜く無とお爲ごかしで引せ無やうに仕やう」「ソレじやァ御同前さまに手管を合せて」「承知だ旨く遣らうぜと相談したりける

ねん子は差向ひにてお欲に向ひ　ねん子「姉さん何の御用」「外の用でも無がお前赤沙汰の御前がモシひよつとお前を引せると仰しやッたら引く氣かエ　ねん子「ホヽヽヽ引せると仰しやりやァ仕ないのヨ」「だがモシ其話が有たら堂する積だエ　ねん子「サァ堂したら好だらう私いにやァ、姉さん、分らないワ、だけれどお母さんが（抱へ主人）中々欲張て居ますから大抵の事じやウンと云ひますまいヨ」「ソコサ若しお前の御主人が纏まつたお金を取て承知したら堂するエ　ねん子「左樣サさうなつたら引ても搆ないネ、ねエー姉さん」「否ないネお前なんざァ幾ら發明でもマダ年が往ないから藝者が引て權妻さんになりやァ結搆なものとお思ひだらうが決してさうじや無よ、商賣を仕て居る内にやァ毎晩の樣に凝て來たお客でも引せて自分のものにすると男と云ふものは全體自惚が強つて浮氣な者だから直に他が來て三月も立ぬ内に外で又藝者に引掛ると昔から極つて居るぜ、夫に妾宅の断が月々いくら親元へいくらと直がチヤント極ると其上を貰はうと云ふにやァ骨ばつかり折て思ふ樣に衣物は着られず外へは出られずお負に田舍出の女房に己やァ本妻だ奥樣だと云ふ面をされて氣障を言れた日にやァ壽命が縮まるヨ、夫だからホレ切て居る人に引されても十人が九人まで再勤するじや無か、矢はり野におけ蓮華草で何と云ても引か無に限るヨ、私しの内のだる子を御覽アレでも濱矢良の御前が引せ樣と仰しやるが私しが先を案るから止せて置のさ、近い所が首玉やの小みけさん更紗やのおうささん鎭珍やのおかめさん天井やのねづ吉さんを御覽なァレが引込で詰らない好手本だヨ、サウして見と蛇のおひゑさんなんざァ大した腕のものサあの人の妹を或旦的が何千兩でも宜い金なら出して引せて遣うと仰しやつてもソリヤ無駄です勿體ないからお止なさいましと斷つて其の旦那を引附る樣にするから强氣だねエ、お前も其積りで商賣に出て居てアノ髯御前を旨く胡魔化す樣にお仕よ「ソシテ好時分に自前に仕て貰て本統のお母さんに早く樂をさせて髯から思ふさま引たくつて口直しやァ雁次郎でも榮之助でも竹松でも好な者を買て喰るさ、夫くらゐの保養が無つちやァ勤まらないねエ、ねん子チヤン、夫なら私しが世間に知ない樣に逢引をさせて上るヨ、ナンノ少しの道樂はお前藝者にやァ當りまへさ

第二十一回　不義もの動なと妾宅の騒動

狎合三百郎は寢ぼけ眼を擦りつゝ寢衣の上に羽織を引掛て出來り 伊介「ヤア河居君滅法お早い尊來だが何か至急の事件でも差起つたと云ふ次第かネ 河居「イヤ七時前から推參いたし貴君の安眠を呼起して甚だ相濟まんが至急に君の考案を承はり十分の盡力を乞はねば成ぬ大事件が出來したので、伊介「ハヽアー何事件ですネ錢になる事なら何御用でも盡力いたすは勿論の事 河居「所が夫ほど錢に成ぬ事だから態々僕が罷出て御依賴申す譯合……伊介「成ほど錢に成ことならば大袈裟に呼付て申付ると云ふ筈だらうが 河居「ナニさう云ふ次第じやァ無が朝ッぱらから揚足は止にして肝心の用を咄すと仕樣が、マア篤と聞て呉たまへと說出したる一條の物語は左の如し

兼て熊鷹狼 早房狎合取分て河居が懇命を蒙むれる干鰮殿は前にも記せし如く中國邊の御出生にて今年三十八歳奥方はかす子と申して二十七歳のお國もの令夫人に似合ざる結搆人にて俗に申せば先お目出度かたなり、御子も男女併せて三人もおはしますとぞ、然るに此干鰮どのは古へより英雄多くは色を好むと云へる諺の通り婦人に掛ては一際勝れたる大英雄にて是迄權の方も數人取替引替置玉ひしが何れも病氣に付職務に堪らこと能はずと辭表を捧げて退きたり、此に吉原

の白拍子にぬか六と云る者あり年こそ未だ十八歳なれ其道に掛ては鬼にも神にも合ふと云ふ一人當千の兵もの是迄數度の戰場に如何なる剛敵に出合ても一度の後も取ざりしかば班額と異名をぞ取たりける、此ぬか六を蛇のおひゑの周旋にて去年の春ある所に於て干鰮どのが一椀召上たるに殊の外御意に叶ひ水魚の交最も濃かに成せ玉ひ其秋に白拍子の籍を脫してよとの仰に任せぬか六は嬉しやな有がたやな又もや御意の變らぬ内にとゴロ〳〵と咽を鳴し後足にて大門口の砂を蹴掛て飛出し干鰮どのが御造營まし〳〵たる木挽町邊の小意氣なる別邸に引移り蟻武すりと云ふ表札を入口に掛て漢字で書ば別邸之權妻かなで書ばかこひものと相成たり、是を見てヤア面白き取組かな鬼の女房に鬼神とは野暮な喩へ是は古へ木屑殿の巴の立會か左なくば先の武藏潟と今の中洲の大女とが脊競べ何が强いか何が高いか見物ものぞと噂したるが負ず劣らずの立會にて勝負も附ざれば人の噂も七十五日それなりにて過行たり。扨干鰮どのは斯ばかり好敵手なるおすりをば簪の花と賞で掌の玉と愛しみ玉ひしに餘り旨い物は厭が早く來ると云へる喩の如く一年も經ざる中に干鰮どのはは や少し厭させ玉しにや又候ソロ〳〵と初まつたる新柳の御遊歩その内に新橋なる鳥屋の小しやくとて今年十七歳の美人に（即ち河居惣太が所狎おづるの妹）お目が止り那邊か御意に適つたと見えて此節は喜瀨川亭へ二日に上ずの御入來にて小しやく浮世は色と酒小しや

くの羽の美くしやなど、洒落込での御惑溺、もつとも權妻おすりの方とて眞更お立寄の無にはあらず一月に十二三度は渡らせ玉ふ樣子なれどおすりの方は外に增花の出來たるが大腹立「ナンノ面白くも無い權妻だの外妾だのと云れて外見は大層な樣だけれど仕度ことは出來ず往度とこへは往ずお情の牢も同樣、此ばかりにやァ日は照まいしいつ何時でも三味線一挺ありやァ大威張で商賣の出來る體だ、サウ〳〵我慢をして彩旦的の機嫌が取るものか、失敗たら夫迄よ」と忽に結局の見込を立てソロ〳〵始めたる捨撥我儘先朝寢昼寢から始まつて飯の度びに膳の上喰道樂に飲道樂近所の寄席の歸りには藝人たちの休息所浮氣咄しの掃溜と相成たが、夫が高じていつ唯が取持たやら知らねども今日では立派な小劇場ッヒ此間までは道化手踊り俗に純帳と云たる小芝居の俳優辛吝三郎と云へる色の生白い眉毛の無い氣障達筆の色男其癖欲に掛ては敵役と云ふ純役とわり無き中と成り、初めの程こそ人日を忍びて逢引もしたれ此頃では干鰛どの、お出なき夜は公然に宅へ引入ての色狂ひ大膽にも亦餘あり。遺の干鰛もおすりの方が斯る振舞とは夢にも知らず或夜新橋の一酌に夜を深し十二時過になつて別宅へ來り表の戸を叩き明よ〳〵との玉ひたるに內にては大騒動サァ大變だ旦が來たと狼狽て飛起き吝三郎を納戸の夜具戸棚の中に隱し「ヘィ只今、只今直に明ますョ」と寢衣の襟を搔合せて出迎ひ「マァ御前大層お遲ぢやありませんか、十二時

を打て寢ましたので寢入鼻でツィ目が醒ませんでと」頻に取繕つて見たれどもおすりが顏色下女の周章かた寢間の樣子頗る怪しかりければ醉ては居ても天下の治亂政治の得失を見拔ほどなる干鰛の眼力いかでか是を見逃すべきコレは變だと四方に眼を配れば忽ち目に附く煙草入「コレおすり、象牙の筒に金唐革金物は金無垢　唐獅子六分玉の緒占を附たる立派な煙草入ム、……今日晝間落語家の唖狂が來て忘れて置た煙草入だと……中入前の落語家には不似合なる品、ヨシ唖狂の忘物にした所で何で此に出して有るか……ヤァ其烟管は男もの銀に吉の字を三ツ寄たる紋所其傍に毛彫にしたる姫葛はコリャ其方が定紋なるに」とキッと眼に付く屏風の外引明見ればコハ何に黑縮緬の男羽織その外小はだの脊中の樣に光つたる着物や蛇の腹の樣に織たる男帶赤い袖の附たる繻絆まで脫捨てありぬ。干鰛どのは烈火の如くに怒らせ玉ひ扨こそおのれ密夫を引込で大膽にも我別宅にて奸通いたしたるよな其男はいづくに隱し置たるぞ引ずり出せと阿修羅王の荒たる如くに猛り立ての玉へば兼ておすりが横柄づら憎しく〳〵と思ひたる兩人の車夫は何の情も有ばこそ其所此所と家搜しなしおすりが泣て止るを突のけ逐のけ難なく納戸の押入より引摺出したる辛吝三郎、おのれ等よくも此干鰛が顏に泥を塗たるぞと怒り心頭に徹し詫ても詫つてもチットも聞ず氷の如き懷中小刀取より早くおすりが黑髮大丸髷の髻よりフッツと切て捨たまへばおすりはァ

ッと一聲叫び其儘に氣絶したり吝三郎は生たる心地なく震へながら手を合せて命ばかりはお慈悲に御助け下されてと拜み居たるを荒氣の大將早足を蹈で五ッ六ッ力に任せて蹴たまへば何かは以て堪るべきウンと言さま血にまみれ同じく其に仆れたり。おのれ等首を並べて斬べきなれど生憎此には刀も無し有た所が刀の穢れ命冥加の奴共だ、と少しは腹の癒たるか其儘つッと出たまひ其夜は喜瀬川亭にて夜通しの燒酒夜の明るを待兼て使を走らせて河居を喜瀬川に召させ實は昨夜是是の始末なれば直におすりを放逐せよ萬事其方引受て取扱ふべしとの御沙汰なれば河居は驚天しながらもアッと領承して直樣干鰮の別宅なる木挽町のおすりが許へぞ出張したりける

第二十二回　禍福を轉ずる機敏の掛引

始終の樣子を聽畢て 仰「成ほどソリヤ大變な騒動で有たらうが夫から君が出張したら其色男の辛吝三郎とか云ふ純役もアバ摺のおすりも靑菜に鹽で一言も無つたらう、と問ば河居惣太は首を左右に打振て 河「所が大違ひ〳〵昨夜干鰮が歸つた後でおすりと吝三郎の兩人が親類や味方の者を呼集めて淸洲の大評定を遣たものと見えて今朝五時ごろに僕が往て見るとおすりが宅にはべラ〳〵羽織破れ袴或は怪し氣なる洋服と云ふ拵へで一癖ありさうな奴等が四五人も居て僕に面會して「扨

は貴君が干鰮殿の御代理で御座るか實は唯今に我等共が干鰮殿の御邸へ罷出やうと思つた所で御座つたれば丁度宜しい都合で御座る。拙者は當家の戸主蟻武スリが父方の叔父蟻武筋兵衛、拙者は辛吝三郎事馬脚醍醐之助が親戚加鴈具圖郎で御座る、お見知り置下さる樣に」と四角張たる挨拶振、コイッ扨は相談を附て居ろなと悟つたゆゑ僕も腹を締て昨夜の事を咄し出すと其叔父とか親戚とか云ふ奴等が「イヤ河居さん先づ其お咄しの前に是へお出あつて當人共の容體を御見分下されい」と僕を案内して見せるに由て何心なく往て見ると座敷の方には其の色男の辛吝三郎が頭から顏に掛て一面の繃帶をして態とウン〳〵と呻て居て其側には怪しい醫者の書生が藥瓶を幾個も枕元に並べて其外に三四人も居て看病の體をつくろひ、また奥の小座敷にはおすりが高枕で布袋の腹ぐらゐも有やうな大きなる氷嚢を天井から釣して散切頭の上に載て胸の所には芥子のパップを張て左ながら九死一生の如き有樣で是にも同じく四五人の看病人が附て居ると云ふ狂言で有た 仰「フウ夫では彼奴は本式に巧み居たナ、シテ其叔父だの親類だのと云ふ奴は何者だエ 河「其の蟻武筋兵衛と云ふ奴は年齡五十二三位で原は菲府で御小人目付を勤めて隨分筋の惡い男らしいヨ、夫から加鴈具圖郎と云ふ奴は先頃まで低い所を勤めて居たが今では潛り代言を商賣にして是以て一筋縄では往けぬ代物らしいネ 仰「ム、其で肝心の掛合は堂であつたネ 河「サア此方から高飛車を極やうと思つて往た所

が右の次第で兩人の病體を見せて、扨河居さん貴君に對して個樣な事をお懸合申すは甚以て御氣の毒では御座るが干鰛どの〻御代理とある以上は一應の御談判は仕つらねば相成申さぬ、……何にも此家は内實干鰛どの〻別宅で御座らう又蟻武すりは内實干鰛どの〻お召使で御座らうが夫は内實の事、表面より申せは蟻武すりと云へる婦人は一個の女戸主で干鰛どの〻妻でも無けれねば妾でも御座らぬ其上に是なる家は誰が金を出したにせよ蟻武すりの宅で既に區役所にも其屆に成てござる然るに表面上は何の由緒由縁も無き干鰛どのが深更に及んで蟻武すりが家に來り當人を打擲いたし剰さへ其席に居合せたる馬脚醍醐之助をも打擲して兩人ともに手傷を被せ生命にも關係する程の事を致されたるは如何の譯合で御座るか拙者共に於ては一圓了解いたし兼る、好んば蟻武すりが公然たる干鰛どの〻妻妾でも姦通の現證なくては打擲は致す可からざる筈、まして況や蟻武すりは干鰛どの〻妻妾でも無けれねば來客の馬脚醍醐之助は密夫でも御座らぬを奸夫呼はりは如何なる御心得で御座る……假ひ密通の證據が有た所が夫迄の事で何も是が奸淫と云ふ名を下すべきものでは御座るまい、ソリヤ蟻武すりは成ほど干鰛どの〻世話に成て月々の手當を頂戴して枕席に侍べるに逆ひは無いが身體生命までお任せ申しては御座らぬ……其上に馬脚醍醐之助は干鰛どの〻脅迫に罹り身體に傷を被り生命を危くする因緣は毛頭も無いに干鰛どのが車夫等に號令をなし自分も共に手を下

して亂暴にも殘酷にも無法にも打擲いたされたるは如何の譯で御座る……此家が干鰛どの〻別宅たるに山て只今にも明渡せと有ば直樣引拂ませう、又蟻武すりの衣服諸道具も干鰛どのが買て與へた品なるに山て取返すとあらば直樣返しませう、是とても法廷で爭へば明渡すにも返すにも及ばざる品物なれど干鰛どのが欲いと申さる〻なら此方の好意を以て進上いたさうが、扨傷を被らせ且つは婦人の第一の裝飾たる頭髮を手籠に切たる事は堂して下さるか其埒口をお附なさらぬに於ては止を得ず警察にでも檢事にでも告訴いたして法廷の御處分を仰がねば相成申さぬ、サア是非の御返答確と承はりませう」と慕し込での掛合に僕も案外なれば思案も附ず何れ拙者が引受て御談判を致すに山て後刻までに否やの御挨拶に及ばう尤も都合次第拙宅へ御入下さる樣に申上る哉も分り申さぬと云ふ位で出て來たが其通りに干鰛に言たもので有うか、此先の懸合はドウ附たら宜らうか、堂で君に出て貰はねば片が附まいが……仰仝「宜しい〳〵」スツカリと相分つた、コリヤ先方が商賣人筋で來た仕事だから此方も商賣人筋で談判をせねば成らぬが詰り此一件は盗的に追錢で氣は利ないが幾らか金を出さにやア濟まいぜ……ナンノ干鰛に出させる樣な不細工な事をするものかネ、熊ゑだの狼だのが干鰛のお陰で是まで悪錢をシツカリ儲けて居る奴に御用金を出させるサ……ソコで斯いふ羽目に打突たら僕も手の屆く丈は儲け無りやア詰らぬに由て先方とグルに成て儲けるから、ソ

リヤ君だけは内々含んで居て呉たまへ、僕は隠して仕事をするのは嫌ひだから前以て斷て置ぜ……夫から第一に聞て置ねば成ぬ事は彼おすりのすべたを原々の様に干鰯に括附て置が宜か、但しは手切にして彼家を立退せるが宜か、君の都合にやァ孰が宜かネ……成程〳〵君の秘密は妙だ〳〵、夫じやァ熊鷹等に内々で金を出させて其金と着物や道具を附ておすりを引拂はせ其代りに君宛に誤り證文を二人に書せるとして……ソリヤ譯は無ヨ僕が屹度書せて上るヨ……夫から君がお妹の小しやく嬢……ナンノ君が權妻の妹だから君の妹サ……其小しやく嬢を引せて後釜に入る様にすりや益々君の信用が篤く成て愈々干鰯の腹心なに事でも干鰯は君の言通りに成るとは實に深謀遠慮恐入つたネ、エ―丸で加賀騒動の大月で寺島の役だぜイヨ音羽屋ァー 何屋「戯談ぢや無ぜ狎合君ソレじや直に掛て呉たまへ 狎介「委細承知一寸朝飯を掻込で直に君の家に出掛るから君は歸つたら其の蟻武筋兵衛と加雁具圖郎の二人を君の家に呼で置たまへ 何屋「ヨシ直に歸つて呼に遣が旨く掛合が屆かうか 狎介「ナンノ金次第で直に屆くヨ、併し熊鷹と狼とに御川金を言附る時は君も同席で無けりやァ宜ないぜ 何屋「ソコハ御同様の力で出させやうが、と云て君あまり阿漕な儲を仕ちやァ困るヨ 狎介「大丈夫サウ酷くは慾張ないヨ儲つたら君にもお禮を仕やう 何介「ソリヤ勿論の事サ 狎介「ハ、、ァ君も其方にやァ拔目は無いネ

第二十三回 口から高野木魚の講元

何なる掛合を附たるか左しも理屈を並て河居惣太に向たる蟻武筋兵衛加雁具圖郎の兩人も斯る事には物狎たる狎合三百郎が立入て往復したる爲に咄しが附き、左ばかり大怪我の如き容體にて呻つて居たる辛吝三郎も二日の後には忽ち平癒して迎の車に打乘り己れが宅へと引取たり、又おすりの重體も同時に全快と相成り褥掛にて荷物の取片付を指圖して居たり、但し頭の毛ばかりは急に伸ぬと見て吝三郎の手拭を姉さん冠にして隠したるは是見よと云ぬ計りなり、尤も當人へは何程渡したるかは知ねども狎合は河居を立合せて熊鷹狼の兩紳士に内談を致し慥に三百圓の御川金を出せたればは少なくとも半金殊に寄たら三分一は狎合が役得にも成たる歟、されども斯る内幕は干鰯には些とも聞せずおすりには衣服丼に手道具類を下されてお暇と云ふ事に表面を取繕ひ當人ならびに筋兵衛連印にて誤り衆禮證文を狎合河居兩名あてに取ておすりを引拂はせ、家屋は河居の名前に書替て此一埒はスツカリと落着したりけり。是に附ても腹が立た上に損をしたるものは干鰯どの、顔が好なつたものは河居惣太、一寸一儲したものは狎合三百郎、椽の下の力持で誰にも禮を言れぬものは熊鷹狼の兩紳士、猪を喰た報とは云へ放逐されながらも髪の毛と衣服手道具と取替の自由の體に成

たものは大膽もの、おすり、五ッ六ッ蹴飛されて痛い思ひは仕たれども是迄に面白い思ひをした其上に幾等かに成たものは辛吝三郎の色男、ア、世は様々にてその地位に由て内幕は斯も變るもの哉

此おすり騒動が落着して未だ十日も立ざる内に又候一大珍事こそ出來したれ其起因を尋ぬるに芳原の里に小でれと云へる白拍子あり色白く髪長く容顔まことに美麗なりければ、と迄は往かぬとも十人並の肥圓にて談判の早く分る若手なり、熊鷹長者は常に爪を磨で其上にランプを點す程の油斷なき紳士なれど婦人に掛ては又自から別段と見えて間がな隙がな白拍子の繿縷を撈して樂とせる内に去年の春フト金子にて此小でれを見初め老拍子おへその周旋にて割なき中と成り引續き八月まで語らひて居たるに、此小でれ御前は金錢の外の事ならば何事にもあれ人に頼まるれば後には引かぬと云ふ氣質、ドウデ持合せの品じやもの素氣なく斷つて男に恥を掻せるは氣の毒ゆゑとッイ御親類が一雨々々に殖る中にも某と云へる若手の俳優こそ親類中の第一とは數へられたれ。熊鷹はおへみより此事を聞て遺がに面白く無なつて夫切觸が道を切たる如く更に小でれに遇ずなつたりけり、然るに今年の三月に至りおへそ婆は其夫の笠太の翁と同道にて柳橋に來りおへみが宅にて熊鷹に面會なし「扨御贔負の小でれが唯ならぬ身と成り今は半纏の袖にて掩ひ切ぬ程になりましたが……コリヤ

旦那のお種に逆ひは御座いません……ナンノ尊老爺などば御子さまは何人あつても宜しい……其積りで萬事お手當をお願ひ申上げます……私共も當人の母公のおぬりに頼まれまして……初りに口を利ましたから何分よろしく」と持掛たり、物に慣たる熊鷹長者は少しも騒がず「成ほど小でれが水魚に成たと云ふ噂は余も聞て居たが余が子なんぞと云て持つて來ちやァ餘り間抜だらうぜ、お前がたは知まいが彼妓には隨分講中が澤山あつて既に俳優の某を現在余が宿坊の茶屋で前の晩の十時から翌日の二時まで炎來て居たのを見たものが有くらゐだもの、夫のみならず太棹の某とは切れぬ中、それだものマァ〳〵外々を問合せた方が宜らうとお前がたから母公のおぬりに云て下つせェ、良んば假に余が子に仕た所がお前がたも知ての通り彼妓を余が茶屋で呼だのは去年の八月それ切り足踏もせず呼も仕ない事は茶屋の帳面を繰ても當人の玉帳を調べても違ひは無いぜ、ソコで其八月に止つたとした所で今月でモウ八月に成る譯だのに是まで當人から何とも余へ言て來ないと云ふは妙じや無いか、二十年このかた其道に掛ちやァひゞあかぎれを切した余を捉まへて若旦那に仕ちやア驚くぜ、夫でも余が子だと親子の者が言張ならお氣の毒だが十錢も出ないから御苦勞ながらチャンと斷つて手を引てくんな、併し見ず知らずの女でも父無子を娠んで困りますと云ふ咄しを聞きやア可愛想だと思ふが人情まして關係た女で有て見りや「扨旦那小でれが是々で御座いますヨ」と世

話場の咄しをされりやァ默て居ても三十や五十の見舞を持せて遣る氣にも成うじや無いか、夫に尊公の子だ〳〵と押附られちやァ余も餘り器量が悪すぎるから御夫婦の衆折角お出で有たが御相談は聞れねエよ」と丹花を切て辯じたれば笠太の翁おへその兩人は「成ほど御尤でけす委細おぬり小でれの二人へ其趣きを申聞ませう」とて其日は歸つたり、熊襲は得意に成てエ、おへみ堂だエ小でれ親子が余を神奈川の久兵衛さんとでも思つて居るのか知らん呆れた燒廻りだぜと悪く言て二三日も立と、笠太は再び出直しておへみが宅へ來り「扨熊襲の旦那には甚だ申上にくいが御最貧の小でれが父無子を姙で今にも落去さうで困りますが堂ぞ御不便と思し召てお兒舞を五拾圓頂戴いたさせ度ございます旦那からも此間そのお咄が有たれば、おへみさん、お前さんからも宜しくお取成をお賴み申ます」と熊襲に敎わつた通りの鸚鵡返し、流石の熊襲も是には驚き扨々厚かましい小でれ母子かなと愛想も盡果て笠太に向ひ「爺さん毎度御苦勞だネ、五拾圓の見舞何にもお前の顏に面じて遣はさうが今やつた日には彼母公のおぬりが色男に入揚るかも知ないに出てオギアーと云たら直に來なせい何時でもお前に渡しませう當人母子は面が憎くつてもお前がた夫婦に迷惑をさせちやァ濟ないから奇麗に出さうよ」と據なく挨拶したれば笠太は何分よろしくと賴み置て歸つたり。熊襲は咄しの行掛より五十圓と云つたが病付になつて笠太にシヅカリと釘を差れ延引ならぬ其場の仕宜、今にもギアーと云て取に來やァせんか、口でこそ五十圓だが五十圓叫き出すには中々容易の事で無が旦は悔み旦は愛ひ途中にて孤兒の啼聲を聞ても惣身がゾッとする位で有しが、四月に成ても出産したとも聞かず、五月に成ても矢張同樣、モウ大丈夫妊娠十月のお關所は滯なく通り越たナンボ小でれ母子の者が面の皮が厚くとも來る世話は有まいヤレ〳〵危ないこと〳〵既での事に五十圓引攫る所であつた是に懲て浮かりした口は利まいよと漸く安堵の思を成て今年の八月に至りけるに笠太は突然とおへみが宅に來り今朝小でれが安産いたしたりとは報せたりける

第二十四回　駟も舌に及ばず五十圓のお灸

熊襲は急ぎ裏河岸なる穴彦おへみが方に參つたるに笠太の翁は澄したる顏で「さて旦那小でれが今朝ほど安々と産をして玉の樣な男の子が生れました、ソコデお袋のおぬりが私し方へ其報知に參りましたに由て、旦那、兼々お咄しの五十圓を彼妓に御遣しを願ひます」と吹掛たれば、熊襲は南無三寶五十圓トウ〳〵助から無つたか情ない事じやとは思へども長者と呼ばるゝ看板に對しても眞逆この期に及で泣言も云れねば大奮發にて思ひ切り革提の中より五圓札にて五十圓の金を勘定して目をねぶつておへみに渡し「オイおへみお前御苦勞だが笠太と一所に吉原まで往て此見舞の五拾圓を

小でれに渡して呉な」と命ずればおへみは直に承領し笠太も大に悅び「此お見舞を渡したらば親子ともに嘸嬉しがりませう、と禮を述べ、去らばとて笠太はおへみと合乘にて車を急がせ吉原へぞ赴きたる

おへみは夫の笠太がおへみと倶に歸り來て熊鷹より五十圓捻取て來た即ちおへみ師匠がお見舞のお使者なりと物語ればおへそは「ソリャ宜つた此お金を渡したらおぬりが嘸悅ぶで有う熊鷹には少し氣の毒だけれど是位出たからと云て減やうな身上じや無し大の虫を殺して小の虫を助くるが仲間の達引サ、サアおへみさん三人で往じや無か、幾らおぬりが吝でも御同樣三人に少なくも五圓か七圓の禮をするだらうねエ、内の爺さんが此一件じやア度々足を運だから七圓に成たら私しども夫婦が四圓でお前が三圓、五圓に成つたら三圓と二圓、それでもおへみさんお前の方が割だぜ、と取らぬ先から配當の割合を取極て小でれが宅へと赴たり。此に小でれの養母のおぬりと申すは當年五十九歳モウ雜炭を二度喰さえすりやア六十一の本卦還と云ふ年齢なれど大丸髷の濃てり白粉色氣たつぷりの若造り、抑十七の時に初めて白拍子になつてより四十年の其間三味線枕で世を渡り白粉のおぬりと呼れたる剛のもの、五十六で鑑札は返納したれども色氣は更に返納せず養娘の小でれが浮氣か余が浮氣か年は老てもマダ今時の若い者にやア負ない積だと乙な處に力身を見せて朝夕止ぬ身嗜

み、小でれが今朝しも產をして家は浚やに小女の二人目が廻る樣に忙がしい中でもおぬりは際を見て洗湯に入り歸るや否や鏡臺を上り口に出して淺黃の手柄を掛たる大丸髷の髮に漉油を附て撫附て顏から襟まで厚化粧にこつてりと塗上げ或俳優の浴衣に緋縮緬の裏襟を掛たるを着て紫縮緬と黑繻子を腹合にしたる引掛帶を締て目かし込で居る所に笠太は女房のおへそと裏樫のおへみと三人づれにて入來りぬ。笠太は今朝おへみの宅へ赴き手紙を出して熊鷹長者を招き出產の事を述べお見舞のお金を戴き其お使としておへみを遣さるゝ趣を永々と演說して夫よりおへみは彼五十圓に水引を掛たるを出しければ、おぬりはジッと上包に金五拾圓と書て有を見て不承知な顏をして「笠太さん度々お世話樣で有がたう、おへみさん御苦勞さま、ソコで此五拾圓はお見舞に下さるんだと仰しやるが、ソウするとお手當の方は堂なるんですか、と以ての外なる挨拶に笠太はムッと癪に障り藥鑵頭の額に鼠筋を出して「チイおぬりさん、何も余しがお前に恩を被ると云ふ譯じやア無いがお前にやア賴まれるし小でれチャンは可愛想だしする所から面白く無いお使ひだと思つたが此三月おへみさん宅まで態々出向て熊鷹さんのお目に掛つて是々だとお咄しを仕た所が、ネーおへみさんお前も聞て居た通り取手も附ぬ勢ひで丸で蹴附なすつたのを余しが段々と譯を言てお賴み申した末ソレでは余しやおへみさんの顏に對して大枚五拾圓と云ふお金を見舞に遣らうと云ふ事に咄しが極て今

朝お前の處から知せて來に出て直と出掛て此迺り戴て上た次第、ナニモお禮を貰ふにやァ及ばぬがお禮の詞ぐらゐは受るだらうと思つて居たに、お前コレじやァ不足だと云ふのかネ 「左樣サお前さん方に御心配を掛た所は誠に濟まないが、何も是が狗や猫が子を產のじァ有まいし人間がお產をするのに五十や百のはした金で足るものじやァ無いヨ、當座のお見舞は是として夫から七夜枕直し引込で居る中の入用孩兒の養育乳母の給金少なくも三百圓はお貰ひ申さにやァ方が附ないよ、黑の羽織を着て藝者を呼捨にする旦那だもの姙ませりァ夫位な手當は當然だとハイ余しやァ思ひますネ 「おぬりさん、少し言憎い口上だが是が慥に熊膽さんの子に違ひ無と云ふ事ならソリャお前の方から言れ無ても余しも居りやァ笠太さんもおへそさんも居る事だから立派に手當を仕て貰つて上るがネ、此家の小でれさんじやアソウ立派に云ない所が有うじやァ無いか、何も余が彼妓の身性の事を此で云にやァ及ば無いがお前だつても四十年の長の年月藝者を仕た人だもの口の掛り鹽梅や玉の附工合でもコリャ是だなと云ふ勘が附ない事も有まい、今も笠太さんが云た通り此五十圓は出し惡い又出させ惡いお金の所を申さば無理往生に出させてお前がた母子の顏を立て上た積りの所がお前の忠組がソレじやァ案外だねェ、と兩人に一本さゝれて遺のおぬりも是は失敗つたと內心では思つたれど 「ソリャ出先の事ァ請合れないけれど家の小でれに限つちやアソンナ怪しい事は些

とも無い積りだネ 「サァ夫が親馬鹿で「町內で知らぬは亭主ばかりなり」と云ふ文句の通りかも知れ無いよ、と言たが側に夫の笠太が居たに氣が附て少しハッと思つたれど平氣にて「現にお前余しとおへみさんとが武藏やに居た時は兩人とも十五の春からお客は御座れ藝人は御座れと惡食を仕て居たけれどアノ嚴まし屋の婆さんが些とも知なかつたぜ、お前だつても其通り十四ぐらゐから浮氣を仕初め十七八時分にや余しの色男の數は琴の絲だけあるヨとポン、、云て居たけれど御母さんは丸きし御存じ無しだつたぜ、夫だもの是ばかりは決して口廣く言れ無いヨ併し違て五十圓で不足とお言なら、ネーおへみさん、一旦持て歸つて熊膽の旦那にソウ云うじや無いか 笠「それが宜らうと既に右の五拾圓の包を仕舞さうにするを見ておぬりは其包を押えて 「何も此お見舞を戴かないとは云ないが、夫にしてもお前がたは家の小でれにやァ外にお客が有から熊膽さんの肩を持て彼人の子じや無いと難癖を附て下さるの、御信切な事ですネ 「左樣サ熊膽さんの子じやァ無から無と云ふに何も不思議は有やァしまい、オイおぬりさん、幾ら心安つてもお使に來た穴彥おへみ胡化に仕ちやァ宜ないぜ、ドコの國に十二か月も十三か月もお腹の內に居る子が有るものかネ 「其事さ、エ、おぬりさん、熊膽さんが小でれチャンに逢たのは去年の八月切だらう、よしか八月に止つたにしても五月が產月だらう、初產だから一月延たと負て遣ても六月にやァ是非とも產

れる筈じやァ無か、夫が八月の末に生れちやァ十三が月目で丸十二ケ月の上お腹に居た勘定、コレが熊鷹さんは掛合が無と云ふ動かぬ證據、サア堂だェ是でもお前云分が有かェ、と拔指ならぬ月の勘定。おぬりは磴と往詰り演劇でならばサア〈〈〈の詰合で惡事露顯と云ふ所だがソコはおぬりが年の功 おぬり「ソリヤお前起る時に起て寢ときに寢て養生したらチャンと十月目にて生れるだらうけれど、藝者だもの夜更さ更まで起て居てお酒を飲だり物を食たり殊に寄と夜明しをする不養生、ソウ素人の樣に机帳面に十月目でキッと生れるものかネ、一月や三月は早く生れたり延たりするのは當然サ、と言開いたるは時に取て天晴の口上なりき。兎も角もと咄しは右の五拾圓にて目出たく納まりければ三人は小でれを見舞ひ其序に孩兒を見たりければ獅子鼻重箱面の熊鷹には些とも以ず鼻筋の通つたる中高なる面ざし玉の樣なる子なりしかば おへみ「ヲヽ、宜い子だね女の子に仕たい位だ大きく成たら嘸好男に成だらうネ おへみ「ソウさ顏立の宜こと、ヲヤ誰かに似て居よ、ソウ〈〈俳優のあつひまやにソックリ生寫しだネエ おぬり「余しもソウ思つて居るヨ熊鷹が委細の事をおへみに聞て且は怒り且は悔しがつたれど五拾圓は全く取れ損の死金となつて更に其甲斐なかりけり

第二十五回 河居惣太が盛衰の由來

時に早房君貴公の所へも河居から案内が有たかネと熊鷹長者が物案じ氣なる顏色にて問たれば早房は打諾きて 早房「有つたよ然も來る九月七日の日曜日を以て日暮里の別莊へと云ふ文言であつた大かた君がたへも參つたらう 熊「當家は勿論僕の所へも同樣到來したヨ 早房「ソウだらう何でも六日七日八日と三日續けてお客を招待し初日が貴顯がた二日目が懇意の紳士連中三日目が貧乏中の遊び友達や出入の藝人社會だと云ふ噂だが大層な催らしい 熊「ム、そうかネ夫にしても彼空蟲の河居惣太めが俄に財産家に成たと云のは堂いふ譯だらう一圓合點が往かぬが眞逆に山陽鐵株の贋造一件に關係したでも無らうが 熊「と云て銀行の重役でも無から金庫空缺と云ふ仕事も出來まいが何にしても金持に成たには驚くネ既に兩三日前に河居が自分の名前に書替た正金株と日本株ばかりが兩方で五百株郵船が八百新鐵が千二百と慥に見て來ものが有ての咄し 熊「夫じやァ公債だつて幾らか自分の物に成つて居るだらうし其上に此節は頻りに深川や芝邊で虞い地面を買込むと云ふ噂さもあり 早房「第一と三井の二軒に當座と定期に分て十四萬圓も預ケ金を振込んだと云ふは疑も無い實說と云ふ事だ 熊「さうだらうアノ勢では慥かに代物が有る手口だネ融通の爲に見本にする山師の女關じやァ無

ぜ 耳「僕も其通りの鑑定を下したが堂して一時に其身代が出來たらうか夫が不思議さ 星「彼奴が六七年零落した内に拵えて密に溜込で置たので有うか 無「ドウして〳〵千や二千の金なら夫れが出來やうが何拾萬と云ふ金が内證で稼ぎ溜らるゝものじや無いワ 星「シテ見るとコリヤ出處が慥に有ネ其に付ても彼奴を高山會社の社長に仕て置たは今と成て見ると良かつたネ 耳「そうサ彼時にやヤ干鰮に談じ附られて否とも云れず實はお荷物に仕て居たが 無「だから人間と云ふ者はいつ何時運が向て來か知ないが夫にしても河居が一夜撿校の俄分限に成たのは不思議だ、何にも不思議だ〳〵と不思議の噂さ取々の所に狎合三百郎は入來り 伸「時に諸君の所にも河居から來月七日の案内が有たらう 無「有たヨ夫に付けても河居が何で俄に財産家に成たらう不思議だと今も今とて其噂をして居る所サ 伸「コリヤ諸君にも知まい其を委しく知て居るものは恐らく此では此狎合三百郎一人だらう 星「大そう立派に名乗たが夫じやァ君は其財産に付て關係が有らしいネ 伸「イヤ關係と云では無いが其財産が河居の名前に成ことに附ては實は先月中から極秘密で立入て漸く一週間前に落着したに由て是から公然河居が世間に弘めをする事に成つた譯さ、夫で僕はチャンと河居家の相談人とモウ約束を極てお出入を一軒拵えたが、ナント早房君早からうがネ 星「ソリヤ早かつた實に君の素早には驚くネ 無「其で河居の財産は何處から降て來たか湧て來たか聞せ玉へ 伸「何も今日と成ては素よ

り隠すにも及ばぬ譯だから一部始終を物語らうが實に夢を見た樣な咄しでけすぜ、先年日報社の櫻癡老人の醸案を默阿彌翁が名筆を以て書直し人間萬事金世中と云ふ名題で新富座で大入を取た芝居の通りの咄し、マァかう云はなしだ、と說出したる概略の物語は

今を距こと百年ばかり前に近江の國に河居惣兵衛と云る豪家あり數代相續したる舊家にて田地田畑山林秣場なども夥しく所持なし酒造、干鰮問屋、吳服店等の出店を諸所に開き諸大名の御金御用達を勤めたるに此惣兵衛は若き頃より理財の道に長じ商賣向に掛ては度胸よく働きたれば富るが上に益々富て持○長者鏡の幕の内に姓名を載らるゝ迄に稼ぎ出たる人なりき此惣兵衛に二人の男子あり長男は河居惣太夫とて（即ち河居惣太の實父なり）惣領たるを以て本家を相續なし次男は河居惣助とて酒造株干鰮問屋株等を相續したり。斯て惣兵衛は右の如く二人の子供に家督を分て譲り天保の初め頃に卒去てければ惣太夫惣助の兄弟は睦く銘々の業を營み何不足なく暮しける に嘉永安政文久の頃に至つては世の中の騒しきに連て斯る豪家には自から領主の御用金も多く掛り諸運上も強く成たりければ業體も次第〳〵に衰微の色を顯はしたりき。中にも本家の惣太夫は町人ながらも少しく義氣ある人物にて人の難儀を救ふを樂みとせし程に其頃の有志家書生浪人などを助など仕たるにて一時は領主の嫌疑を受たる事もありて其爲に世間の信用も先代の時程には

厚からず營業も思はしからず成にけり。次男の惣助は元來活潑なる性なれば專ら商賣向に精出して由斷なく稼ぎたれども是以て本家同樣思はしからず漸くに豪家だけの體面を保ち居たる所に御一新と成り商業上の株は有ども無が如くに成行き剩さへ諸大名への貸金は公債處分と相成たれば河居兄弟は兩家とも大改革をせでは叶はぬ場合と成り惣太夫惣助は兩人とも聊かづゝの根城を江州に殘し置き惣太夫は一子の惣太を初め家族を引纏めて大阪に出で惣助は北海道に赴き銘々に財産を賣代なして貯えたる資本にて一旅上んと涙ながらに袂を分ち東西に分れたり。惣太夫は大阪にて運に叶ひ商賣の駈引も都合よく數萬の金を得たりければ惣太を連て大阪より横濱に移轉し生糸の賣込商となりて稼ぎける內に明治十年五十餘歲にて卒去りぬ此時惣太は十八歲の少年なりき。却說惣助は北海道にて凡そ十ケ年の間或は農業或は坑業と一心に働きたれども運命の到らざるにや兎角に其目的の齟齬せるのみなれば是と云て仕出せる事も無く愈々艱苦に陷りければ横濱なる兄の惣太夫に無心を云ひ送つたるに慈愛心の深き惣太夫なれば其度毎に才覺して用達は仕て呉たれど是も餘り度々の事にて曾て一度の返金さえ致さねば何に兄弟の中なればとて最早無心も言ひ兼て惣助は只管艱難に陷つたれど更に屈する色なく今度は方向を變て海産物に手を下し就中干鰯は幼少の頃より手掛たる業なれば其賣買を先途と稼ぎて勤めたりき。斯る所に惣太夫死去の

凶報惣太の方より達しければ惣助は大に驚き直樣郵船に打乘り横濱に來り悲嘆の涙に兄の法事供養に列なり中陰も明たる上にて家事の相談に預たるに本國の江州には一族親類も多くあれど此地には惣太と惣助と叔父甥の二人のみなれば惣助は河居の生糸賣込店を他人に讓らせ野毛にて然るべき住居を求めて惣太母子を引移らせ月々の暮向惣太の修業料其外は何程づゝと定め有金財産其外一切の事を銀行に托し惣太が滿二十一歲までは誰も手を附ることの成らぬ樣に仕置て北海道に歸つたり、此時は惣助が尤も金錢に用缺たる頃なりしかども一錢だに兄の遺産を申受ざりし潔白には惣太も深く感じ入たりける。光陰は矢の如く惣太は滿二十一歲に成たれば去らば是より一本立にて商賣をなし其身の計を立べしとて北海道に赴き叔父の惣助に其事を相談したるに惣助は快よく承知して直に惣太と共に横濱に來り後見を解べき手續を成し一切の財産を帳簿に引合せて惣太に渡したり。其後惣太は商用かたぐ〳〵を兼て北海道に赴き親しく叔父惣助が營業上いかさまにも資本に差支えたるを見て尤も氣の毒に思ひ横濱に歸りて後に母とも相談に及び父惣太夫より讓られたる財産を二ツに分け其半を手許に殘し置き其半は亡惣太夫より弟の惣助へ讓られたる形見なりとて贈つたるに惣助は中々是を受けず種々と母子にて說き全く兄なる人より弟へ讓らるゝに甥の物を叔父が押領するなど云ふ嫌は有べからずと達て申聞たれば去らば兄の形見忝なく頂戴

すべし此資本にて商賣の運に叶ひなば何時にても惣太が入用の時には返すべしと云ふ一札を入れ厚く禮を述べ惣太の厚誼に感じ嬉し涙を流して北海道へは歸つたり。サア是からが面白い所だが一寸一ぷく

第二十六回　思ひ掛ない豪家の再興

「成ほど面白い咄しだが夫から堂したネ」仰「サア其先が斯でけす扨も河居惣太は父惣太夫が殘し置たる財産の半を叔父の惣助に與へ殘りの半を以て横濱にて引取商の業を營なみけるに原來この惣太は普通の教育も一通り受たる上に英語は外國人の許にて學び東京の商法學校にも入て卒業せし漢なれば若年ながらも外國品の引取は差支なく功者に出來て末頼母しき商人かなと京濱の間に於ても評判の人なりしが、明治十四五年の頃より紳商の附會をなし自から社會の有樣をも實驗し殊に經濟の事を好みて論じたるに到底銀貨と紙幣と同じ價の通用に相成らねば日本の經濟も立ず商業も盛には成ぬは知たこと政府にても理財の目的は此に在りと信じたるものから大利益を占るには相場の高い銀貨を賣て廉い紙幣を買て置に限る日歩を拂つても終ひには莫大の利が有は必定なりと見据を附て專ら洋銀相場に從事して初の程は利益を得たり

しが朝鮮の暴動一件の爲に俄に銀貨の價が昂騰つたる爲に情なや惣太の身代は皆その損の爲に大半摺潰したりければ此上は詮方なしと横濱を立退き十八年の暮に東京に來りて何かの商業に關係しては居ども復前日の俤も無く零落商人とぞ成にける。却說叔父の惣助は嘗に惣太より贈られた る資本を以て北海道に歸りて再び海産物の商業を營なみたるに是まで十餘年間辛苦したる効の顯れしにや又は利運の到來したるにや支那へ輸出の品物にて一度その利を得てより引續き利潤のみ多く凡そ惣助が手を出したる商賣に利を得ずと云こと無く儲るに從て手を廣げ手を廣ぐるに從て儲かりければ石炭山硫黄坑あるひは耕地漁獵場など割合よきを撰みて買入たる程に其利益は莫大になり十年を出ずして三十餘萬圓の身代とは成たりける、然るに惣助の妻は數年前に死去り引續き三人の子供も同じ流行病の爲に故人と成たりければ惣太は老の身の世を味氣なく思ひ誰に此の身代を讓るべき故郷なる江州には親類も許多あれど何れも不實ものゝ寄合我が難澁の折節には唖だに嘔掛ず偶々金子の才覺を頼めば有り餘つたる身代にて「當節から不景氣で」と門口にて斷つたる薄情もの何しに彼奴に與ふべきぞ唯我身代を相續すべき仁は甥の惣太のみなりと思ひ込み密に横濱東京の風聞を探らせたるに惣太が洋銀相場の失敗より今日の零落すぐに讓渡さんと思ひしが、否々貧乏しても乙に見識ばつたる惣太ソレでは濟ぬとか何とか辭退しては面到なりと考へし

かば夫より惣助は寄々に不動産を他人へ賣渡しては公債證書に替置き商店も望の人に譲りて黄金となし故郷へ引込むべしとて懇意の向に暇乞を成し雇人等へは夫々の手當を與へて此年頃住馴し北海道の地を去り一旦横濱に來り鎌倉邊の風景よき所に然るべき人の別荘のありけるを買求めて居住の地となし我が一生を送る料には是にて十分なりとて所持金の内三萬圓だけを引分て横濱の第二銀行に預け置き其餘は公債株券預け金貸金と盡く其目録を拵へて是を携へ突然と東京に來り河居惣太が宅に來り「扨我等こと老年に及びたれば是々の覺悟を定めて鎌倉に隱居いたし申べし、就ては其許を我等が相續人と相定め我等が財産別紙目録の通り惣金高三十八萬圓餘改て悉皆譲り申す、我等は別に三萬圓の隱居料を蓄へ居れば生涯は是にて澤山なり、其許は此金にて何商賣なりとも見込を立て十分に力を伸さるべし原々此金は其許より前年惠まれたる資本にて稼ぎたる金なれば其許に返すも同樣辭退に及ばず受取申さるべし、故郷には親族も許多あれど不實ものには一錢たりとも譲る料見は更に是なし、其許は我等が第一の近親と云ひ兄にも度々の見續を受け其許ばかりは昔を忘れぬ信切もの、夫に此七八年零落しても更に我等に其難儀を申越ざりしは見所のある人物なれば我等には窮竟の相續人、たとひ商賣の都合あしくして此金を全く無すとも我等決して遺憾には存じ申さぬ、併し商業を營むならば獨立で稼ぐべし權門の勢力に由て假にも

濡手で粟を攫む樣なる考へを起すべからず、高山會社の社長も直に辭職すべし其株金の拂込も立派にして其株を欲いと云ふ人に遣て仕舞へ、相應の邸宅を搜して早々引移り別荘も求むべし、是迄世話に成たる人には篤く謝して十分の禮物を贈るべし、又年ごろ懇意の貴顯紳士を招きて盛なる饗應を成し夫を機會として以後は次第〳〵に遠ざかりて交際を一通りに止むる樣にせよ、と丁寧に教へ諭して惣助老人は右の三拾八萬圓を悉く河居惣太に譲り渡し其身は飄然として鎌倉の隱宅に歸つたり。惣太は思も寄ざる叔父惣助の相續人となり昨日までの零落に打て替つて四拾萬圓の大盡と相成たれば是は夢かや現かや今にも黄粱の飯が出來申たと呼起されはせまいか夢ならば何時までも覺ずに居よ夫とも狐の仕業じや無かと眉に唾を塗たり額に藥を附たりしての大悦び夫より公債株券その外の書替の都合もあれば狎合三百郎に其取扱を頼み叔父の差圖の如く邸宅を買入れ別荘をも求めて歴氣たる金持の旦那に恢復し扨こそ招待狀を發したるなれ

此物語を聞て熊鷹狼早房の三人も肝を潰し驚嘆實に不思議だ全で西洋の小説に有さうな咄し堂も明治の日本人にはソンナ事は無はづの樣に思はるゝネ　爲その事サ惣太の親父の惣太夫が弟に度々見續で遣たからが一體人情に背いて居るが其後で惣太が大切なる身代の半分を垢の他人も同樣の叔父に贈つたと云ふが怪からぬ咄しだ其通りに金錢を粗末に心得るから其罰でアノ身代を忽ち棒に振

たのだらう 早馬「サウとも〳〵夫に又分らずやの親玉が叔父の惣助十年も二十年も北海道の寒い所に居て稼ぎ溜た金を身寄でも何でも無い親身の甥に讓ると云奴が有ものか 熊鷹「イヤ〳〵其やァ其惣助老人が年を取て氣が狂つたのに相違ないぜ假初ならぬ四十萬圓の大金を甥に呉ると云ことは人情に悖つたる仕業 馬「これが眞人間の根性ならば死る間際までも持た金は四文も離さず眞と讓るべき者が無けりやァ紙幣でも公債でも株券でも一文も殘さず棺桶に詰て冥土に持て往が是れ當然の人情と云ふもの 押合「所を惣太夫も惣助も惣太も其人情に外れて居る變りものゝ寄合ゆゑコンナ馬鹿々々しい事が出來たのだらう 早馬「何にも〳〵變りもの揃ひだから是から河里惣助河里惣太と苗字を取替させやうぜ 馬「夫よりやァ人買惣太と仕ちやァどうだ 押合「サウすると梅若の穴を惣助爺にして大金を持て居るのを承知で惣太が隅田川の堤で殺して其金を奪ひ取て見ると書付で叔父と云ふ事も其金も惣太に遣うと思つて持て來た事も分つて惣太の愁嘆を見せる 早馬「其次の幕が惣助の娘が親の行衛を搜して東京に來て梅若で親の幽靈に出遇て人手に掛つた事が知れる夫から親の敵を搜す爲に女郎になると所狆で來る色男が親の敵の惣太 熊鷹「ソコデ其敵が知るにやァ堂いふ段取になるネ 押合「それにやァ向島の花見の幕を賑かな淨瑠璃にして……早馬「否々其に淨璃瑠を遣つちやァ後で困るぜ 押合「ナニ〳〵困ら無ネ目先を變るにやァ是位で無つちやァ見物に利ないヨ 早馬「デモ敵討まへの淨瑠璃じや氣が抜て間抜だネ 押合「何が間抜な事が有ものか 早馬「有とも〳〵、と言乎ふにぞ狼は側より 馬「コレサ〳〵兩公芝居の仕組どころじやァ有まいぜ 熊鷹「肝心の河里、イヤサ河居の芝居を見に往ことの相談を極樣ぜ 馬「尤も〳〵廿七日には是非とも揃て往て思ふ樣彼奴を持上げ 熊鷹「何でも是からは我々の仲間の足を洗ふ事が出來ない樣に仕向なくつちやァ詰ら無ぜ 早馬「サウで無けりやァ是まで彼奴に突合て居た甲斐が無と云もの併し狆合君こんな事を彼奴に通じて呉ちやァ困るヨ 押合「大丈夫〳〵機密を洩す樣な僕じやァ無いヨ 早馬「まづ是で金穴が一ツ殖て來た

第二十七回 一言も無い紳士の字義

此は河居惣太の別莊この程買求めたる一搆え流石に前住が物好して拵へたる丈あつて座敷の普請間取の都合庭の模樣前栽植込に至るまで風流を盡して清雅の趣を存したる安排は當節仕入の受負仕事とは格段の違とぞ見たりけり。此日の來客は熊鷹長者 狼 大盡早房先生狆合學士を初めとして是まで河居が交際を成たる東京流行の歴々假ひ内證は兎も角も外向は立派な一粒撰およそ十餘人がズラリと居並びたる體は天晴旦那の玉揃ひ何れも尋常ならずと拜まれ玉へり。お取持には柳橋の小がし（熊鷹の所狆）おちやめ（狼）さな子（早房）新橋のをづる（狆合）小べか芳町の小またひき八等

の美人揃ひ、お座敷の周旋役には烏鵲亭のおせわ熊坂屋のお範穴倉屋のおたぬ往來亭のおとり雀屋のお欲穴彦おへみ蛇のおひろ笠のおへそなんど云ふ天保年間に盛を見せたる老功の兵ものたち此を先途と取持て面白をかしく饗なしたり。料理向は花屋敷なる常盤屋の仕出にて山海の珍味に善美を盡し座敷飾りは相彦の受持膳椀其外は山住の調達なれば何一品として點の打所なく行屆き實に裕福の色見て奥ゆかしく一座のお客は何れも興に入たりける

熊膽狼の人々は昨日までは眼下に見下して儒口の相談には外樣あしらひに仕て遠ざけたる河居惣太が俄の富限に打て變り「コレハ〳〵河居さま夫じや恐入るマヅ〳〵御座に附せられて……」「目出度御杯を頂戴仕つりたい……」「實に御出世の段は恐悦千萬……かく相成るが御當然でけす……甚以て失敬ながら一時御家政御改革の節には格別の御懇命を蒙つた輩が疎遠に致したのは怪からぬ譯で御座る人情の習ひとは申す者の左樣なものでは無い……我々共は尊公樣は早晩必らず御回復なすつて我商業社會で牛耳を執べき方と十分に信用して是まで何暮の御相談を願つて居たが今日と相成ては實は鼻が高う御座る他の奴等に「堂だ我等が平生より尊敬したる河居惣太君の御發達を拜見したか、と衆人の中で論破て遺が愉快でげすテ「イヤ御尊叔の事を承はつて感服の餘りに思はず涙を流しましたネ所謂積善の餘慶とは此事で御座りませう「イヤサ夫が御尊父樣は申さば御兄弟の御

間柄お兄樣もマア有中の事として尊公樣が御尊叔樣を先年お救ひなさつたが實に非常の義舉凡人の企て及ぶ所で無いテ「その又義舉を感じて御尊叔樣が今度の美舉が是以て世間の守錢奴が夢にだも想像し能はざる所「兄弟叔姪の間みな仁愛義俠を以て立てお出なさるとは昔しは知らず中世以來は我國にも西洋にも曾て聞ざる美事永く歴史に存して不朽に傳へねば相成らぬ事柄と存じますネ「いかにも其通り殊に此御一家の美談は商人社會の龜鑑として商法會議所に其記錄を保存いたし度ござる「我々ども少でも此御家風にあやかり度ネ「是から先は猶以て御懇意を蒙り「商法上の事から萬端御相談を願ひ上ます「從前よりは一層も二層も御別懇に預り諸事御腹藏なく仰合されまして「何分ともに御賢慮を仰が無くては相成ませぬ、と追縱輕薄のダラ〳〵他から見れば腋の下より冷汗が流るゝ位なれど原來この連中の交りは黄金に在を以て襲に河居を輕蔑したるも貧乏を輕蔑した理由いま又河居を尊敬するも富裕を尊敬する理由なれば恥とも思はねば又はづかしいとも更に思はざる心の程こそ淺間しけれ

其中に叔父の惣助老人は好まぬ事ながら近づきの爲にとて此席に出たれば熊膽狼等は又一入の追縱ばなし狼が「是からは當家の御主人こそ東京にて紳士の泰斗と仰がるゝ御方で御座りますと云を惣助は聞咎めて惣助「ムヽ貴所がたは先程よりシンシ〳〵と仰しやるが一體シンシとは堂いう譯の者

で御座りますネ私しは原々田舎者で學問を仕た事も無いから分りませんが……と問掛れば 耳「左様サ深い意味は存じませんが町人の中で身分のある歴々を此節はシンシとかシンセウとか申して尊敬いたしますネ 惣助「ハヽァ左様で御座るか、してシンシとは堂いふ字を書ますネ 耳「エヽ蓋か人扁に申と云ふ字（仲）を書く樣でげす 惣助「フウ人扁に申それじやシンシと云ふは皆人眞似をする猿の如きものだと申す意味らしう御座ります、と云にぞ熊膽は堪り兼て 熊膽「アイヤ人扁に申じや無い糸扁に申と云ふ字で御座ると云へば惣助は打笑ひて 惣助「人眞似をする猿ならばマダしもだが絹糸渡りをする申じやァ愈々以て紳士と云ふものは浮雲う御座るネ、私しも折角骨を折て拵えた身代を渡したからは堂か惣太に紳士の仲間入をさせ度はござりませんヨ人眞似をせずとも絹糸渡りをする猿にならずとも先づ眞人間に成て食られませうに由て堂ぞ紳士だけは御免を蒙らせます是に就て思ひ出す事が御座る私しが若い時分に父親の惣兵衛が兄の惣太夫と私を呼で「貴樣たち遊ぶも宜が旦那で居よ通人になつては往ないぜ、と申ましたが今仰しやつた紳士とやらも何だか遊びの通人に似て居やァ仕ませんか、と齒に衣きせぬ紳士の講釋一座はぎつくり銘々が胸に當つて一言なく互ひに笑ひに紛らしたれど五寸釘を打れたる心地ぞしたりける。早くも夫と覺つたる穴彦おへみ「モウ踊の支度が出來て御座いますが宜しくば初めさせませう「宜ちう〳〵シテ貴樣も踊るのか「イエイエ踊の方は花柳おひろに仕せて置て私しは地方「フウ貴樣河東節の師匠だが常磐津も出來るかネ「出來ます〳〵是でも四十年前は常磐津兼太夫の一番弟子常磐津文字萬と云た立派な師匠でしたヨ「サァ〳〵早く初めて〳〵

戻駕色相肩

あら玉の年の三歳を待わびて待るゝ顔に待顔を合せ鏡の蒲團さへ色でもてるか四手駕……「ヘエン罷出たる者は東の與九郎と申す法かきにて候「ヘエン罷出たる者は難波の虚呂作と申すえらい法かきにて候「ァヽこれ〳〵何ほお主が難波〳〵と云ても東京の樣な駈引は出來まいが「イヤ何ほこなんがさう云はんしても東京には又大阪の樣な相場は御座んすまい……三下「おらは原來つかわれものよ今度このたび召れた氣轉きかせて智恵の輪だして遣ぞ白紙偽書地藏衆生濟度に欲がある晩に御座らば金もつて御座れ金は多かれ利は太かれよ忍ぶ巧の其からくりは欲の奴の通りもの「サァ是からは相手の鯰が無れば咄されぬ「コレ此子が泥鰌でなくばなァ「そんなら余が泥鰌ゆゑ其相手に成ぬかへォヽしんき「泥鰌〳〵と澤山さうに云てお呉な譯見習ふてやがて惡所を島原のませより初る藍の花そとで威張ど内では小言ほんに身も世もあられ降る雨か地震の用心に幾度通ふ玄關まへ雪の塵まであぢきなや……

第二十八回　色欲二道は内證の商法

斯て河居悠太は叔父悠助の教訓に從つて高山會社の社長を辭職し是まで己れが名前に成て居たる株數に相應する拂込は奇麗にして後に其株に熨斗を附て早房利彦狎合三百郎の兩人に贈りて我名を除き其外熊鷹狼等に對しての義務も十分に盡し畢り目立ざる樣に從來の關係を薄くして遂には一通りの交際に止めたり

夫とは變つて熊鷹狼の連中は此面白き時節に稼がいでは稼ぐ時節は無ぞと手の屈くだけは手を廻し算段の出來るだけは算段を運らして切て廻れば内輪の遣繰はいざ知らず當時日の出の流行紳士、それに連て早房狎合も何所をどう稼ぎ廻るか毎日二人引の人力で東京市中を蛛手十文字に駈させて忙しさうにご見えたりける。然るに是位の豪傑でも又色と欲とに掛ては自分で孔を穿て自分が飛込む樣なる事のあるは不審議、ある日の事なりけるが狼は密かに熊鷹に向ひ「時に君に相談するも少々面目ない次第ながら何なる名醫も自分の病は療治が出來ずに他人に賴むと云ふが當然の理り是非とも君の智恵を拜借せねば成ぬ内幕の一件が起つたと云は實は僕が所狎のおちやめでけすが最初は一寸とした當座の酒落で有た所が妙な往掛りからモウ三年越に成て今じやァ打拂と云ふ譯

にも往ず甚だ困り切て居ると此程からおちやめが僕に向て「扨旦那この節は目星い藝者は引く事が流行てお房しげ松お糸おとわ千吉と皆が立派に引て仕舞ひますに私し一人が取殘されて盆やりと仕て居るのは餘まり氣が利ぬ樣で堂も複を取て柳橋が渡り悪う御座るに由て是非とも引せて戴たい夫が出來ずば據なく田舍へでも往て稼ぐより外に分別が御座りません」と決心の上の談判、コレにやァ流石の僕も辟易して色々と辯舌を振つて說諭して見たが中々承知せず寧そ當人が浮氣で内證の色男が有とか兩親が悪黨で底鞍を伺とか云ふ次第なら却て手切の談判が附けども素よりサウで無い丈に始末に困りソコで内々心底を探て見ると自分が引込でも唯で居るは冥利が悪いに由て抱の四五人も置て稼がせ度と云ふ樣子らしい尤も其出入の勘定とも都て僕の差圖に任せて當人共はカッ〳〵見供なく暮して居られさいすりやァ宜しいと云ふ料見らしいが堂したもので有うか世間の長袖連中見た樣に妾宅を構へさせて唯で置のは不經濟だから藝者屋をさせ樣かとも考へるが君のお說も伺ひ度ござる、と相談を掛たれは熊鷹はハタト膝を打て熊鷹「ソリャ妙だ君がサウ内幕を咄して下さりやァ僕も亦内幕を白狀するがネ實はコウだ、御承知の小がしネ彼奴も僕が最負にしてからモウ全一年に成に由て頃日僕に向て矢はり同樣の請求を申出した次第ヨ、僕の事だから曖昧で因循にして置うと思つたが中々先方の決心が強くて到底引せるより外に分別無しと云ふ場合にまで談判を突詰られて

僕もモウ今では動きが出來なく成たと思ひ玉へシテ見ると是が柳橋の四五人が陸續と足を洗つたのが我々に對する請求の機會を與へて僕の小がしと君のおちやめが内々申合せを仕て所謂聯合政略で向つた事と見える哩、尤も小がしも引込んだからと云て世間のお妾見た樣にお粧をする外はやまと新聞の續き物を讀のと洋犬に藝を仕込のと猫の蚤を取て遣るが役目だと云ふ樣な榮耀は仕たく無い何でも自分に出來る事なら働いて旦那の爲に稼ぎ度との心願併し藝者屋は世話だから宜りやァ待合か旅籠やが仕て見たいらしい、夫で堂したもので有うか慾つかソンナ商賣をさせて損をするよりやァ毎月の掛りを成たけ詰て小サな宅に置た方が割だらうかとも考て見たが藝者屋待合と云ふものは少し資本が續きさへすりやァ利益は莫大あるに相違ないもの失れを知ながら行ないも馬鹿々々しい譯であると僕も内々思案最中さ、と御互ひに打明て見れば同じ請求おなじ場合、イヤ斯なつては御同樣の手療治には往まい矢張早房と狎合に相談して同人等の考案を聞て見やう、ソレが宜らうと一決して早房狎合に相談する事とはなりぬ

狎合は膝を進て「ソリヤ至極宜からう僕は斷然營業の事に御贊成いたすネ 早房「僕も同案だネ一體外妾を何にもさせずに置と云ふが物の間違の出來る基です、成ほど商賣をさせりやァ或は損をする場合も有うがソリヤ慣ない商賣をさせたり又その帳面尻を押て締りを附る者が無いに由て起ると云

もの 狎合「その通り〳〵慣たる業をさせて締りが附て居りやァ損の往べき筈が御座らぬ、殊に僕が考る所では藝者屋待合旅籠屋は實に當春が尤も利益を締る時節でけす、ナゼと云て御覽じろ此十一月に議院開設になるに付ては先つ貴族院に出頭の五仙議員ばかりが四十人いづれも長者大盡ばかり夫から集議院が三百餘人その外府縣の長次官或は傍聽の人々を合せてザット千人ばかりの歴々は一時に東京に集るでけいせう 早房「所で先づ概算して八百圓取の人が四百人、四八三十二で三十二萬圓この内で西洋服時計に三割引た所が二十二萬七千圓は交際費に成ますネ 狎合「凡そ議場の習として、勝ば得意で飲み、負れば不平で飲み、協議するとて飲み、相談打合せで飲み、懇親會では尤も飲が歐米各國みな其通り我國とても同樣で有うと思はる、「ソコで其場所は新橋の南北が一番手近ゆゑに十の七八は新橋に集まると考ねば成らぬ「然るに新橋の白拍子其數多しと雖ども大小併せて三百人に過ず是も需用供給の經濟の道理で今日には敢て無駄なる豫備兵も居ないと思つて宜しい「其所に八百人の七割か六割ズット内輪に積つて其半數の四百人が新橋に押寄ると見れば百人の白拍子が新橋で供給に不足を告るは必定でけす「又旅宿とても其通り帝國ホテルが立派に出來て居ても寢起に調法な日本風の旅宿が有のに不慣の西洋住居を好む樣な變物は少ないに由て兩院の議員たちも大抵日本旅宿を議院の近間に定むるは知切たること此時に當つて氣の利た旅宿は是非とも欲い、お客が輻

輳するは勿論でけすぜ……否々待合は宜ない……料理屋も宜ない……旅籠屋に限る……旅籠屋で料理を旨くして寢泊りは勝手に出來るが極めて客が有ますぜ「又藝者屋も四五人位の抱じあァ妙は無い三四十人は置ねば經濟に取て損だ、既に赤坂の如き所でさえ一軒に廿人は置てあるじやァ御座らぬか、少なくも二十四五人は抱えさせ玉ふべしだと平に勸られて熊鷹狼は「然らば旅籠屋は小がしが支配人藝者屋はおちやめが支配人と成て内實は兩人共通の商法、我々の入用が浮て當人どもの暮が浮て其上に是々の儲があれば資本の三割五分には大丈夫きつと廻るコリヤ妙だ、と算盤パチ〳〵彈き詰て其事に取極め小がしおちやめの兩人は赤飯に鯉節を添て商賣を引き新橋邊に手廣なる家を求めて旅籠屋と藝者屋の普請に掛り十月開業の用意を急ぎたるが五厘の饅頭を五厘で二ツ買やうな注文是が旨く其通りに儲るか堂だか

第廿九回　高山の大穴は入定の塚孔

何事かは知ねども一昨日の正午頃に一通の電信が到來したるに是を披見するや否や高山會社創立事務所の二階には社長濱矢良どのを初として（是は河居惣太が社長を辭職せしに付き其後任に選ばれたるなり）熊鷹狼早房狎合の重役は急に秘密會議を開き電信を掛るやら手代を走らするやら大騒

ぎ夜の九時過までも出たり入つたりして相談を凝せるは常事ならずとは思へども支配人以下には一言も吐し無れば其仔細を知べき樣も無かりき、然に昨日の午前に至り又々山許より到來したる隱語の電信は紙數六七枚もある程の長文句これを讀で重役の人々は恰も大地震に洪水が一度に押寄たる所に千百の雷が一時に頭の上に落たるが如き樣子にて何れも靑くなつたり赤くなつたり眉を攢めて八の字を五ツも六ツも寄るもあれば上下の唇を確りと結び此所通行無用と云が如き口付を成るもあり手を叉いて其間に顋を入たり左の手で額を押へ其臂を机上に突張たり天井を仰で頻に溜息を吐たり種々に形容は異れども何れも知惠も分別も出ず途方に暮たる有樣なりとは一目にて瞭然なり、兎角する中に只今山許より到着したりとて地元へ出張の社員は昼夜兼行にて會社に來れば直に是へと二階へ招き二時間餘の長談は彼地の事情を委しく聞く爲とは分つたれど何の事情やら未だ知れず、夜に入つて支配人は急支度にて旅裝を整へ直に是より瀛車に飛乘り地元へ出張し重役は馬車あるは二人引三人引の人力にて諸所を駈廻つては會社に來り會社を出ては駈廻り辨當さへ碌々咽を通らず氣は取上せて轉動し徹夜の評議に夜を明し、今朝は又々地方の電信到來し引續いて郵便も着し再度の注進として地元より又々社員が上京したるにて其事情が判然と分明たるに從つて騷動は益々烈しく成て内々にて株券の書替をするもあり株主より樣子を聞に來もあつて午後に至つては左ながら

戰場の如き混雜なり。重役の先生は深く其事を機密にして社員にも一切知らせざる樣に注意したれど新聞屋の早耳には何處から聽えたか高山會社の變事高山空穴の變報など丶二號文字にて大きく標題を掲げて書立たれば忽ちに世上に聞え今朝の寄付では昨日まで拾圓拂込にて二拾圓以上の高價を保ち買手ばかりで賣手の無りし高山株は今朝忽ち下落して拾五圓の寄付本場にはガラガラと一層も二層も崩れて唯の五拾錢までと成たれど夫さへ賣聲ばかりで更に買聲は無かりき、今は社員を初め世間に隱し終すべき事にあらねば止を得ず發表したる報告によれば

此高山會社を創立し株金を集めて鑛山を買入れ金塊を掘出すべき見込を立たるに其買入るべき金山と申すは其昔し奥州の秀衡が金賣吉次に申付て掘せたる砂金の脈續にて若も其大脈なるを七八百年の間誰も知るもの無く近年に至り、稍く此の金坑に眼を著る者あつて其山を手を廻して買入れ所持なして居たるなり。然るに去年熊膽が狼と兩人にて此の事を聞込み是ぞ福德の三年目浮木の龜や優曇華の花咲時節が到來したるぞと密に檢査の人を遣し其金塊を取寄て分析したるに百分の中に幾分の純金を含みたりと云ふ上々吉の報告愈〻以て奇妙頂禮大願成就とて右の持主に引合を附て何拾萬圓にて其山を買入れる事に契約を定め夫よりして其事實を世上に吹聽したるに誰も欲氣を離れたる者は無と見えて高山會社の株を爭て申込もの意外に多く直に滿株となつたれば

會社創立の願書を出し借坑の手續も出來て愈々着手したるに成ほど〳〵金塊の出ること〳〵掘さへすればゴロリ〳〵と金の塊が幾でも地の下から湧て出る、こは有難や忝なや全く以て日頃念じ奉る冬木の辨財天傳通院の大黑天待乳山の觀喜天下谷の摩利支天神樂坂の毘沙門天其外日本六十餘州大小の神祇八百番神の加護し玉ふ所なりと感涙をボロリ〳〵と飜して稼がせたれば實は大入大當りと世間にて羨たる程なりしに頃日段々と掘入るに從つて何だかおかしな鹽梅なりと技師も工夫も頗る疑を成して坑路を掘進みたればコハ如何にガラリと一聲響きて崩るゝと俱に其穴の中を見れば何ぞ量らん金塊幾億萬斤を秘たりと思ひし山は其昔し稼ぎに稼ぎて掘盡したる空穴を

ば同じ坑物の崩れを以て口元だけ上手に餡詰したる拵えものにてありぬ

スワヤ大變なり油斷すなと前の持主に掛合て見れば持主は澄したる顏付にて我とても他人より先達て買入たる山なれば左樣なる巧ありしとは夢さら知らず其上に我方より賣付たるにては無く全たく强て貴殿方が望まれて買取ありし山なれば今更以て詮方なしと取ても付ざる挨拶なれば詰る所が是まで入れたる二十五萬圓が全くの損金にて其三分の二は即ら熊膽と狼との引受とは知られたり、此春の白露事件さへあるに今また夫によく似たる此の高山會社の騷動は凡そ斯の如し堂したので有らう今更仕かたは有まいか」有の無のと言た所がモウ取て返しの附かぬ次第全で損と

明らめ様か「明らめ様と云ても是が僕の所有金を出したならまだ方の附方も有うが實は遣繰算段で引ずり出した金なれば「メリヤ僕とても同じこと彼方此方と旨く胡魔化し引めんたんした資本ゆゑ愈々是が空穴と極つた日にやア忽ち明日は身代限「その身代限をした丈で濟ば荷が輕いが其中には筋の悪い金も隨分あるに由て何とも彼とも工夫が附ぬ「併し白露の一件さへ濟で見れば此山だつて堂か始末が附さうなものだが「所が白露の方は株主が皆金持ばかりゆゑ損と直に明らめを付て方が附たれど此方は夫とは事變り「無理算段の山なれば後の始末は實に附様が無と云ふもの、と銘々に擲首しての心配なるに流石は熊鷹ビクともせす「何の案じる事は無い報告が有ても愈々空穴ともまだ極た次第でも無し良んば空穴で有た所が外の株主には四文たりとも損は掛けぬナンノ高が二十五萬圓余と狼君と兩人で殘らず其株を買取て進ぜませう、銘々が四萬圓づゝ持出すと思へば今日只今でも方が附こと皆さん飛脚船に乘たと思つて安心してお出なさいと事も無げに云つたるは實に大膽不敵の豪傑とぞ見えし

第三十回　榮枯忽に變て市は榮へたり

高山會社の意外なる報告より株主全體の大騒ぎ熊鷹狼は間違つたら其の株を我等兩人で買取らう

程に安心してお出なさいと大束を極込だれば一時は其煙に卷れて株主の騒は少しく靜まつたれど靜まらぬは債主連中。原來熊鷹狼が兩人にて惣株高の三分の二を引受て既に排込だる拾六萬圓は元く其株を抵當にして外方より融通したる金なれば債主は高山空穴なりと聞や否や抵當物を入替るか返金するかと足元から烏が立やうなる厳しい催促、宜しい何日までには方を附ませうナニモ是しきの金高さほど御心配にも及び申まいと落着て日延をなし其中に遣繰を附べし斯様なる急場の危險は珍らしからぬ事と胸算段を運らして居たる所に驚くべき變事は一兩日前に俄に内閣に更迭ありて某々と云へる高官二三人その職を辭して退かれたれば情實批杓干鰮赤沙汰の殿たちが是までの勢力も忽に其線を絶たれて今は何の役にも立たず熊鷹狼等が目前の難儀を救ふ所か我々共が差掛つたる切迫を堂か致して呉よと先方から逆捻の御依頼に憐むべし流行の紳士紳商の中にて働ものと名を得たりし熊鷹長者も狼物四郎も絲の切たる凧の如く七轉八仆の苦しみに搗て加へて直輸出の官金拜借は愈々聞届がたしと錠が下て其のみならず是まで旨く名義を附て或は拜借或は預りと引摺込だる金子は即時に勘定して上納せよと降て湧たる厳しき御沙汰延曳ならぬ絶體絶命。サア斯なると酷いもので情實干鰮批杓赤沙汰の殿たちは御自分たちが銘々の始末に忙がしくて他の事を聞て居る隙は無いと云ふもの、「ナニ熊鷹や狼等が失敗は自ら求めたる禍じやに由て仕方は無ワ氣の毒には

違ひ無が余等が力にも及ばぬ事じや」と高見で見物、盛なる時には紳士連中の交際も何百人とあれど是も同じく御互に黄金の交り慾張り相談の外は牌を弄か藝者を買かと云ふに止まつたれば左り前になつた曉には見向もせぬが理の當然。早房の早手廻しが早くも自分の株は人の名前に書替て「僕は已に此高山には關係が無けれねば損得の相談に與るべき理由も無し」と不實千萬なる挨拶。狎合は今一層進入を掛たる横着もの「イヤハヤ困た次第僕が一人に成ても踏止まつて結局を附る程に君方は御自分の覺悟を早く仕たまへ」と信切ごかしで持込で熊鷹等が失敗のドサクサを幸に又一儲け仕やうと云ふ心底なれば實に恐ろしき兵ものゝ寄合なり

咄し變て此は紅葉館の下座敷藝者の溜の間今日は何か大一座の振舞と見えて新柳北里の白拍子等數十人が屯したる中に雀屋お欲と穴彦おへみの兩人が片隅にてのヒソ〳〵咄し おへみ「大變な咄じやア無かネ熊鷹さんも狼さんもお宅は人の名前に成て御自分がたは外にお引移に成たとネ お欲「サウだと云ふ事だが夫じやア矢張り流行の身代限だらうが此節の紳士がたは身代限をする度びに工面が直て三度も身代限をすると大層なお金が殘ると云から大方その傳だらうヨ おへみ「さうかも知ぬが夫じやア私しも身代限を仕て見やうか お欲「馬鹿お云なお前や私しなんぞに其な器用な事が出來ものかネ、ソコで彼のお二人がさう成ちやア小がしさんの旅籠屋もおちやめさんの藝者屋も折角大層に誉請が

出來ても玉なしに成だらうネ おへみ「所があの二人が中々眞理巧だから皆自分の名前にして二人の旦那にやアモウ臂を喰せたさうだ お欲「オヤ〳〵燈臺元暗しで些とも知なかつたが然だらうヨ、此節の若手は中々腕が善からね、私しの方のお出やのねん子を御覽ナ批杓さんを散々責て其後で赤沙汰さんを噛て立派に内の誉請までさせた上で此頃じやア後足で砂を蹴掛て居るぜ、夫からおづるは河居さんから莫大の手當を貰つて此節は福々で居るが妹の小しやくは干鰡さんを旨く殺しておづると分れて別に成たヨ、又烏鶏亭のおべたも批杓さんから餘ほど取たと見えて頃日じやア丸で權妻さんの處置振をして居るよ おへみ「さうだらう、夫じやアお前の所のだるチャンも夥り爲に成たらう羨しいネ お欲「所が取ても減がたんと出るから割に合ないよ何でも此暮にやア一稼ぎミッチリ稼がせる積りさ、時に狎合さんの妹の女先生は堂したらう おへみ「相變らず紫の袴で歩行て居るが彼が坂當愚知藏と云ふ俳優が深い色で愈々近い内に一所に成さうだ お欲「ヘエー緣と云ふものは妙なものだネ おへみ「夫ア堂でも好とした處で熊鷹さんや狼さんがアゝなつたに付ちやアお茶屋さんがたにも引掛りが出來て損を仕た人が有るだらうぜ お欲「なんの皆が用心して居たもの誰が損をするものかね、……と咄最中に赤拍子が來て「姉さんお膳が出ますと却説河居惣太は斯と聞より狎合を招きて 河居「……成ほど今の咄しで見りや實に熊鷹も狼も怪からぬ

に違ひ無が去とて今日の困難は氣の毒千萬の事じや無いか及ばす乍ら出來る丈の助を仕やうと思ふが、と言を押止めて 傳「お止なせい〳〵 尊公が義氣をお出なすつた所が先が其に感じる樣な代物じやァ御座いませんぜ、是迄の處置で大抵彼輩の心底は知きつて居るのに此矢先に尊公が男氣で救てお遣なさりやァ先方じや締た好鴨が罹つた位に思ひ取すに山て先々高見で見物してお座なせいまし 河原「併し善れ惡かれ此間まで懇意で居た連中が身代限をして明日から困ると云のに知ぬ顔は出來ないじや無いか 傳「ソレが當然の分散とか破産とか云ふ次第ならば其通りだけれど二年も三年も前から自分の悴を分家させて表面は戸籍を別にして置て其名前に財産を附て烟の掛らぬ樣に仕て置たり養子を相續人にして其方に借金を脊負せて實子は分家にして平氣な顔で公債や預ケ金を持て居ると云のだから兼て覺悟が仕てある業で何も少しも困る所はありませんぜ今に御覽じろ此火の手が少し弱くなると忽に又何所かに打て出るに違ないから 河原「ムヽ、然して見れば先づ當分拜見として愈〻眞實かの連中が困ると云ふ場合に成たら余が見續で遣と仕やう 傳「その事にお仕なさいまし、アヽ、紳士と云ものは成ほど危ないものでげすネ 河原「然さ大抵のものでは當節の紳士に成て絹糸渡の狂言は出來ないネ

斯て潰るものは潰れ繁昌するものは繁昌して夫で先づ市は榮えて居るが今日の繁昌が明日は潰れるやら昨日潰れた者が今日は又再興して繁昌するやら覘き機關見た樣な世の中なれば大和錦の陰陽も此らで卷納めてめでたし〳〵

滑稽小說

陰陽大和錦 畢

車善七

第一回

物見役の報知、先供の注進追々に引續きてはや御歸城と犇めくは常陸國水戸の都下より程遠からぬ多珂郡車の城中。文關式臺武者走に居並びて出迎ふるは家老吉田所左衛門を始として許多の武士いづれも皆今日の御出仕水戸御城内の御評議如何にと案じ顔して居たりけり

御歸りと高らかに呼べる聲につれて徒士、馬廻り屈竟の侍等を馬の左右に打從へて女關より上り一言も云はず平素の通りの顔色容姿少しも變らず其儘に奥へ通りたるは此車城の城主車丹波守義久、戰場にては火の車の差物して向ふに敵なく何なる堅陣大軍たりとも此火の車が押寄る時は崩れずと云ふ事なし天晴常陸の豪傑や佐竹一家の麾取やと關東諸國は愚か下野陸奥の境まで武名隱れ無き老武者。給に見たる鐘馗か然らずば須彌壇の上に立たせる不動尊の樣なる顔容であるならんと思ひの外に丸顔で頬肉豐かに嬶々として愛嬌のある老爺どの年の齢は五十八歳すでに耳順に近けれど腰も屈まず白髪も少くちよツと見にはやツと五十二三に見ゆる德な方。しかし其歩行の落着て歩調の亂れざると立てば左ながら大地より生たる老松の如くなると常は下つた眦でも眼の光の輝きて凄く見るとにて剛勇の氣象は隱さうとて隱すべくもあらざりけり

表廣間の椽頰に平伏して丹波守が歸りを出迎へたるは丹波守の嫡男にて若殿と唱ばるゝ車善七郎猛虎とて當年廿二歳の若武者色白で鼻筋通り眼元凉しく女にして見度ほどの美男子、常陸一國で評判の男振り。丹波守が後より續いたる所左衛門が會釋に父に附添ひて俱に奥なる居間へと從ひたり丹波守が着座したるを見て善七郎は所左衛門を從がへて居間の閾外にて一禮なし其身はつツと閾内に入りて

『父上樣御歸城恐悦に御座りますシテ今日水戸御城内の御評議、太守樣の御決心、如何相成りまして御座りますか

『恐ながら殿を始め馬場和泉守殿並に大窪兵藏殿小貫源助殿その外宗徒の御方々御所存の程なんと定りまして御座りまする

と問へば丹波守は侍女が持出したる煎じ茶をぐツと一息に飲干て舌打鳴し

『アッ旨かつた、イヤ年寄に成ると成ほど茶が旨う成るも不思議じや、……善七どん御身じやとて我等が年に成ると矢張酒より茶の方に成られるじやらうて、のウ所左衛門さうじやてなハ、、、ア

と打笑ひ取ても附かぬ挨拶に善七郎も所左衛門も少し氣を焦立て輕く其答を爲し更に前段の詞を繰返して尋ぬれば丹波守は不審げに二人の顏を打見やりて

『フウ御城にて何の御評議、何の御決定、扨々異な事を尋ね申すな、御城内は至て御無事、大殿には其儘に伏見の御邸へ御滯在、太守樣には伏見御城にて仰渡されあつたる如く當國常陸を德川殿へ差上げ一昨夜すでに御忍にて水戸御發駕あらせられ替地として下された出羽の秋田へ渡らせられた、御前方和子樣方いづれも明朝の御出立と夫々の御用意も整つてあれば聊か御差支はあり無いじや尤も御家來の面々は知行宛行是迄の三分一乃至四分一場合に由ては面扶持に成ても苦しう無い堪忍して奉公の致すとあらば早々當國を引拂ひ秋田へと罷越せ併し夫が不得心とならば酌酌に及ばぬ勝手に暇願を申し立い聊か御不足には思召さぬ及ばせらるゝ程の手當は當座の合力なし下されうと有がたい御意昨日仰出されても御家來一同感涙に咽んだ次第じや、是でさつぱりと埒が明て佐竹の御家は萬々歲此上も無いお目出度事に相成つた、御身たちも安心いたし所左衛門より此旨きつと無く家中の者へ申聞せい。イヤ此十日餘りと云ふものは水戸御城に詰切て何の彼のと甚い世話、勿體ない事じやが身に慣ぬ御奉公で實に草臥た、まづ今夕は早寢と致してゆツくり休息いたすと仕やう

第二回

かく丹波守が事も無げなる申聞に善七郎は意外の想を爲し膝押進めて

『こは御詞とも存じませぬ若輩もの、善七郎今更めて申上ずとも父上には兼々得と御承知の御事抑々佐竹御家は其昔し新羅三郎義光公より三代佐竹冠者昌義公常陸國並に奥六郡を御所領あつて鎌倉殿にも格別の御扱ひ夫より九代を經て佐竹右馬頭義盛公の御時しかゝ應永六年の事なりしが足利殿の仰せとあつて御屋形號并に皆朱の采麾を御免なりて關東八家の隨一と定められ夫より七代して大殿佐竹常陸介義重公御相續あつて去る天正十四年御領地を御父大殿より讓受させたるは即ち當太守佐竹右京大夫義宣公かく昌義公より十六代の間連綿と領させたる常陸國いかに德川殿の御下知と申しておめ〳〵と御城地を明渡し秋田へ御越し相成るは武家の耻辱世間の外聞殘念では御座りませぬか

『成程左樣に申せば一理あるが事の起りは太守樣、用でも無い石田三成に御加擔あつて上杉と牒じ合せ德川殿に楯を御突なされた故じや最早や今日と成ては後の祭で致し方はおり無は

『御詞では御座りまするが大守樣御親子大阪方へ御一味あつたば第一に太閤樣の御舊恩二ツには石

田治部少輔殿の執成にて當家御安堵の御好ゆゑのこと是また武士道の表なれば强に太守樣御過失と申すに非ず、田中越中、東中務、小貫大藏、人見主膳、彼等ごとき臆病武士は秋田御引移りを御勸も致せしならんが父上には衆てより馬場大窪の殿たちと御籠城の御申合せ御座ありとの風聞なるが水戸の御城を枕と爲し德川勢を引受てナゼ花々しく討死の御覺悟は成されませぬな

『この所左衛門を始とし年來御厚恩を被つたる御家來若黨少くとも三百餘人足輕雜兵合せて八百有餘冥土の御供いたす所存然るに殿には今日と相成て秋田御引移りに御同意とは殘念至極に存じまする……

云はせも果ず丹波守は活と眼を開き怒の色を顯して

『默れ所左衛門、主人に對して無禮であらうぞ又善七とても其如く父へ對して意見だて差控へて居い。東に上杉、西に毛利浮田島津石田小西、日本國の諸大名半分以上總掛りでも關が原の一戰に脆くも敗北相成て采配取ては日本中恐らく敵なき德川殿それを寄手に引受て高の知れた水戸一城なんの籠城で花々しい合戰が成るものか、若者どもが血氣に早り軍なんどと申したなれど詰る所が太守樣御親子に御腹を召させ佐竹御家が全く滅亡に相成るは知た事、それ故に我等はじめ年寄どもが申諭し籠城評議は止にさせ長なしう秋田引移りと定め申した。是が即ち佐竹御家の御爲と

申すものじや

『シテ父上には如何御進退を遊されますな

『我等か我等は勿論秋田へ引移つる所存じや。夫に就ては所左衛門卿は其旨一家中へ觸渡して申さうには、丹波守唯今までは三萬石の身代で是なる車の城に居住いたし居たなれど秋田へ引移れば三千石か二千石に相成り申すに由て老黨若黨共の扶持も叶はぬ就ては百石に金十兩づゝ手當いたし其上に我等が家具資財不足の分を分け遣すに由て夫々離散いたし身の立方を致す樣に丹波ひたすら望み申すと内意を授けて暇の用意を致させい、次に我等は一家を召連れ手輕に出立ち支度次第に發足いたせば當城城附の武器その外見苦く無い樣に致し置き德川殿の請取人へ渡さねば相成らぬ程に夫をも其方心掛け居い、先づ用向は夫だけじや、詰所へ參つて休息せい、善七郎も部屋へ往れい、ドレ我等も一休いたさうかやをら足踏延して其に横たはりたり

第三回

丹波守が内室は幾瀨と云ひて年の頃は漸く四十路を三ツ越たる計にて未だ老婦と云ふには非ざれど

も此三年以來常に煩ひ勝にて醫藥の効も果々しからず病の床に打臥てのみ居たりけり夫の丹波守は世に情ある武士にて妻の病氣を憂め一子の善七郎は稀なる孝子にて優しうも母に事へ自から湯藥の事ども心を配りて信だち計ひけれども戰國の習とて或時は主君佐竹殿の本城たる水戸に詰め又或時は近國との爭ひに先陣後詰を承はりて軍の陣に赴く事の頻りなれば思ふ儘の介抱も行屆かぬぞ口惜かる幸ひに幾瀬が母方の姪にて是も佐竹殿の侍吉井源内左衛門が忘れ形見に住江と云へる娘の父母に後れて寄邊なき身でありつるを去年より車が邸へ引取りて幾瀬が介抱させたるに此住江ことし漸々十六歳なるが容貌勝れて麗はしく文かき物讀を始とし香花の諸藝に至るまで女の道には能く達し別て裁縫の業は尤も秀でたり其上に常は極めて優しきが心の奥には雄々しき氣象を貯へ實にも勇士の譽ありける吉井が娘なりと知るも知らぬも皆人これを賞せぬは無し。幾瀬は住江が我を實の母のやうに思ひて病の介抱を一人して爲し更に倦厭へる色の見えざるを悅び叶ふべき事ならば善七郎の妻にもと思ひ意を注て其狀態を見るに互に憎からぬ想にてあるを覺り機もあらば夫丹波守へ此由を言出さんと待たりけるが平素に物堅き丹波守なれば斯る事は夫婦の中にても浮と言出し否まれては事良しからずと徒らに好機を待ち居たりけり

折しも佐竹殿には德川殿の御下知として常陸五十五萬石の領地を召上られ出羽國秋田二十萬石を下され國替の御沙汰と成り太守右京太夫殿には既に忍びやかに水戸を出で秋田へ向はせられ一家中みな思ひ〳〵の心に成りて或は暇申して他國へ赴くもあり或は主君の御先途を見屆け參らせんとて秋田へ旅立の用意を爲すもあり。されば丹波守が車の城三萬石にて召仕ひたる老黨、若黨、足輕、仲間、倍臣を合せて都合二千にも餘れる人數が是も亦丹波守を後にして散行ものゝ多かりければ三四日を經てば僅かに三が一にも足らずなりたり。丹波守は素より心に期したる事なれば金銀資財など惜氣も無く與へて思ふまに〳〵離散させ靜に旅の用意を堅へ自から內室の枕邊に來りて座を占め善七郎を呼寄せ親子三人が鼎に成りて

「さて幾瀬どの幸ひに御身の病氣も此節は少し愈つて御座るに由て愈々明日は當地を發足なし秋田へと參らしやれ。善七郎、住江、並びに所左衛門其外用乙を合せて人數は凡そ五十四五人隨分とも賑かな道中じや。鄕籠萬端の用意は所左衛門が心得て中々行屆た事じやに由て道中の案じは少しも有ない。手醫者の杏庵も殊勝に御身の供をする事に極り申した。夫に我等常から驕奢か大嫌ひで常に儉約を守て居たが其蔭で暇に致した者共へ相應手當を遣いてもまだ金銀は澤山に所持なせば秋田へ參つても不自由は些とも御座らぬじや道中でも佐竹殿家老車丹波が妻子の引起しは見すぼらし氣じやと云はれては恥辱であらう。不斷の嗜は此時花々しうして參らつしやれい

と常に似氣なき大氣の詞しかも日頃に無き大機嫌と見えにけり

第四回

幾瀬は蒲團の上に居直りて兩手を支へて

『有がたい仰せ忝う存じます。誠に今度の御大變その中にて私が此病氣少しのお手傳には成りませいで種々の御厄介何とお禮の申し樣も御座りませぬ。仰せに任せて明日出立と致しませうがシテ御身樣はどう成されて何頃秋田へお出には成りますな

問へば丹波守は打諾いて笑を爲し

『ハヽヽ廿四五年も連添た夫婦中じや何の厄介も氣の毒も御座り申さぬ。女房の世話は亭主では當然の役前じや……夫で我等が發足は昨夜も善七郎へ申し聞た通り是より人數少々召連て水戸御城へ罷越し德川殿の御使本田上野介が入來を待受け武田家の作法を以て御城を見事に引渡し夫から當城を法の如く相渡し右等の用向相濟で後に者ども召具し靜々と秋田へ參るなれば今日よりして早くて十日遲くて十五日は掛るで御座らう

『デは成程さうで御座りませう。併しお骨の折れる大切の御役目、善七郎どのを御身樣の側にお殘し置しやれたが宜しいやらうと存じまするが……

『否々善七郎は御身の供を是非させる左なうては我等安心が成り申さぬ……ナンの我等が役目は骨が折れても大切でも合戰に出陣すると云ふでは無し。申さば長袴で事が濟む太平の腰拔役、介添などが入らう用は御座り申さぬ前髪小姓が一人居れば結句用は辨ずるじや。夫とは違つて秋田へ參れば第一住居の屋敷からして相求めそれ相應の取結びを致さねば相成らぬ善七郎が居らいでは迚も所左衛門一人の働では埒が明かぬ。夫じやに由て善七郎をば態々お身に附け申すじや實に尤なる丹波の配慮に善七郎も既に承知の上なれば幾瀬も强て申すべき樣も無く其差圖に從ひ夫の情を悅ぶ外は無かりけり

丹波守は滿面に笑を含みていと優しき聲して

『幾瀬どの夫で御身が出立の談合は極つたが此に今一ツ肝腎な談合があつて此丹波も一了簡でば計ひ兼ぬるに御身の分別を借ねば成らぬじや

幾瀬は談合と云ふに打驚いて

『此矢先に談合と仰やりますは

『ナニ左樣に肝魂を消さるゝ程の事では御座り申さぬ先々目出たい談合に由て氣を落付けて聞て

おくりやれ但し善七郎御身は少々差合じやゆゑ暫く退座召れい

善七郎を退かせて聲を低うして

『其談合と申すは餘の儀で無い御身の姪の住江と善七郎と夫婦に致し度と我等内々存じて居るが何とであらうな御身の了簡が聞度う御座るて

第五回

幾瀬は病の苦痛をも打忘れて我思はず膝を進め蒲團の上を外るゝ計りに前に摺寄て

『エ、御身樣あの親無し娘の住江を善七郎の御察人にと仰しやりますか

『ム、さうじや何にも善七郎妻に致さふと思ふてじや但御身は不承知で御座るかな

『何の不承知どころで御座りませう私が姪の住江が車家の御察人に成れば此上も無い悦び併し今では里方も無い寄人の女餘り不釣合と思ひますゆゑ……

『何が不釣合、常陸下野上總下總近國に武名を滿かいた吉井源内左衛門が娘この丹波が嫁には相當の釣合、善七郎には過ぎ申す程の系圖じや、併し肝腎の住江が心底何とあらうな不得心では御座るまいか

『イヤ〳〵住江は大丈夫、不得心は扨置て此上も無い悦び飛立ばかりで御座ります

『さう輕う申されな妹背の事ばかりは兩親の威光でも參らぬもの、況て御身が彼娘を引取て世話の致したからと申して押付沙汰は後々の不爲まづ得と當人の心底を聞てお見やれ

『それは聞までも御座らぬ此幾瀬が筑波大權現誓文お請合申まする

『ハヽヽハ是はきつい請合じや、ム、扨は御身疾に探りの打ち試いて見られたな

『イヤ探りは打て見ませぬが此眼でちやんと睨んで存知て居りまするじや

『益々以て勝い事の、帷幕の中に居て千里の外の敵を察する眼力、御身は日本の女孔明じやのウハヽヽヽハ……然らば御察人の方は御身が請合で聞くに及ばぬとして是からは聟殿の方じや、我等申附を背く善七では無いが一應は入念、御身から心底の尋ねて見られい

『夫も尋ねずとも否やは御座りませぬ

『フウ扨は兩人既に不義の致いて居るかな

『ナンノ我子で譽るでは御座らぬが物堅い善七郎、住江とても其通り私の側を離れず附添て居ますれば徒ら事は曾て無い夫を此幾瀬が誓文請合ひまする

『夫で御身はどうして兩人とも得心じやと請合申さるゝな

ハテ扨お身樣も推が悪い善七と住江は互に悟からず思ひ合て居るので御座ります夫を私が素振で悟つたと云ふ譯

『何樣さうか、シテ見れば二十餘年前御身が先々の御簾中光明院樣お側に宮仕いたし居たを我等が見初たと云ふ樣な振合じやの

と幾瀬が顏を見れば幾瀬は其可笑に堪得で笑ひ出し、

『ホヽヽホ此中で昔の事を言出て此病人の婆に戯謔しやる場でも御座りますまい……夫で御身樣は彼兩人を今此で何と成されますな

『サア兩人とも得心とならば此上も無い幸ひ祝言な秋田へ參つた上で追ての事、今日は武家に取ては大吉日まづ兩人に夫婦の約束を致させ置て明日の發足と定める積り、御身も夫で安心せられう

……ナニ夫婦の約束に儀式も盃も入らぬ事、御身が住江の御母代……いざ二人を是へ呼寄られいと手を打鳴して急立たり

第六回

扨も善七郎住江は日頃より心の中にて互に思ひ思はれたる中なるに武骨一遍に似合はぬ父の計ひ夫

婦約束の固めに斯る匆劇の中の悦びさこそとは知られけれ

明れば翌日に定めたる發足の日限、家老の吉田所左衛門始め車丹波守に忠義の心を寄する者ども皆旅支度の用意に及び乘馬五疋女駕籠三挺まで整へて綺羅を張たる出立なり。幾瀬善七郎住江は皆夫夫に旅行の裝を爲して丹波守が前に來り暫しの暇を告るにぞ丹波守は欣然として

『申す迄も無いが幾瀬には病氣の道中、隨分ともに心を附て參られい、昨日も申し聞た通り高が秋田へ引越の旅じや、別に急いで行く程の用事も無いに由て氣合が悪い日は何宿へなりと泊り養生すると致されい、委細は所左衛門よく心得ては居り申すが善七郎も心を用ひよう母を劬りませうぞ、住江は勿論お附人じや名所古蹟で歌が出來たら我等追付け秋田へ參つて承はらうハヽヽハと悦びの體なるに幾瀬は何とやらん心も落付かず

『ではお先に出立いたしまするが御身樣の御發足よもや遲くは成りますまいか

『ナンノ〳〵昨日も申聞た通り長袴で水戸御城を徳川殿御使に相渡し跡々別條ない樣に致せば役目は夫で相濟むゆゑ遲くも今月中には引拂ひと致し申す……我等身の上は少しも案じは無い程に安心して面白う旅行の致されい……

善七郎は此車の城をも徳川家に渡し他人の物にせらるゝ歟と思へば流石名殘の惜まれて無念の涙を

隱し兼ね袖に受たる一滴、丹波守は見咎て其仔細を詰り問ひ善七郎が云云との述懷を聞了り高笑して

『扨々其方は此丹波が忰にも似ぬ肝魂の小さな和郎じやな、コレよう聞け、此程中より諭した通り人間は七轉八起況てや軍の勝敗は時の運、運は廻る環の如しとあるで無いか、敗る時には奇麗に敗て未練を殘さず又運の來るを俟つが武道の極意、……申さば猫の額ほどの此車の城先祖累代の居城じやと申して左樣に尊い理はおり無い、今にもあれ我等にせい其方にせい武運に叶つて高名いたせば此城は愚か會津米澤宇都宮、高い聲では申されぬが江戸の城でも我物に相成らうも知れ申さぬ……一昨年の大軍東西分目の合戰と云ふたけれど、まだ〳〵是からが武士には面白い世の中、常陸を立退て秋田へ參るが却て仕合で有うと我等は存じ居るじや……下世話にも親の造つた廁で一生涯糞する奴は物の役に立たぬと申すが誠その通り近い例が德川殿を見い參州岡崎の小大名から濱松に移つて駿遠參甲信五ヶ國の太守それから江戸にはせられて關八州の太守、今に天下取りに成り召さるじや、其方とて及ばぬ迄も其氣で無くては相成らぬ……イヤ是はつい武士道ばなしで出立の足を止めたサア早う立れい目出たう秋田へ着て我等參るを待て居られい夫々に詞を交し自から玄關まで送り出して後に城内の角の櫓に登り幾瀬善七郎が一行の並木の影に

隱れて見えず成りけるまで遙かに見送りて太息を吐て

『是でやつと安心の致いた

第七回

秋田の城下は名にし負ふ常陸の國主佐竹殿が國替に成て當主右京太夫殿を始め一門家老諸士の引移りに所は狹し人は多し大混雜の中に上を下へと取々の風說愈〻水戸にては後に殘つたる勇士の面々忍びに〳〵人數を聚め義兵の旗を揚げ德川殿の城番を追拂ひ御城取戻さんとの企あり……其張本こそ車丹波守義久主にてある由なり……大窪馬場その他の方々これも一味と申す事……太守樣この由を内々にて聞召しそは由々しき大事であるぞ早く謀叛の差止いと中務殿内命受て今朝早馬にて打立れたと云ふ事なり……なんど口々に言罵る。善七郎は此噂を聞き、こは安からぬ一大事と胸うち騷ぎ猶も其噂を確めんと城内に走付て役人衆に問合するに『他言は成らぬが正しく其風說ありて太守公にも殊の外の御苦心、樣子は未だ定かならねど思ひ合する事のあれば痕跡なき事にはあらじ、既に御供せでは叶はぬ忠義剛勇の殿原が何の仔細も申さいで御暇取て退身したは斯る企あつての事かと御家老たちにも取々の評議……』と聞たりければ善七郎は心も心ならず急ぎ我が假の住居へ馳歸

り聞得たる程の概略を母の幾瀬に告知せける處に所左衛門も息せきと外より歸り來りて是も同じ趣を申したり。扨は愈々實説に相違は無し縱令虚説にもあれ父上の御身に掛る一大事これ承つて安閑と此秋田に止るべきにあらず如何はせんと母の意中を尋ぬれば幾瀬はさしも思入たる氣色にて

『扨は其で在しやれたか常からして物に動ぜぬ丹波殿、立退など云ふ時には靜まり返つて尻拂さつしやるが定であるのに今度に限つて早う引越せ疾出立せいとお急やつたは足弱の妻子を落し夫から思立とうと手順きめての事であつたよの、道理こそ平内九郎、新五左衛門、源八五郎厨之丞はじめ日頃御自分の身に代へて思召した郎黨に金銀物の具秘藏の太刀刀取らせて暇には成された。必定これも内々言含めて置かれたに相違は無い。四十年近う附添ふ私が病氣じやと云ふて夫を些とも氣附なんだは一生の不覺、しかし夫でこそ車丹波守で御座りますな心の底は知らねども驚く色を表面には些とも見せぬ擧動はさすが丹波の妻女なり。善七郎は首打傾けて、

『父上には夫程の思し立ち此善七へ一言の仰せ合せの無いと申すは扨は能々某を言甲斐ない腰拔の臆病者と思されてか。ヱ、無念で御座り申す

拳を握り齒嚙を爲し述懷の色面に溢るれば

『中々の事じや何で丹波殿が左樣に思召して御座らうぞ。御身には何事も打明さず私に附添して此秋田へ立せられたは丹波殿の厚い慈悲心で御座るワいのウ

『ナニ慈悲心で御座と御意なされまするは

『ハテ御身が命を安全に保せ置て車の家を絶すまいとの思召し……まだ合點が參らぬか……參らずば此幾瀬が云て聞さう

第八回

幾瀬は更に善七郎に打向ひ詞を續けて

『丹波殿常々口癖のやうに仰しやつたは君辱しめらるゝ時は臣死すと云ふこと武士たるものゝ第一の覺悟……扨こそ今度の御國替勿體なくも佐竹殿御累代の御館すゑられた水戸御城をおめ〳〵と徳川殿請取の御使へ渡すのは恥辱とあつて討死の御決心疾よりお極なされたと存じ申す……女でこそあれ車丹波守義久殿の妻じや夫知いで成らうかいのウ

『成程それで盡く相分りまして御座ります就ては母上へ一つのお願ひ……是より直に馳向ひ父上の御先途見屆まし度存じまする

『此所左衛門も若殿の御供いたし同じくば御屋敷内の人數選りに選つて責ては二三十騎かり催し後詰仕り度御座りますが

『イヤ〳〵そりや出來まい唯今も善七郎殿やお手前が言はるゝには太守様にも殊の外の御苦心で御差止の早馬が出たとの事其中に二十騎も三十騎も打連て此秋田から繰出しが成りませうか御城下を外れぬ中に喰止らるゝは知れてある……大切の夫をお見殺しにする様で此胸が裂る程ではあるなれど相手も有うに徳川殿を敵に取ての思し立ち御討死は言いでも知てある……何萬何千の敵中へ僅か五十や百の人數何の後詰に成りませう生中の事いたいては却て夫の恥に成るゆゑ此幾瀬が差止まする……善七郎どの御身の願ひも止度とは思ふけれど父子の中は又格別、御先途見屆に馳付たいの切な願ひ、此母が止たとて止るまい此上は御身の思ひ通りに致すがよい……此母の事は少しも案じは御座りませぬ此通り住江も側に居て介抱して呉るゆゑ丹波殿が在さいでも御主が居ひでも何一ッ不自由は無い程に必らず後に心を引され召さるな……併し戰の場に出で討死する計りが忠でも無ければ孝でも無い早まつて徒らに犬死するは勇士の恥と丹波殿常からの御教訓は今この時で御座りまするぞ……千に一つも丹波殿あはひ能も戰場を御切抜なさつたら御隱家は安房の里見殿御領分富山の御堂清念坊かたか左で無くば野州榛名の麓に住居いたす鄕士の北見藤右衛門方であらう此二人の衆は丹波殿とは無二の信友頼ある方々敗れし折の隱家と兼て仰せのあつたれば夫へ尋ねて密に御安否問ひ申されい……必ず〳〵勇氣に早まり生べき時に死ますまいぞ……コレ住江何を泣てお居やる泣て能なら此伯母が疾に泣て居ますぞへ……夫の目出たい出陣に涙はいかい不吉……何恥しい事があらう夫の出陣祝ふて女房の魂に凖へた唐の鏡それ進ぜるが當家の吉例サア早う持來て善七殿へ進上せい……

人の心を汲分て行屆いたる幾瀬が指圖目には泣ねど心には惣身を紋る切ない悲み善七郎も今更に生て返らぬ武士の覺悟胸の苦痛を押隱し心は後前身は一つ流石に思ひ迷ひしが是は叶はじと氣を勵ましし『母上御機嫌よくて』と一言殘し馬に鞭ち宙を飛せて馳出たり

第九回

一足千里の駿馬とは云へ息も吐かせぬ乘詰に鞭鐙を合せて駈たるには何かは以て堪るべき途中にて乘倒しければ善七郎は其邊の百姓馬を雇ひて打跨がり夜を日に繼で駈付る道々の噂を聞くにはや水戸にては合戰始まり謀叛の大將は音に聞ゆる火の車の丹波守、討手の大將は笠間の松平周防守殿八千餘騎にて自分出馬なり其外下總下野兩國の大名衆も各々人數を繰出されての大軍と取々の風說、

すはや事こそ起つたれと折しも此四五日打續きたる雨の生憎に篠束ばかりに降頻りぬるを事ともせず善七郎はひた走りに走りて常陸の國境に着すれば是はそも一揆は何に敗軍との取沙汰に心も心ならず夜を籠て漸くに水戸間近くまで駈付て樣子を聞くに佐竹浪人の一揆は昨朝俄に起り立ち三方より不意に水戸の御城へ押寄せ車丹波守來廻にて三の丸まで攻入たれど御城中には松平五郎左衛門尉殿、由良信濃守殿、菅沼左近將監殿大將にて人數は多し彈藥の用意は十分なり烈しく打出して防がれたれば丹波守は人數多く打たれて一旦引退き那珂川端に陣を据たる處に松平周防守殿新手を連て笠間より後詰に向はれ今朝よりの逆寄にさしもの一揆も散々に打なされ今が合戰最中と聞き、南無三寶仕成たりと水戸城さして前後を分たず進む折しも彼方に聞ゆる砲聲、扨は軍は川岸ぞと道を轉じて駈たりけり

敵味方の死骸は算を亂して此處彼所に横はり河原をば追ひつ捲りつ戰へども何に必死を期したる勢とは云へ敵の多勢に突崩され一揆は四方に追打せられぬと見えて度々たる那珂川端に一人の軍勢だも居らず遙かの所に松平周防守を始め徳川家大將分の旗差物の雨上りの西風に翩翻とひらめきて勝色示す計りなり。此體を見て善七郎は遲かりしく父上には既に討死を遂させ玉ひしかさるにても剛勇無雙の父上年こそ老させ玉へども名も無き者の手に掛つて最期あるべき樣は無しと佇立て見廻せば弓手の方に當りて一むら茂れる松林の中に見覺ある火の車の差物こそ見えたりけり

善七郎は嬉しさの餘りに三足を一足に韋駄天走りして駈付け見れば案に違はず父の丹波守義久は松の根に腰うち掛け一息入れてぞ居たりける、丹波守が其日の裝束は白綾の帷子に科皮縅の腹卷を一縮なし猛者造の陣刀と打刀とを十文字に横たへ好む所の笹穂の槍の血に染たるを傍に立掛け關八州の武士に見知られたる火の車を給ける四半の指物を捨もやらで差れたり。昨日よりの合戰に手疵數多うけ惣身紅に成たれど幸ひ大事の傷ならねば些とも屈する色も無く生殘つたる郎黨二人を左右に從がへ天晴好からう敵の來れかし丹波が最期の一軍して此首取らせんものをと待受たり

善七郎は半町ばかりも此方より

『父上は夫に御座なされまするか

と聲掛れば丹波守は振向て

『ヤア其方は善七郎で無いか、何しに此場へは來られた

不興氣なる問に善七郎は匆劇の中にも兩手を突て拜禮なし

『何しにとは異なお尋ね死なば一所と御最期の御供せうとて駈付ました

『一所に死なうと參つたと申すか此うつけ者めが此戰場を其方が死場所と存じ居かと聲鋭くも一喝

したり

第十回

丹波守は郎黨が汲來れる馬柄杓の水に咽を濕し一息ついて物語を續けゝるは

『善七郎唯今も申た通り大窪兵藏が家來二の丸に忍び入て事顯はれ此上はとて手筈も未だ定まらぬに揚たる旗其上に又降り續た大雨に川々の洪水、彼是にて期を誤つて此敗軍……イヤ丹波この期に臨み殘念とは少しも思はぬ假令思ふ儘に合期して水戸御城を取返して丸に扇の御旗を再び御櫓の上に建た所が味方は十二分に集つて僅か六千か七千の小人數何で德川殿に敵對が成り申さう三日を待たず攻落されて討死するは定の事じや、して見れは此で最期を遂げても二日か三日の違ひ殘念は少しもおり無い

『それ御存知で有ながら何で旗をば御上げ成されました

『夫が佐竹御家の御爲じや德川殿は古今獨歩の大將だけに中々油斷の成らぬ御方、佐竹殿に秋田二十萬石下されてもまだ安心は出來申さぬ畢竟は我等如き無法無敵の常陸武士に事荒立させまいと思して計ひ時機よくば此次は全で改易に爲られうも知れぬもの夫を計つて此一揆、佐竹には此通り主人家の爲には一命捨て犬死する族が御座り申すと云ふ事を德川殿に知せ置きコリヤ侮り難い奴等である此上浮とは佐竹へ手を出されぬぞと德川殿の心底に釘さし置くが此末とも佐竹御家の御安泰を守る一ッの手段それで起した此一揆……、なんの丹波風情が首一ッで御家二十萬石が百年も二百年も取止れば此上も無い仕合じや……是じやに由て其方は早う此の場を立去られい

初めて明す一揆の理由、善七郎はつと恐入り涙を流して

『左樣ならば父上にも此場をば些とも早う御立退召させられい

と言はせも敢ず丹波守は首横に打振て

『立退と申して何方へ立退くな朝鮮唐土へ押渡つたらいざ知らず日本六十餘州いづくの端に隱れて居やうが水戸一揆佐竹浪人の大將車丹波、德川殿威勢で搜し出されるな知てある、隱れ家の召捕れは武士の耻辱、六十越した白髮首、公卿に載て家康公見參に入るが今生の思出申さば一世の晴じや、此一足も退かいで德川武士に我等が首を渡いて遣はす覺悟いたいて居るぞ

『然らば善七郎その御供いたさいでは相成り申さぬ

『エ、又しても汝うつけ申すの、是なる又七、彦五郎の兩人これも疾々落行いと唯今も申諭いて居る所、我等と一所で討死するは阿房の上ない犬死と云ふこと分り申さぬか、汝等ごときはした首

は實驗は愚か懸渡いてもくれ申さぬぞ……但し善七其方これより秋田へは引戻されぬぞ御祟あつて召捕らるゝな必定……臨終の際に丹波が頼み耳掬て承はれ、其方まこと討死と覺悟いたいたなら其命丹波にくれて此落延い……見えつ隠れつ德川殿御父子の附狙へ尤も御一命申受うと思ふな高運の大將天下の豪傑な木葉武者に首取らせらるゝ例なおり無い……佐竹浪人が世に居るぞと御父子の御方に思はせ申せば夫で的に屆く理……見顯された時は磔獄門固よりの覺悟……相分つたか、相分つたら此丹波が志の纖で此大役の身を捨て勤めくれい第一の孝行第一の忠義此上は有まじいぞ……身を潜むるは安房の富山御堂清念坊かた但しは榛名麓の北見藤左衛門方な屈竟の隱家、幸ひ兩人とも其方見知りの人々早う立退けェ、疾う落ち申さぬか

折しも馬の嘶き間近う聞え水色に鳶の葉染たる旗一流、森のかなたに見えたりけり

第十一回

丹波守は槍を杖に延上りて旗印きつと見て

『善七、あれに見ゆるは松平周防守指物、敵手に取て不足ない一手の大將、又七彦五郎其方たち兩人も早う落い我等一所で討死いたすは無益の至り……誠この丹波に芳恩とならば姿の下人に窶し

秋田へ參り我等父子この場の次第を奥へ申傳へてくれい最期の供より遙に勝つた忠節でおりやるぞ……ェ、死なば父子主從が一所で死なうと申すは晴の軍の時の事かゝる一揆に申す詞で無い……物の具脱捨て早う行け疾う落い……三人が三方に別れて去い防ぎは此丹波引受た……聞ぬとあらば七生までの勘當も手ぬるい寧そ此槍で突殺すぞ

怒りの眼に血を濺ぎ手槍取直して身搆へすれば善七郎この上は力無し何にも仰せに從ひ奉り御最期を後にして此場を立去り候はんと又七彦五郎と倶に惜き名殘を告げ立上りつゝも猶躊躇にぞ丹波守は氣を焦ちて

『ェ、汝等何をぐづ〳〵腑甲斐ない女々いし振舞それにても武士じやと申すか

落雷よりも恐しき一喝に善七郎および二人の家來は此上は是非なしと森の彼方の細道を分入つて落にけり。丹波守は遙に姿を見送りて

『先は是にて安心の致いた併し物慣ぬ善七郎、敵勢の後へ〳〵廻つて落往けば上首尾じやが……ム兼々教へ置たれば若年たりとも夫程の心得はあらう我等に勝つた彼奴が膽力敵に討たるゝ如き不覺悟は致すまい

半は案じ半は信じ子の行先を氣遣へる丹波が今はの心中は實にも子を思ふ親心、勇士は殊に哀れな

り。稍あつて丹波守はア、我ながら女々しき心根、人の思はん程こそ恥かしけれと心を取直し再び つッ立上りて物見すれば敵勢は此森中に一揆の總大將たゞ一騎にて控ゆると思はざるにや森を後に 爲して千騎ばかりの旗本勢いづれも折敷て人馬の息を入れ居たりぬ。丹波守は兎ても角ても助から ぬ我が一命同じうは互に顔を見知つたる周防守が勢の者に討たれ此度の高名を得させんと急度心に 思ひ定め腹卷一ゆりゆつて上帶しかと締直し火の車の指物を直に立なし槍を杖に靜々と歩み寄り森 の外に顯はるれば笠間勢の張番は斯と見るよりスハヤ敵こそ出たるなれと槍引そばめ鐵砲取直す丹 波守は馬手を横に打振つて

『騷がれな方々、松平周防守殿手と取受け申す、周防殿な夫に御座るか、車丹波守義久が白髮首か ずならねど進上せうとて罷越した

高らかに呼はれば周防守は床机を離れて陣頭に進み出で

『ヤア珍らしや丹波殿變つた所で見參な致し申すの、貴殿この森中で一息入れて居さしやるな隱れ 無い其火の車で我等疾に承知したが昨日よりの合戰さぞ草臥て御座らうと休息の程相待ち申した

『御芳志千萬忝　うおじやつた何に方々名ある勇士な周防殿名代に此丹波に出會れい……ム、松井 女蕃と申さるゝか、駿遠參にて聞ゆる兵もの丹波に取ては好相手……併し女蕃、今朝からの合戰で

此迺の血汐武士の情じや其方若黨に此槍洗はせてくれぬか

と投出せば女蕃は洗はせて歸し與へぬ。忝なしいざをれ女蕃と互に合す晴の槍名にし負ふ剛勇無 雙の丹波なれども年は老つ手は負ひつ血氣盛んの女蕃に渡り合ひ手元次第に紊れて高股づぶと突拔 かれ尻居にどうと仆れて起直り

『サア女蕃首取れい

第十二回

父の仰せの重ければ善七郎は心ならずも丹波守が最期を後に見て那珂川畔の松林をば一旦は去たれ ども猶も心の引かされければ又七彦五郎と主從三人が取て返し忍び足して原の所に來て見れば丹波 守ははや其には居らず森の彼方には松平周防守の旗本勢雲霞の如くに群がりて凱歌の聲を揚げ揚貝 を吹立て水戸の方へ旗立直して引上ずる體にぞ見えたりける。去るにても父上は如何なされつるや らん彼大勢の中に駈入て討死を遂させ玉ひしか但しは痛手負ふて生捕にや成らせ給ひつらんかと彼 所此所を搜し尋ね居たる所に後れ馳に引上たる兵どもが三四人づれの聲高話に『扨も松井女蕃殿 は此度の軍に第一の高名せられたな名に負ふ車丹波守と槍を合せ首上られたは比類なき手柄ならず

や『さればなり夫も車丹波が昨日からの合戰に疲れ力も弱つたれば女蕃殿に首進ぜられたと云ふ事で言はゞ敵の貰首も同前だと申す事『さもありなん女蕃殿が何程の勇士でも誠火の車と槍合せして勝を取らるゝ事は叶ふまいに扨も〳〵冥加至極の仕合をせられたな……』と人の高名羨みつゝ謗り言して過行たり。之を聞て善七郎は今更の樣にはつと驚き扨こそ父上には討死して松井女蕃とやらんに首取らせ玉ひしよ、ござんなれ其儀ならば御骸死の此邊に殘りてあらんずらん求め奉らばやと又七彦五郎と俱に森の外を尋ねたるに今しも戰ひありしと覺えて生々しき血汐の痕は彼所此所に見え敵味方の死骸も七つ八つ横仆りしかど丹波守のは更に見えざりけり。さらば遙かの川端にて槍合せ玉ひしかと我を忘れて進み行くに管沼の勢五十騎ばかり一揆の落武者あさらんとて列を齊へて來るに出會たりすはや落武者遁すな去らすな引包んで討取れやと侍大將が下知に得たり應と軍勢は三人を追取卷て我討取んと進んだる。剛氣の善七郎忠義の二人心得たりと渡り合ひ多勢を相手の死物狂ひ右に當り左を支へ此を先途と戰ひければ左しもの敵勢少しひるみて見えければ善七郎は此に一條の血路を開き當路も無く落延びたり

坂東道にて十里が程もひた走に走りて後を見れば追來る敵の影も無し今は心安しと路の傍に憩ひ流の水に咽を濕し一息吐て我身を改め見れば左ばかり烈しき戰に遊手一つも負はざりけり。去にて

も又七彦五郎の二人は落延び得たりつるか但しは敵の槍玉に揚られつるか如何したるやらんと案ずれども其甲斐も無し流石に此數日夜書續いて秋田より水戸へ馳通して隨分に身も疲れたるに現在父の討死と聞き其上に多勢に取卷かれ必死の戰に落延び來れる事なれば善七郎は今は心も俱に弱りて一歩も此先歩み得べき氣力も無く其邊の草むらに倒れて暫し疲勞を休めたるに思はず其儘打まどろみ我にもあらで寐入たるぞ大膽にも亦不敵なる

『若殿にては御座さぬか善七郎樣にては在まさぬか去とは御不覺とう〳〵起きさせ玉へ』と呼起されて驚き跳起て見れば黄昏の兩明に見覺ある顏

『ヤアお主は庄屋の與右衛門で無いか、どうして此へは

『どうしてとは御身樣の事この敵中の路傍にお臥りなさつて御座らつしやるは餘りの不用心

『ム、起してくれて忝ない、シテ此は何所の何村じやな

『ハテ異な事の仰しやります此は御領分の……

『オヽさうで有つたな、軍の中で此善七も餘程心が周章たと見えるハヽア

『お笑ひ事では御座りませぬ

四方を見廻し低聲にて呼げば善七郎は打諾きて

『左程に父上の舊恩の思ひ吳るか、與右衛門この善七郎厚う禮の申入るゝ、然らば今夜お主が宅へ裏口より……

『コレサお靜かに成さいまし

第十三回

車丹波守義久が同志の人々と語り合ひ陰かに水戸城回復の大望を思立ち忍びやかに軍勢を集めたるに其事露顯に及びければ座ながら空しく德川殿城代の手に追捕せられんよりは手筈いまだ整はずとも今生の思出に最期の軍一軍して佐竹武士の肝魂を德川殿に見せばやとて一揆の旗を上たるは實に慶長六年七月廿四日の午頃にて討死したるは其翌日即ち廿五日の午過にてありけり。扨も善七郎も太田の庄屋與右衛門が家の納屋に忍び居て且は德川方の追捕を避け且は父が最期の狀況をも聞かんと日を送りけるに八月三日の夜に至り與右衛門は密に善七郎に告げて申すには

『愈々今日恐れながら大殿のお首が水戸の靑柳口に懸つて其御側に火の車の御指物も立て御座ました

『シテ外々の首級も掛つてあつたか

『左樣てござります中段には馬場和泉守殿、大窪兵藏殿、小貫源助殿、馬場新介殿の五つが並んであつて上段は車丹波守と首札打て大殿樣お一人、尤も下段から左右の竹には御侍がたのが澤山に掛つて御座りました……水戸御城下での取沙汰では車丹波守は一揆の大將德川殿にも兼て御見知りの御家老とあつて御首をば態々江戸へ進上に成て家康公の御實驗に備へ夫から又水戸へ返されて三日の間お懸け成さる事じやと承はりました

『成程さうであらう、シテ父上御最期の場所はどこであつたか、お主それも聞糺いてくれたり

『御最期は場所は那珂川畔の松林の前で松井玄蕃が槍を付て大殿樣が尻居にお成りなすつてサア玄蕃首取れと仰しやッたれば玄蕃が一禮して丹波守御介錯仕ると式壓してお首を上げたは天ぱれ武士じや感心じやと評判を致して居りまする……夫から御死骸は松平周防守殿が御申受に成てお引取りお首の晒しが相濟だ上で、車御家の御菩提所へ葬り御具足御刀御槍その外みんな揃へてお寺へ納めに成ると申す事で唯今御葬送の用意中じやげに御座ります尤も火の車の御指物は關東の名物じやに由て周防守家の寶にすると御申受の積りと云ふ風說で御座ります

善七郎は委細を聞て涙を流し

『アッ德川殿と云ひ周防守並びに松井玄蕃敵ながらも情を知り義に厚い計い方、成ほど天下取はさ

うあるはず恨む所は少しも無い、併し夫を嫉く恨まねば成らぬとは忠義の爲とは云ひながら能々武運に拙ない身の上

『エ、何と仰しやりまする

『イヤこりや自分が當座の述懷、根も葉も更に無い事じや……夫は格別、落武者の詮議はどんな樣子であるな

『サア夫が中々嚴しい御沙汰今日明日には惣村方一軒殘らず家搜しての御詮議と申す事……モシ若殿樣とても此家に御座りましては……

『危いであらうと我等も疾に存じて居れば明日とも云はず今夜當家を立退く覺悟……イヤ落行く先を御主に明すだけは許してくれい……此度の介抱御主の義心、善七郎一生忘れは致し申さぬ

斯て善七郎は支度を整へ此夜の中に與右衛門方を立去つたり。翌三日水戸の青柳口にては車丹波守の首級が昨夜紛失したり何者が盜み取たるかとて以ての外の不審を爲す所に水戸の上市なる吉田村の畠中の小高き所に一樹の松ある下に新に土饅頭を作り立て其上に田境の印に用ひたる角杭拔取りて突建て其杭に墨黑々と

車丹波守義久首塚

慶長七年壬寅七月廿五日爲忠義於那珂川邊遂討死了同八月三日葬之義久一子

車善七郎猛虎建之

と書記したり扨こそ善七が所爲不敵なれと驚かぬものは無かりけり

第十四回

車丹波こそ此度水戸表にて一揆謀反の張本なれ悖の善七郎膽太くも丹波が首を盜み取り私に葬つたる自筆の證據、彼奴も固より徒黨の一類とあつて嚴しき御尋ね、然る上には丹波善七父子の一屬親類この秋田に差置かれては德川殿より何なる御祟りが佐竹御家にあらうも知れず、彼等由緣の者ども早々改易の上に追放相成て然るべしと城中にての評議、家老職たる田中越中人見主膳其外の面々より主君右京太夫殿へ申立て殿にも心中哀れとは思はれけれど德川殿へ對して捨置べきにあらねば其通り取計らへとの御沙汰ある。是に由て車が老黨吉田所左衛門を呼出され車丹波が跡引改易仰付らる家財は下さるゝ間今日より三日の中に丹波が家族とも一人殘らず秋田御領分外へ立退き申すべしと評定所にて役人より嚴かに言渡されたり

所衛左門は丹波守が賴みに思ひたる老黨ほどありて敢て驚く景色も無く恐入り畏り奉る旨の御

請を爲して歸り云々の由を幾瀬に告知らするに幾瀬も亦斯る不祥は有べしと心に期したる事なれば別に騷ぐ景色も無くて

『何さま左樣な御沙汰であらう丹波殿善七郎父子の方が謀反大逆と成られた上は其妻子はじめ一家の者が無事で居られう理も無し御當地立退けとあるは當然……夫に付て所左衛門御身には重ね重ねの苦勞役では有うなれど丹波殿お殘しあつて當地へ持參つた金銀衣服武具資財一ッ殘さず家來中に分遣はし及ぶ程の手當して明日中に暇出して下されい……否々自分の事は案じに及ばぬ住江もろとも出立の時に肌着の金子不相應に澤山用意して參つて居れば此先何方へ立退ても不自由には無い……夫じやに依て兩人の衣服手道具これも殘らず女どもに取らせて下され……自分は住江を連れて江戸へ參り當分の中は天野遠江守殿かたへ身を寄る所存、天野殿の母上は自分の叔母御前親しい續きの從兄弟ゆゑ疎略には致されまい……サア江戸までは大儀ながら御身に送つて貰ひませう其積りで萬事よしなに計ふて必ずともに丹波殿名の汚れぬ樣に賴みまする

流石は丹波守の內室善七郎の母ほどあつて行屆いた言付けに所左衛門は承知して夫々其取計ひを爲しぬ幾瀬は住江を近く招き二人が差向ひに成りて涙ながらに

『さて住江どの今度の騷動餘りの悲しさに涙の出る隙さへ無いが丹波殿には覺悟の上の御討死千萬

悔ても返らぬ事……幸ひ善七は命永らへ隱れて居るは定であるが卿は善七どの〻行衛案じられは致さぬか』心の中を見拔たる尋に住江は涙を押拭ひて

『案じられは致しまするが御行衛先は知れませず縱んば內々夫と勘付て居ましても母樣のお側に附添ふ私ゆゑ……

『オ、分りました、心は二道身は一ッ母と夫の何れが大事と思ひ迷ふて居るであらう、それでは二人が江戸へ參り天野殿へ落付て私が身の案じが無い樣に成たなら

『サア其時こそ母樣へお願ひ申してお暇を戴きまして善七郎樣の御行衛心當りの隱家へ尋ねて參り度と存じまする

『さうかいのウ、シテ其隱家を卿は知て居やるか

『ハイ此程あなたが善七樣へ……

『ム、話したのを覺えて居ての

『よう覺えて居りまする

『オ、夫でこそ車善七郎猛虎が妻の住江じや常々私が敎へた通り武士の妻は夫の討死に心の中の悲しさは俱に死たい位でも涙一滴こぼさずにじつと堪へて後々の始末をせねば成らぬ時もあるが又

夫の爲にはどんな艱難辛苦をしても俱々生死を一體にせねば成らぬ時もある夫婦同體と云ふ事を必らず忘れては成りませぬぞ……いやつい話しに實が入つて日の暮るに氣が附なかつた、住江や御佛前に御燈明を點てたもお稱名を申ませう……

第十五回

夜も既に明放れつるに日頭早起の奥方が今朝に限りて未に起出させられぬは不審しとて侍女はそつと襖瀬が寐所の襖を開て一目見るよりあッと愕き住江様御寐人様所左衛門どの早う〳〵と聲を限りに周章て呼立る何事の起りたるぞと住江も所左衛門も走り寄て見れば是は何に幾瀬は臥具を壘みて片脇に寄せ置き赤に染て打臥に成りて死だりけり驚きて抱き起すに左の乳の下を護刀にて切先脊に通るまで突立て息切てより既に時刻を經たりと覺しく惣身全く冷て聊かの體溫も無し素より覺悟の自害とて女の嗜み衣服を改め枕元には机を直し夫丹波守の假位牌を中央に備り燈明を點し今世の際に讀まれたりけん觀音經一卷と珠數一聯とを其右に置左の方には善七郎へ一通、天野左衛門へ一通、住江へ一通、所左衛門へ一通と合せて四通の書置を認めて封じありけり所左衛門に早う〳〵と急れて住江は封おし切て讀下すに

わらは唯今自害いたし候は世を恨みてにも無く又心狂ひてにも候はず夫や子に死別れ生別れ致し候は亂世の習ひ武士の妻母たるものには當然の事で候に斯く相成り候は足腰きかぬ者が生長へ居り候ては御身はじめ所左衛門どの其外の人々當所立退の妨げ夫のみならず老の身の病人が是よりして又候ふ他國他所を吟ひ歩き後指さゝるゝは車丹波守殿の恥に候間惜からぬ命を果し冥土へ參り丹波殿の後追いたく申し候。御身には車善七郎と申す武士の妻女昨日申聞られ候ふ心底に候はゞ善七殿の跡を捜し善も惡も夫と俱に生死を一つに成さるべく候。善七殿の居所心當りは御身よく存知に候へば改めて申置かず候能々心に秘置て所左衛門の外は誰にも口外いたさる間じく候。もし善七殿に廻り合ひ申さずば直に江戸へ參り天野殿へ便り申され候へ。依て天野殿への一封認め殘し置き候。併し天野殿へも善七の事は明されまじく候。善七への書置は御身より屆け給ひ候へ。諸事は所左衛門へ相談いたし一刻も早く當地を立退き申さるべく候。心急ぎ候まゝ用事のみ書殘し置き參らせ候かしく

八月十一日　住江どのへ

所左衛門への書置は

幾瀬

自分事この世の暇を玉はり候は丹波守殿の恥を厭ひての事委細は住江どのへ書残し候ふ通りの譯に候。是まで御身には一方ならぬ忠義を盡され候事いつの世にか忘れ申べき冥土にて丹波殿へお逢ひ申し候はゞ眞先に此事申上べく候。此騷ぎの中なれば自分の死骸は何地にても前栽の隅にても宜しく形ばかりお隱し下され候へ。住江事一刻も早う當地を立退かせ下さるべく行先は同人心得をり候。但し御身附添はれては人目に立ち候間誰か心利て慥なものへ御申付け送らせ給はり度くれ〴〵賴み置き申し候。後々の事は昨日も申入れ置き候通りに取計ひ當家の恥に成らぬやう萬づお心得賴み置き申候以上

八月十一日　　幾瀬

所左衛門どのへ

細々と認めたる水莖の跡墨色も變らず筆の運びも常の如くなれば最期の際まで其心の落着て亂れざりしは是にて知られたり

所左衛門は住江を勵まして御悲傷はさる事なれど涙に暮て居たまふ時では候はず役人たちに見聞されては御遺言も徒らに成り候べし御後は某が兎も角も計ひ候はんが夫にしても唯か御供に申付け候はんと老功の所左衛門も是には屈托して思案に餘りて見えたる所に

『其御供は私が致しませう

と生墻の外より聲掛たり

第十六回

住江も所左衛門も思ひ掛なき聲に恟りして何奴なるぞと振返る。墻根のくねを押破りて出來れるを見れば郎黨の遠藤又七。それと見るより

『ヤア汝は又七で無いか

『オ、遠藤か。どうして其へは御座つたか

『サア水戸の戰場を切拔け危き一命助かつて大殿樣の御遺言お傳へ申さん其爲に遙々是へ引返し畫は人目の繁ければ昨夜この御城下に忍び入り此曉御裏手の塀を乘越え此通り御庭外まで參りましたに思ひも寄らぬ奥樣の御最後、住江樣所左衛門殿の御相談聞とも無しに承はり夫でお供の御願を卒爾に申上て御座ります

此又七は彦五郎と俱に善七郎の左右に從ひ取て返して那珂川畔にて敵勢に渡り合ひ必死に成て戰ひたるに多勢に押隔られて善七には離れしが一所に働いたる彦五郎は痛手負て討れたれども又七は僅

かばかりの微疵一ッ二ッ受たる儘にて不思議にも其場を切抜たりければ丹波守の遺言を守り敵中を忍び潛りて此秋田へは漸々歸り着たるなり、尤も善七郎が生死の程は見屆ざれども我より先きに一方を切開き玉ひつるなれば必らず無事に落延させたるに相違なしと思ふ旨ども落も無く物語りぬ。

住江も所左衛門も毎毎に或は驚き或は感じて果は三人が悲嘆の涙に六の袖を濕したり

『アッ遠藤、貴殿の剛勇忠義の働き此所左衛門感心いたして涙の催しした。唯今の物語では若殿善七郎様には貴殿推察の通り御無事で其場を御引上なつたに相違ない神變不思議の早業常陸一國で肩を並る人の無い若殿葉武者どもの手に掛つて討たせらるゝ法はおり無い。……但し遠藤、貴殿その大事を承つて立歸り一寸の疲を休めいで住江様お供して遠國すること成り申すかな

『それ成らいで何で自分から御願ひ申さう此中から貴は山中に寢て夜は走つた道中ゆゑ結句疲は御座り申さぬ。お膳の戴いて二時ばかり御隙貰ふて一睡の致せば今日お午の御發足に安々お供は成り申す……ハヽア今夜のお立とあらば猶更でおじやる其段な御安心願ひます

『シテ又七卿の疵所がひどう疼みはせぬかいのウ

『ムヽ疵所……成程かすり疵の事で御座りまする、其疵な用意の痛藥打て置ましたれば疼は少しも無うて今に癒る計り自分ながら忘れて居り申す程じやゆゑお案じは些とも御座らぬ。……夫より

は住江様早う緩りと御心靜に旅のお支度なさりませい……シテ所左衛門殿住江様お出の先はな……御當人様御承知とならば承はらいでも宜しう御座る……

甲斐々々しくも又七は所左衛門と謀りてそこ〳〵に住江が旅の用意を整へ金子は兩人に分ちて肌に着け住江は賤の女の少し蓮葉なる姿に裝束ち手拭もて髪を包み菅笠を目深に冠り又七は仁田山木綿の單衣に手甲脚半大脇差の胴金入たるを落差に帶し衣の裾を高く寒げ腕より引出したる栃栗毛の乘馬に故々馱鞍を置き荷物の行李を左右に附け其上に住江を舁乘せ喩はゞ人買商人が鄙の女を買出して繁華の地へ連行く如き體に見せ日の暮るゝ頃に秋田を離れ鼻唄うたふて馬の鼻綱を取り出立たるぞ不敵なる

是より安房へは遙々の道中常陸を過らんは近けれど流石に其恐あり寧そ本街道をたどりて廻りなれども下野より下總に出で關宿より船にて利根川を下り又船替て安房へ渡らんこそ安全なれど其道に掛り日數經て關宿近くに來りけるに夫迄は無事にて道中したる身が此處にて思はぬ難に出會ふたり

第十七回

關八州の中には數へたれど東海に突出したる安房の國、殊には德川殿と同じ流れの新田の庶族その

一に數へられたる里見殿數代の所領なれば德川殿にも諸事に付け御遠慮ありて領内の政治およそは里見殿心任せとありければ浪人の詮議ども左までは嚴ならざりけり、殉てや此は城下を離れたる富山の奥の御堂なれば參詣とても常は稀にして訪來人も無かりけり。住職の清念坊は七十に近き老僧なれども鑊鑠たる頑健秋空の冷かなるを事ともせず御堂を初め境内の掃除まで一人の寺男を相手に自から成し看經の暇には菜園を耕し折々は太らかなる樫の棒を打振り隆々と水車に廻しなどして筋骨を養へるは何さま昔は由ある人と思はれたり。方丈の傍なる一間の襖を明て

『どうじやな。今日は氣分はどんなで御座るな

と問へば善七郎は蒲團の上に起直りて

『上人 忝う御座る今日は大きに氣分も宜うて震ひ日ではあんなれど今だに震ひが催しませぬ

『そりや重畳扨は愚僧が城下で求めて參つた瘧の妙藥あれで落たと見ゆるな

『何樣 私も左やうじやらうと存じます寶藥じやと申して中々悔るものでは御座りませぬな

『サア當るも八卦當らぬも八卦と申すと同じ樣な理で寶藥もマア其如し。御邊の瘧の苦みも宿業それが落るも果報で是が世に云ふ廻り合せで御座らうて……マア〳〵宜て結構、心緩りと是からの養生が專一……早う此娑婆世界の穢土を去て常樂無爲の淨土に往度と云ふは此上も無い無明の迷

ひ坊主等が嘘の皮、此世ほど面白い所があるものか、殊に武士は猶更のこと命あつての物種じや御邊とて其通り心底は愚僧存ぜぬが何れ大望ある身の上、何でも身體の健全に成らねば心ばかりが猛くとも役に立たぬ、精出て養生お仕やるが肝心で御座るてのウ

『御親切の御詞善七身に餘つて忝う存じまする。先月中旬これへ便つて參つてより不慮の病氣瘧の病に取付かれ殊の外の御心配を掛け恐入たる仕合何とも御禮の申上やうも御座りませぬ謹みて謝詞を申述ぶれば清念坊は呵々と打笑ひて

『ハヽア又々御禮の口上かの、病氣の世話するもされるも是が佛の謂ゆる因緣この清念も御邊知らるゝ如く其昔は小田原武士、隨分戰場で首稼いだ報で今では此ざま。木魚叩いて念佛申しても何の罪が滅しやう責ては世に在りし時の朋友車丹波守殿が子息の御邊を匿ひ病氣の世話するが誠の罪滅しで我等に取ても仕合じや……なんの〳〵御邊これに御座つてはや一月めつたに知れる事で無い。少々に勘付た所が此一山の百姓ばら二十年來我等手に附て置たれば訴人する氣遣は更らに無い。夫に里見殿とて德川殿譜代では無し草を分つて詮議し召さる程に犬馬の勞も取られまいて

『左樣とは存じまするが濟尾花の風に戰ぐにさへ心置るゝ落人の善七一ツ所に長居は恐れ病氣全快の上は早々御當地を立退く所存その折には剃髪いたし墨染に姿を變へ御坊御弟子と名をかたり徘

徊いたさうと存じまするが……

『いや夫は悪い一旦坊主姿に成て幸先の好い例しは昔よりして無い事じや……何憚りぶ有らう大小横たへて大手を振り常陸浪人車善七郎……と名乗るのは流石遠慮であらうが……さうよ叔父御の吉井源内左衛門が一子吉井源七郎とでも名乗つて立派に諸國の立廻るに限る……今少し日が立たら車善七でも左まで詮議する様な徳川殿では御座らぬてや

隔意なく語らふ所に寺男は走り來りて

『御坊様これに御座りましたか年若な美しい女中が旅姿して御坊様御尋して案内乞て〻御座りまする

『ナニ年若の美人が此老僧に逢度と申して參られたとな、是は珍しい事じや、いざ罷出て女菩薩の拜さうかな

第十八回

清念坊は高笑しつゝ一個の處女を後に伴ひ再び善七郎が居間の襖を斟酌も無く一尺ばかり明け立ながら顔を出して

『善七殿、美人が拙僧の尋ねて參つたと承り飛出して逢て見たら大きな見當違ひで御座つた。サア御前、用あるとお云やる方は此にじや寛りと咄しの致し召さい。寺じやと云て少しも遠慮には及び申さぬ何なりと勝手におしやれハヽヽヽア

と後なる處女が手を取て恰ら突飛すやうに一間の中に押遣て笑ひながら襖をはたと締切り空念佛申して去たりけり。善七郎は過去未來の事ども案じ手を叉きて居たる所に突然に清念坊が女人を案内したるに驚きて振向て見れば住江にてぞありける

何にして是へは尋ね參られたるぞ扨も母上には如何渡らせ玉ふぞと問ひければ住江は先づ善七郎が秋田を發足したる後に水戸一揆敗軍の噂聞え、車の家改易と成りて丹波守一族の輩は佐竹殿御領分外へ御追放の御沙汰、母上には云々との御書置ありて生害を遂げ玉ひし事ども落も無く物語りて。扨も夫より住江は又七を供に連れ關宿近くまで來り最はや心安し關宿より船に乘りて利根を下り遂さへすれば安房へ至らんは安穩なりと悅び勇みて馬を早めたる處に。思ひ掛なき山賊共十人ばかりにて黄昏近きを 幸 に我等主從をおつ取卷き追剥なさんとす。又七も初は種々に陳じ賺して遁れんと言做たれど素より路用衣服に目を掛たる賊等なれば聞かばこそ多數を頼みに手籠に成さんとす。又七かくと見るよりはたと怒り己れと云ひさま住江が手を取れる二人の賊を引捉へて大地へどうと

投付る。是が爭鬪の始にて十人ばかりの荒くれ漢ども拔連て切て掛る。心得たりと又七も拔合せ住江を後に圍ひつゝ彼等を相手に切結ぶ。又七素より手練の兵法者ではあるなれど足弱づれではあり地理は不案内者たり戰ひ疲れて石に躓きよろめく所を得たりと惡徒が切込む刀を受損じ肩先したゝかに切付られ痛手に堪らず尻居に倒るれば惡漢どもは寄集りて滅多きりに盤掛て切殺したり、住江は既に二人の賊に拂へられ振放さんと急れども女の力の弱くして敵ひ難く目前に家來が打たるゝを見て無念に齒を喰縛る計なり。又七は殺されぬ今は斯よと見えたる所に森の彼方より人馬の物音、乘替つれたる武士十四五人の供連にて出來り斯と見るより、それ狼籍者ぞ打て取れと下知なせば各々應と拔連て切掛る。惡徒どもは思はぬ新手の後詰に出合ひ蛛の子を散らす樣に我先にと逃去たりかの武士は馬より飛下り又七を引起して介抱なせど已に息切れて詮も無し。優しうも住江に向ひて御身は何國の人にて何地へは赴かるゝと問ふまゝに、是は出羽の國の者にて候ふが由緣の者を尋ね安房の果へ旅するもの思はぬ難に出會ひ家來の者を山賊等に討たれ御覽はす通りの狀況にて候ふと答ふ。かの武士は、危き事にて候ひぬ、去りながら心强う思召せ某この所の者等に申付け安穩に安房まで參らるゝ程の事取計はせ申すべし。但し和御前は出羽の國者にては候はじ詞の訛り擧動を見るに常陸の人にて爾も由ある武士の息女なりと見て取たは餘も傍目にてはあらじ、佐竹殿身内にせよ常陸浪人の妻子にせよ女には祟なし眞實申されなば只今申す如く安房へなり何地へなり送屆させ參らせうが、僞言を云はるゝでう此場は一寸も動かせ申すまい、斯いふ某を誰と思はるゝぞ、忝うも德川殿の仰せ承はつて此邊の非違を警むる彥坂小刑部で候ふぞ……聞も畢らず善七郎は

『シテ眞實名乘り申されたか

『ハイ眞實名乘りました

第十九回

眞實名乘たりと聞て流石の善七郎打驚いて

『エ、眞實名乘たと。女と云ふでう無還慮千萬な……車丹波守が娶じやと申したか

『イヽエそりや申ませぬ。常陸そだちの武家であらうと彥坂小刑部に見拔れた上は慇な詐いふては露顯の小口と存じたゆゑ吉井源内左衞門が娘千代じやと亡姉の名を名乘りました

これを聞て善七は少し落付て

『シテ小刑部は何と申した

『所がな、聞しやりませ、緣と云ふものは何處にどう繫がつてあるやら知れぬもので吉井源内左衞

門娘と聞て小刑部は恟りして、……其源内左衛門殿こそ我等父刑部とは上泉殿同門で兄弟の義を結ばれた御方、既に我等武者修行して先年水戸へ参つた時な吉井殿方へ暫く滯留の致いたが其折に御女子二人御座つたが……と里の事ども概略聞て……扨々御身様今では便り無い身で安房の御由縁へ御越とな宜しう御座る此小刑部送らせて進ぜる。但し安房で御落着に御難儀とでも御座つたら江戸へお越あつて關東郡代の一人彦坂小刑部とお尋ねあれ、屋敷は芝浦道場の邊で直に相知れ申す、一體は我等安房まで送り屆け致す譯じやが御用の途中その儀に任せ申さぬ……と種々信切に劬つて關宿の名主へ言付け洲崎まで参りまする船の世話すべて致して呉られて御座りました

是まで道中の事ども物語れば善七郎は漸くに安心なし、さるにても徳川武士いかなれば揃ひも揃ふて信義に厚き人々かな是も畢竟家康殿の掟きびしう實意專らとせらるゝゆゑ斯る名將軍を敵と恨む事の不運さよと心に感じたるが否々さる了簡ありては武士の不覺、父上と云ひ母上と云ひ健げな最期をお遂なされたも原はと問へば徳川殿が佐竹御家に對しての仕向から起つた事その恨は縱ひ利根川の水は涸れ印旛の沼は干潟と成るとも竭る時のあるべきやと胸の燄は烈火の如くに燃出し母の形身の書置をじッと見詰め落る涙は無念の半の光るかとまで思はれたりさる程に清念坊は住江が身は未だ祝言こそせね善七郎の妻と定まれる上は即ち夫婦、寺に宿らせ一

所に置とも苦しからずと言たれども且は父母の喪中かつは淨地を穢すの憚りとて住江をば御堂の境内なる或る農家に賴みて止宿させ晝間は來りて善七郎が看病に心を委ねたりければ其力と云ふにも有るまじきが善七郎の瘧病は癒て次第に元氣を復し原の如くに壯健には成りぬ是れ十月中旬の事にぞありける

何時まで此僻地に身をば潛むべき、いでや是より亡父の遺志を續ぎて徳川殿を狙はんずるものをと心を決して、或日住江に對ひて『善七は深く思立つ事ありて不日に當地を發ち關八州の境をば彼此と遊歷いたす所存なれば卿は是より江戸へ往き天野殿かたへ身を寄せ玉へ、約束こそ致したれ未だ夫婦の語をせぬぞ幸なる天野殿の計ひにて唯人にもあれ由ある人に身を任せ一生涯を安らかに愛たう暮され候へ、兎ても角ても善七は一生を浮浪に送る覺悟なれば住所とても不定なり妻を養み得べき身ならねば卿が誰の妻に嫁れうと、更に恨とは、八幡大菩薩、存じ申さぬ、此事よう聞入れて其分に致されよ』と、理を立て最などらかに說示したるに住江は、中々に聞入るべき體も無し

『さりとは情剛なり是程に申すも詮する所は卿の爲なり。何と申して善七が申す事を承知なきやと』故と氣色を變て問詰れば住江も亦氣色を變て

『其事ばかりは御理解に從ふ事が出來ませぬ

と詞涼しく言切たり

第二十回

善七郎は膝立直して

『何故あつて善七が卿の爲を深う存じて申聞た理解をば聞入ること出來ぬと申さるゝな

其譯聞うと攻掛れば住江は兩眼に涙を湛へ聲震はせて

『譯聞くにも及びますまい此住江は車善七郎猛虎と云ふ武士の妻、夫婦の語ひを仕やうが仕まいが夫婦は夫婦、七生までの夫婦で御座ります。殊には母上とも頼み姑君とも敬めた叔母上の臨終の御書置にも御身樣と生死を一所にせいと仰やりました又常からして夫婦は一體じやぞとのお敎へ御身樣が流浪なされば私も與々流浪してどの樣な難儀も致しませう、……立身出世ばかりが武士の嗜では無い御忠節や孝行の爲には乞食非人に零落るも男の意地それ程の事は愚でも能う心得て居まする……御身樣これからの御覺悟に付ては何なされうと一言の善惡は申しますまい夫やア お心次第私しは又お差圖うけて何樣な御用でも身を粉に致いて働きませう夫でも御身樣は緣の切ると仰りまするか……御身樣が秋田お立ち召さつた時に進ぜました肌の護の唐の鏡あれこそ私しが魂お預け申ましたからは取返しは成りませぬ……夫とも是非に夫婦の契りを斷つと御意なされまするなら仕樣が無い惜うも無い命を捨て御兩親樣のお後を追掛て、住江は善七郎樣の仰せで據どころ無う參りましたと申上る外は御座りませぬ

詞も淀まず心も亂れず思ひのたけを打明たる住江が心底、常の處女にあるべしとも見えざりけり。

善七郎は住江が貞心の鐵石も及ばざるを篤と見て取り詞を和げて

『免し召され、善七郎惡う御座つた、何にも夫婦の約束いたいた上は契を結ばでも御身は誠に我等が妻女じや……合點が參つたな……合點が參つたらば善七郎折入ての頼みがある、聞て下されうか

『仰しやる迄も無い夫の言付、火の中水の中でも厭ひませぬ。サア仰やりませ

『然らば言はう……御身の一命この善七郎が唯今此で申受たい

『ナニ私しの命を御所望で御座りますとな……宜しう御座ります、差上ませう、サア御存分に成されませい

些とも驚かぬ堅固の覺悟、首さし延て座を搆へたるは男も及ばぬ氣象なり。善七郎はやをら傍の刀を引寄せ立上りて

『住江覺悟は宜しいな、唯今申受るぞ

『御念には及びませぬ、併し御兩親樣へ御身樣の御心中御申上に成りますなら住江が承りまして

お取次を致しませうか

飽まで据つた度胸の强さに、善七郎はひたと、住江が前に座りて

『天晴じや夫でこそ善七郎が妻その心底の慥を見込で言付る事がある

極めて聲を潛め耳に口よせぬ計に談合に及びたり。仔細は知るに由なけれど住江は聞ごとに或は驚き或は感じ、さすが剛氣の女ながらも思ひの外の言付に暫しは眼を閉て默止たりけるが稍々姑くありて一旦は蒼白たりし顏の色も原に戻り胸うてる浪も靜まりて

『畏りました一命かけて大事のお役を、きつと勤め終せて御寛に入れませう……が……が善七郎樣この役首尾よう勤め終せても仕損じても、どうで命は捨る覺悟……冥土へ往ても夫婦はやつぱり夫婦で御座りませうな

力を籠めて念を押せば善七郎は打諾いて

『勿論じや其曉には御身ばかりで無い此善七も供々是じや（と右の平手を堅にして我首を叩きて）

一時半刻の前後はあらうが三途の川も死出の山も手を引合て夫婦づれの道中じや

これ聞て住江は嬉さの餘にワッと泣伏たり

第二十一回

善七郎は住江が更に江戸行に付て云々しては何にと云ふを聞て首を横さまに打振りて

『否々夫は却つて能うあるまい、彼の天野殿な我等も兩三度面會致いて存じ居るが中々の分別者で頗る老功の武士、我等ごとき若輩ものゝ手に乘せらるゝ人でおり無い。其上に母上が車丹波守の內室で我等が母じや人と云ふこと能う知てじや、御身が其手紙持て尋ねて往たらば身に引受てどの樣にも信切に世話はお仕やらうが腎肝な大望を達するには妨害にこそ成れ助には決して成り申さぬ、德川殿御內でも音に聞ゆる老兵者そんな所に油斷があらう筈は無い……君子は危きに近よらずとの戒め、天野殿へ便るなどゝは噎にも出されぬ沙汰……夫よりは御身、彥坂小刑部を便るが上分別あの男御身が車家の嫁と云ふこと知らぬが沒化の仕合、何處までも吉井源內左衞門娘、佐竹殿お不仕合で遠い身寄の誰々も秋田へ參つて小身に成下り世話の致しくれぬ故と言立て都合を計つたら思ひの外の手蔓があらうと存じ申す、……其にしても安房の國の身寄と御身言はれたな……それ何の言繕ふて宜らう

工夫にあぐみて居たる所に襖の外より

『御二方、御内談は了ましたかな。こゝ明ても差支は御座らぬか

聲掛たるは聞慣たる清念坊の聲

『オ、上人で御座りますか、頓と支は無いサア御入なさらッしやりませい

『さらばお妨害いたさうかな（と座敷に入りむづと座を組て）住江御寮や善七郎殿にも原の樣に達者に成られて重畳ぢや……扨近日當地の立ち召さるとの事聞いたが御身樣も定めて一所で御座らうでな

問掛るを能い幸ひと善七郎は忽ちに思案胸に泛びて

『サア夫に付て實は上人に分別のお借申さうと存じた所。御承知の通り我等是より關八州から駿遠參あたり武道遍歴の所存尤も聊か所存の程も御座るが……

『イヤ其所存この老僧聞に及ばぬ、シテ老僧に借たいとある分別は

『外でも御座らぬ此住江。拙者修行中は江戸へ出て武家奉公など致いて相待ち申し度と達ての望み……先達て御聞あつた通り總州關宿にて德川殿御内彦坂小刑部に便らうとは存ずるなれど一旦安房の身寄を尋ぬると申せし故に

『ム、獨り遣はいては氣取れて都合が悪いと云ふのであらう。……何の理も無い事じや此清念が同道いたいて江戸へ參り刑部へ申さうには……扨この住江は御承知の通り常陸の吉井某の娘また拙僧は其昔し小田原の武士何の某と申して唯今は安房の是々に住居なす坊主、しかるに吉井とは世に在し時に女房の縁で繋つた中、それで住江が便つて遙々と參り申したが何を申すも貧乏寺で殊に若い女を世話いたすも後暗い世の誹り、幸ひに此住江關宿にて貴殿御介抱に相成た趣き迚もの事に武家奉公の望み貴殿なにとぞお世話下さるまいか……と嘘も方便じや好事に用ふれば罪には成らぬ甘く說て賴で進ぜう

『そりや萬々忝うは御座りまするが、萬一その奉公先にて意外の事でもあつた時に御坊樣へお祟があつては

『ハテ祟りがあつても苦しう無い……どうで車丹波が息や嫁じや當然の事は致されまいと老の眼で疾から睨んで居る……其樣な斟酌は少しも無用……祟りが來たら此長廣舌でずるりッと言拔て見せるは何でも無い事、爺媼だまかいてお賽錢出させるより易い程じや……住江どの江戸行は清念が引請た、御身樣は案じ無う發足いたし召されい

と口には明て言はねども兩人が胸中に一物ありと察しつゝ潔くも引受たり

第二十二回

一年三百六十五日いつも大吉日に違ひは無いが人が悪いと云ふ日に態々發足召さるでも有まい幸ひ明後日は住江殿も黄道吉日と申さるゝ武士の門出幸先祝ふが吉例なれば同じくば明後日に致されいと清念坊の忠告に善七郎も然らば御意に從ひ中さんとて武者修行道中の用意ども細々と住江が注意にて行屆き殊に旅費は善七郎秋田出立の節に相當の用意を爲して所持し其上に住江が持參の金子も過分にありければ善七郎は當分不自由なき程を身に附け其餘は清念坊に渡して住江が事ども入用よろしく取計ひ玉ひ候らへ猶餘りあらば上人預り置たまへ自然旅先にて差支へなば文通して願ひ候べしと托み置き。斯て十月十五日と云ふに善七郎は富山御堂を出でたり、住江も清念坊も寺の門まで見送り盡せぬ名殘を惜み分て住江は心に承知の事ながら何時再び會ふとも期日も確ならぬ事なれば別の際まで旅先の音信は斯々して度々安否を知らせ玉へ若も疾病に掛らせ玉ふ事ども候ひなば云云して報せ玉ひてよ妾はせ參り候はん勇氣に速りて氣短なこと仕出し玉ふなと涙を袖にて拭ひつゝ諫めたれば善七郎は一々諾ひて優しうも住江が是より先の心得ども言示したり。責て村外れまでと住江は切に見送りを望みたれど却て人目に立て兩人の爲に惡かりなんと清念坊に止められ門前にて

別れを告げ後姿を見送りける心の中思ひやられて哀なりけり

善は急げと申すなれば住江殿の江戸行も急ぐこそ好しけれと清念坊が勸に由り住江は支度そこ〳〵に整へ善七郎の發足より三日を經て清念に伴はれ御堂を出る事と成りぬ清念は是なる娘に愚僧が俗緣の姪にて今度江戸の親類まで送り遣はすなれば十日ばかりの旅行その跡は留守賴み置き候ふと村中の人々に申聞て便船に打乘り江戸の方を差して漕出たるに折しも順風にて眞帆を上たれば船は三羽の征矢よりも早う走りて二日が程に芝浦の岸に難なう着にけり

清念坊は兼々住江に言含め置たる事なれば芝浦の彦坂小刑部が邸に同道して案内を乞ひたるに小刑部在宅にて直に出會ひたり。清念は懇ろなる仰せに任せ住江を伴ひつれば何とぞ御世話を願ひ奉る趣を述べ住江も只管に申して賴みければ小刑部は快く承諾せり。但し住江は常陸にては父にも母にも別れたれども吉井が家の知行にて不自由なく其日を送り親戚の者ども集りて世話したりしかど佐竹殿が常陸召上られ秋田に赴かれてより以來は吉井が知行は德川殿に沒收と成り已を得ずして一人殘つたる家來を連れ住江が母方の大叔母なるものが某の母にて秋田に越したれば是を便りて常陸を發ち遙々と尋ね參りしに其大叔母は秋田に着と其まゝ死去りて某は極ての薄情ものにて殊に扶持方も足らぬ中とて住江を辛く遇し逐歸したれば目的とては無けれど清念が安房の國なる

富山の御堂に住持しぬるを便りて參りける道中にて盜難に遇ひ賴みの綱と思ひたる家來の又七を殺され其身も危き所を小刑部に助けられ夫より清念が許へは來りしなり扨清念は原々安房の者にて若き頃は諸國を武者修行なし小田原に止まりて松岡新兵衛と名乘り北條殿に仕へて所々の戰場を稼ぎ終りには韮山に籠り足輕大將して關白殿御勢に敵對も致せしが小田原落城の後は世の果なきを覺りて武士を止め出家と成て故鄕の安房に歸り御堂守の世捨坊主に成澄し長の歲月を送り居たる所に計らずも住江が便り參りたり。住江が父源内左衛門の母は清念が母の姉この由緣を便りてなれば清念あへて之を謝絕るとにはあらねど老僧でも男は男、坊主は坊主、俗緣じやと申して若い娘を寺中に置ては世間の聞え且は當人の爲にも良からぬこと。是故に御懇のお詞に甘へて參上には及びたりと清念は住江に合槌うたせ虛と實を混合て事の次第を述にけり

第二十三回

彦坂小刑部は住江清念の兩人が物語を聞て思入たる體にて

『委細承知いたした既に先達て關宿に於て申た詞も御座れば愈々住江御殿が吉井源内左衛門殿息女に相違ないとならば小刑部身に引受て御世話な致さう。扨第一に承つて驚き入たは清念御坊は

北條家の松岡新兵衛殿で御座つたか。小刑部その頃は父刑部存生中にて其供いたいて小田原陣に罷在つたが殿の仰せ承つて韮山の寄手へ御見舞のお使に罷越したに其夜城中より打て出た逆寄の夜襲。敵も味方も目を驚かいた程の手ひどい働き其手の大將が天晴の武者振附入る勢を追拂ひ〳〵自分殿らひして人數を難なう引上げ城門の木戸はたと締させた擧動は武士の手本じやと譽め申した後に聞けば其武者こそ松岡新兵衛とて聞ゆる武功の勇士との事であつたが扨は御證で御座つたか……

小刑部その場に居合せし事なれば云々ありしと問ひも語りも初めたり清念は素より松岡新兵衛其人にてあれば思はずも膝を進て

『扨は貴所樣その砌り寄手の陣に御座つたか今は昔の語り草中すも夢の跡と成つたが……

と其夜の狀況。其が手の者等は斯々の手段にて寄手の小荷駄を奪さんと夜討かけたるに寄手にては流石の用心忘り無くて云々の防ぎ果は是々の戰に成ての引上と落も無く語り合ひて思はぬ興に入ければ小刑部は深く感じ入りて

『是程の御人いかに年寄られたとて安房の片隅に生涯を送らるゝは可惜しい事。幸ひ其節寄手に向ふた老功の衆も當地にはまだ大勢ござれば其し御坊を其衆にお引合せ肝煎申さう御遲俗は無い迄

も責て江戸にて一ケ寺の御住職となつて安穏に送らせ進ぜ度う存じ申すが……

『イヤ〳〵それ清念望みでおじやらぬ結句田舎の山奥が安氣で好い。慾ひ松岡新兵衛入道の身の果よと嘗に出ては武士の恥辱。それよりは住江が身の上しかと御承諾の下されうかな

『御念には及ばぬが一應は承らいで成らぬ……

是より小刑部は住江に向ひて吉井家當時の事ども問糺すに是以て更に相違なく現に小刑部が滯留して居たりし頃の狀況など思ひ出して互に語り出すにぞ小刑部も得心して

『全く吉井殿御息女に相違ない。此上は小刑部及ばずながら一身に引受て御世話いたす。諸事心置なう我等を兄とも父とも思ふて便られい我等また娘とも妹とも存じて談合いたさう……

小刑部は妻子にも住江を引合せ事の由を告け扨清念が直に暇申すと云へるを強て引留め責ては數日の滯留あれとの事なれば清念も疑はれては事悪しと其意に任せたり

武功を貴ぶは德川武士の習とて小刑部より清念が事を告知られたれば大久保黨を初め蜂谷、夏目、柴田。阿部の面々かの小田原陣に御供して働いたる老功の勇士たち尋ね來りて清念に而會し酒汲交せて聲高の軍咄しに小刑部が家は時ならぬ連日の客來振舞家内の人々の迷惑は察し遣らるれど小刑部は更に頓着せず斯る珍客を宿するは主人の面目と悦び應したり。中にも大久保彦左衛門、阿部

四郎五郎、蜂谷助左衛門など云へる面々は

『コレ小刑部その娘の實父吉井某の事は我等ども存知して居らぬが現在松岡新兵衛入道殿が身寄のものじやと云ふて其方に頼まれた上からは其方十分に引受て世話の致いて遣はされい。口利て濟む事なら此方ども何へ參つても肝煎らう。又合力の事は氣遣すな我等ども清念御坊に成代つて大名衆を托鉢して當人に不自由なさせまい。能う當人の望み聞て及ばう程の世話いたせ。左も無いと德川武士の名折に成り申すぞ

と頻に諫め勵ましたれば小刑部も家内の者も。云ふにや及ぶ成ん樣を御覽あれと頻に住江が落着に心を入れたりけり

第二十四回

斯て清念は思はずも德川家老功の人々に持囃され六七日も江戸に滯留なしてけるが急ぎて歸るべき用事とては無けれども長居は却て破綻の出る種と彼人々が樣々に言ひて引留め最も信切に申すをば强て斷り寺川の止がたければとて江戸を去りて安房へ歸りたり

彦坂小刑部は吉井が娘にて昔の由緣のあるをもて住江が世話を快う承知して引受たるに松岡新兵衛

大道清念が親戚の者と知れてより徳川家の旗本にて名を知られたる方々が頻に肩を入れて種々に口利かるゝ程に初は寄食人と思ひたるが今は客分に扱はねば濟ぬやうに成て愈々劬り持成すに住江は信々しく小刑部が家事を手傳ひ常に謙遜りて召仕のものと比しく其身を振舞ひければ彦坂の妻子は益々親しみて存掛なき好人を得たる事よ叶ふべくば何時までも我家に止め置たきにと各々悅び合へりけり。或日小刑部は妻と俱に住江を居間に招きて

『扨住江どの我等かたに滯留召されてよりはや十四五日是なる妻女どもは最うお懇親に相成て是非に何時までも當家へお止り召さる樣に申し呉いと我等への賴み我等も亦左やう致し度と願ひ申すが。先づ承知いたさいで叶はぬは御身の御分別、凡そ女たるものは年頃に成れば夫を持つが常の事、御身も今年十六歳と仰せらるれば最早嫁入成さる年頃、夫等の御世話するには御身には已に御兩身御存生の砌りに許婚に成た殿御の御座るか　又は御自分で言交された心の中の方があるか、夫第一に承り度』

『御信切の程、誠に有がたう存じまする、私にはまだ約定の男などは御座りませぬ』

『左樣か、然らば追々には我等御身の爲に然るべき夫を求め媒妁いたして嫁入のおさせ申し度が御不承知は御座り申さぬか

住江に取ては此上も無き難題、心中はッと驚きたれど他事無き儀に持成して

『暮々も忝ない、お詞恐な私を左程に思召し下されまするは私し身に取つて此上も無い冥加、しかし心の願も御座りますれば御大家の大奥へ四五年も御奉公いたし萬の御式作法を覺え一廂の女に成りまして夫から妻定を致し度と存じます、當年やう〳〵十六歳ゆゑ御奉公を致した後でも遲くは無いと考へますれば、御厄介のお序でにどうぞ此望み御聞濟を願ひます奥方にも御詞添へ下されたうお願ひ申上まする

『ム、成程、御大家へ武家奉公それも尤のを望みだが、吉井某の息女、新兵衛入道の御由緣、尋常の大名へも奉公は相成まい……宜しう御座る、御身の事な老功の衆が口利れて御座れば我等一分で迂闊の計ひ致いては後日の批評、兎も角も彼衆へ相談の上でお答しやう

此事小刑部より蜂谷大久保近藤阿部の老職に謀りたるに、案の如く區々の評議國持大名であらうが酒井井伊の御家老衆であらうが左樣の方へ奉公させては松岡新兵衛人道清念坊へ對して下量るゝが無念、何と致いて宜しからう……『ム、幸ひ〳〵阿部の叔母御が阿萬の方お側にじやて、アノ叔母御に譯いふて我等一同から賴み入れう……』と相談一決して其計ひに及びたり。此叔母御と云へるは阿部新十郎が母にて其頃大奥にて比なき權威の老女なれば老職の依賴を快く諾ひて江戸御本丸の

大奥に呼入れ阿部の局が部屋子と成し局の室に置きて座右の用事ども致させて其傍には奥女中の勤向を見習はせたるに諸人に勝れたる發明才智いつか阿萬の方の目に止まりお小姓の手傳に擧げられければ住江は猶更心して勵み勤むる程に頗る御機嫌に叶ひて其後一年を經ぬ中に御小姓本役に仰付られ常にお側に仕へ申す事とは成れりけり

第二十五回

父上は討たれ母上は自害し玉ひ妻と定まる女も知らぬ旅路の流浪その原を尋ぬれば皆德川殿が佐竹殿へ對せられての辛き御計ひに起れること、剛てや父上最期の際の御遺言いかで一太刀恨み參らせでやはあるべきと武士の彌猛心に張つめたる梓弓志を遂ずては歸らじものをと安房の富山を立てより善七郎は船便もとめて先づ相模の三浦へ渡り夫より陸路を經て江戸へ着し德川殿御居城の狀況を見るに、關八州に武威を振ひ關ヶ原の捷戰このかたは日本國中の諸大名みな恐を爲して御下令に從ひ追々に參勤して邸宅を構へ宛然關白將軍の勢ひ儀式だちて諸大名へ御成の節は申すに及ばず假初の狩倉にとて千住品川葛飾の境などへ出らるゝにも數多の供連一人當千の勇士ども御馬の左右を固めて用意の儼いと嚴しければ中々に近寄るべくもあらず。扨も美じき威勢かな武勇智略世に秀

で藏人伯と呼ばれ玉ひし御若年の頃よりして海道一の若大將と甲斐の信女殿も心に憚られたる御方その後は左しも豪傑の諸大名を物の數とも思召ざりける太閤殿下すら家康公〳〵と仰せられて尊ばせたる程なりければ縱か西三河半國の小名より出て今は關八ヶ國を知行し其外甲斐信濃駿河遠江三河は云に及ばず凡そ日本六十餘州を思ひの儘に掌握せらるゝ御威勢。夫には引替へ我が故主の佐竹殿、内々大坂方へ心を通はし二半の御擧動あらせ玉ひしとは云へ畢竟これも故太閤へ報ぜられたる武門の御義理、それを何ぞや叛反の族に徒黨したりと惡名つけ、昌義公以來累代連綿として御所領なつたる常陸國を取上げ水戸御城を召上られて出羽の果なる秋田へ半高より少き御身代にしての御國替、剩へ其秋田すら永久の御領いかゞ有べきとの噂餘と云へば武士道に外れたる德川殿の成れ方、諸國の人民百姓ばらは皆擧りて賢主仁君とも申さば申せ、此善七郎猛虎が目には殘忍無道とこそ見え映るなれ、所詮この儘にて榮華を得させ參らせんは亡父の心に非ず、此身を刃の露と化すは素よりの覺悟なり、佐竹殿御家安全のため父上の妄執を霽さんため目に物見せて奉らん、去ながら此儼にては事計るべき際は無し、愁ひに仕損じては父子一家が心盡しも水の泡まづ〳〵心急くを耐へ機を待つこそ肝要なれと急度思ひ直して江戸を發ち上野の國に越え榛名山の麓なる聞ゆる北見藤左衛門が許を音便たり北見藤左衛門と申すは當所の舊家、足利基氏公方より軍功の賞として千五百

貴の所領を賜ひ永代知行の御教書を下し置れ其後上杉殿にも法の如く安堵せしめられ徳川殿にも其通りに掟せられたる十數代の舊家なれば今の藤左衛門が代に至りても此地方の者共は北見殿〳〵と申して領主の如くに敬ひ貴び家來のやうに成りて仕へぬ、善七郎はつッと門を入りて玄關に彳み某は坂東の浪人にて候ふが北見殿御見參に入らうとて罷出て候ふ姓名の儀は御逢ひ下されなば御見知り者なりと申入れたり。暫くありて藤左衛門は自ら出でゝ玄關と客の間との間合なる襖を細目に明て透見なし、其人と見知りて走り出で

『ヤア客人わせられたな、サア此方へお通り下されと家の子に言付け善七郎に足滌せなどして自ら案内して奥の座敷に請じて

『コレ善七郎殿、御逡の大膽無分別には驚き申した……。扨も佐竹殿御國替に引續いて御親父丹波殿の旗上、御最期とけられたる事逸早くに當地へ聞え御覺悟の上は是非ない儀と打嘆き御遺族がたの御落居如何あらんと心を痛め居たる所、五六日前に家來のもの江戸から歸つて車殿の若殿が御城外を徘徊して御座つたをお見受申した、イヤ〳〵人違では御座り無い御供して一昨年水戸へ參つた折に慥に御見覺え申したれば其御人に相違の御座らぬとの申立て、打驚いて直に其者昨日の朝お迎ひとして當所も無いが江戸へと立たせ申した次第……何故あつて江戸へは御行召された

危き事のウ
と聲うち潜めて語りたり

第二十六回

善七郎は左り氣なき體にて

『扨は左樣にて御座つたか御心配を相掛け千萬恐入り申した……實は父丹波打死の後、秋田に蟄陶いたし居ても詮ないに依て諸國修行に遍歷いたそうと思ひ立て飄然と出羽を出て江戸見物を致した迄の事何も無遠慮も無用心も御座り申さぬ理で……

『ム、、シテ御逡は途すがら人に咎められた時に何とお名乘り召されたな

『當陸浪人吉井源七郎と名乘り申した

『ナゼ車善七郎猛虎と實名を名乘り召れぬ

『實名名乘るも、さすがと存じて假名の致いた

『さうで御座らう、コレ善七郎この北見藤左衛門にお隠しなさるは某を頼み無者と思されてか、去とは恨で御座るぞ、御逡には御親父丹波殿と一ッに成つて旗を上げ戰場を切拔け剩へ丹波殿御首

級を奪取て土中に葬り大膽にも御自分の姓名を記し此世に生存へて在ことを諸人に示し跡を晦された不敵の所業、かく自分から名乗る上は捨置べきに非ずとて徳川殿より嚴しい御沙汰、人相書を以て車善七郎草を分つて詮議いたし召捕へいとの御下知、この邊までも軒別のお觸で囑托の銀子も常體よりも數倍の高、浮々と大手振て歩行く事な出來申すまいに……

善七郎は事の由を聞て扨はと思ひ當りて

『左樣御存知の上は何を隱さう此身の遭際一通り御物語り申さうか世を忍ぶ身で御座れば包み隱せし段な御免下されい

是迄の顚末を逐一に物語りぬ、但し將來の深き心底の程は容易に打明ざりけり。藤左衛門は委細を聽て

『いか樣さやうの事で御座つたか、危い戰場をば渡手一ッも負はずに引揚られたは御邊の御武勇御高運の致す所と藤左衛門祝着いたすじや。但し丹波殿御首級を取て葬つたは孝子の心實もさう無ては成らぬ理じやが其御墓銘に御邊姓名を歷々と書認められたは剛勇の所爲に似て實は若氣の速りと拙者は存じ申すに依て此以後はチト御謹み有て宜ちう……扨また御邊は是から御進退どう成る御所存で御座るな

『御老體の御意見善七あり難う存じます

以後は急度相慎むと致します、扨これから先の進退と申して別に所存な御座りませぬが先づ諸國遍歷の致いて兵法の修行を心掛たう存じまする

『夫も宜らう、御邊の御詞に山て察するに餘程深い大望の懷かれて御座ると見えるが。……いや善も惡も武士は銘々の覺悟夫々の立場、斯と思ひ箍だ所を貫くが眞の心得……或學者が傑の犬は堯に吠ると云ふ古い喩を講釋されたが夫が即ち武士の性根……御邊は御邊の心任せ、此藤左衛門止めも致さねば勸めも致さぬ、尤も藤左衛門分別どうじやと改めてお尋なさるとあらば愚かな考も御座るが……否々そりや申すまい譬ば改心の致いて徳川殿に御奉公召されと云ふやうな事を申した所が御邊がそれに隨はれう氣も唯今の所では無からうし、マア止に致さう……兎も角も當所と て油斷の成らぬ折柄じやが眞さか此藤左衛門宅を取卷て家搜しも致すまい、……唯今に隱家の工夫いたいて參らす程にまづ〳〵落付て酒など飲で勇氣を引立て御座るが宜い

酒肴を出して心ばかりの饗應に及び四方山の物語に時を移しはや日も暮なんとする頃に門外にて常ならぬ人聲、藤左衛門も善七郎も耳欹てゝ居たる所に、若黨は面色を變て周章しく走り來りて

『變事が起り申して御座ります

第二十七回

藤左衛門は膝立直して、何事の起りつるぞと問へば。若黨は進み寄りて

『此程より詮議の御下令に成た車善七郎事この上州の境を徘徊いたし、昨夜高崎の宿外の百姓家に一泊したること訴人の申立にて相知たれば探偵のもの出口〳〵に網を張り一夜を明し居たるに彼の善七には今曉早く高崎を發ち朝霧深き其中に濕川通りの間道より此榛名に入つたるに相違無しと注進、右に付き村中の騒動、探し出して御賞美に與からうと百姓等我先にと代官所へ申出で唯今軒別の家搜し代官殿には組子を引つれ御詮議最中、今にも當御邸へも參られまするであらうと存じまする

息急き慌てゝの報知、藤左衛門は故と落付拂つて

『さうか、當節噂に高い車善七郎の詮議か……役人衆これへ參られたらば直に是へ御案内いたせ……ナント吉井殿、御邊も其善七の召捕へ囑托の恩賞を蒙られてはどうで御座るな東海道筋御修行の川途に好補充にも成るで有らうハヽヽア

打笑ひ若黨へは役人の出迎ひ吩咐て立去らせたり。善七郎は膝立直して

『此處に罷り在り貴殿へ御迷惑相掛ては恐入る。間道のお示し下さらば直に立退き叶はざる其時は捕手を引受け潔ぎ宜う』言はせも果ず藤左衛門首横にうち振て

『イヤ〳〵、そりや可ぬ、間道とても見張の人數切所〳〵に固めて居れば容易は落延び難き、……拙者が一ッの計ひは個樣で御座るが御邊甘う仕遂らるゝか

耳に口よせ呟けば善七郎は諾きて

『御秘計いかにも感心いたした左樣ならば仰せに從ひ申して……

打連て納戸に入りたるが程なく着替なし衣服袴も清淨に成り、手早く鬚の延たるを剃り髪を梳けづりて元の座敷に戻り藤左衛門と主客差向ひ棋盤を中に置きて黑白の勝負を闘はせ急ぎ酒肴を取寄せ杯を酌交せながら棋石を交に丁々と打ち濟して役人來れと待居たり

程もあらせず多人數の足音して座敷の襖がらりと明て入來れるは當所の代官小幡某後には隷屬の武士兩人を從へたり、藤左衛門が善七郎と棋を圍めるを見て

『ヤア北見殿これに御座るか

『是は小幡殿ようこそ御來臨、先々是へお通り下されませう

席を下りて上座に招じ、家來の若黨に向て

『御代官様の御入じやに、汝なぜ我等に早う知せお出迎ひは致させぬぞ、武家に奉公いたしながら作法を知らぬ愚かものめが……

聲荒げて叱り掛れば、小幡は中裁して

『アイヤ藤左どの、左様にお叱り召されなあの若黨衆御案内せうと申したを我等それに及ばぬ直に通ると達て止め無案内に推參いたいた、其儀少々仔細のあれば若黨衆の手落では御座りない

『ハヽア左様で御座り申したか、さうとは知らずお出迎へも致さず御珍客の前で尾籠の荒言、重々の失禮御免の下さりませ……

丁寧に謝詞なし隷屬へも挨拶なし代官が善七郎を見て居たるを見て

『小幡殿これに居られまするは吉井源内四郎と申して常陸鹿島神道流の兵法者で拙者同門鹿島の社家衆吉井兵庫頭の次男、請國修行の道すがら昨夜拙宅へ家られた御仁御見知り置き下さるやう御願ひ申上ます、ナニ源内殿これに入つしやるは當代の御代官小幡殿、文武兩道に掛ては聞ゆる御方、好機會じや御見知置をお願ひ召されへ

引合すれば善七郎は恭しく兩手を聲に突き低頭して

『私事は唯今藤左衛門申さるゝ通り吉井源内四郎と申す未熟もの以來は御引立を願ひ上まする

式代すれば代官は傲然として

『我等小幡じや當所滯留とあらばチト邸へも參らつしやい

慇懃に會釋しナニ此若輩者がと心に思ひ侮る狀は自づと面に顯れたり

第二十八回

代官の小幡は藤左衛門に對ひて

『イヤ〳〵折角のお饗應ではおじやるが丸獻どころではおり無い、公儀より御詮議嚴しい車善七郎今朝當所棒名へ入込だと慥の注進、依て軒別の家搜し致すため我等自身で出張の致いたゝ、其分御邊にも心得さつしやる樣に

容を更めて言渡せば

『ハヽア噂に高い車善七郎愈々當所へ參つたと申しまするか、兼ての御下知は藤左衛門も心得居りますれば油斷は聊か御座りませぬ

『なんと仰せらるゝ車善七郎が嚴しい御詮議者で御座りまするとな

『何にも、彼奴このほど父丹波守と一所に成て恐多くも徳川殿へ對し奉り一揆謀反を起いた曲者…

…シテ源内どの、御邊その善七郎の承知で御座るか

『我等よう承知でおじやる、彼奴め香取眞流の使手じやと申して昨年の春我等故郷の鹿島へ乘込み仕合の所望いたいたが、ナンノ口ほどでも無い生兵法、高の知た腕前で御座り申すワ

『シテ御邊その善七郎と試合て勝の取り召されたか

『ィヤ別に試合と申して改めては致さぬなれど彼奴には我等少々遺恨の次第も御座り申すに依て小幡殿へ申上まするが甚だ卒爾の樣には聞え申すが私事は其の車善七郎面體腕前よう存知て御座れば討手の御人數へ案内かた〴〵御加へ下さるよう相願ひまする御聞濟の下されうなら本意の至りに御座りまする

思ひ箙て申上れば小幡は打諾いて

『神妙の願ひ聞屆やうものでも無いが、卿は一人で其善七郎討取ことが成り申すかな

『サア勝負は時の運で御座れば生兵法の善七郎理は無いとは思ひますれど一人では何と御座りませうか……そりや仕留る覺悟ではおじやりますが萬一取逃いては上への恐れ……御人數と一所ならば慥に御請合の致いて御忠節を盡しまする

口では立派に申せども心に臆する二半の詞小幡は左こそと下墨笑ひして

『ム、兎も角も承り置く、其場合に相成たら申付る事もあらう……何に藤左どの御邊は御由緒ある地侍で公儀に於ても別段のお取扱ひ、御代官の我等敢て貴殿を疑ふと云ふでは無いが軒別改めの役儀に當家家捜の致す、左樣心得さつしやい

言渡せば、藤左衛門は膝立直して

『先以て車善七郎と申すもの此北見藤左衛門匿ひ置くこと更に其覺おざらぬ、此段な弓矢八幡御照覽あれ、刀に掛て申上る。次に家捜の事は一旦藤左衛門かく申上る上は百姓町人同樣に御疑念なさるにも及ぶまい。尤も善七郎匿ひ居らねば毛頭差支は御座らぬが、妻なるもの十日前に安產なし未だ產所に引籠り取亂したる狀況、御覽に入るゝも心苦しい、旁々以て藤左衛門誓詞御信用あつて家捜しの一條は武士の面目御容赦下さるやうお願ひ申し上まする

『ム、其斷り一應な尤であるが我等役目の表を以て、御邊の一家ばかり容赦と申すは計ひ難い、一と通りは當家隅々まで詮議の致さねば相成らぬ

『では藤左衛門誓詞いたいてもな

『誓詞でも金打でも容赦は決して出來申ぬ

『ム、左樣仰せらるゝ上は是非に及ばぬ。但し家捜しの致されて車善七郎居り申さぬ其時は

『居り申さねば御邊の潔白相知て其迄の事じや

『コリヤ御代官殿のお詞とも存ぜぬ、荒家なれども武士の城廓とは昔より申す詞で家搜し受るは此上も無い武士の恥辱、拙者が潔白相立つ時は御氣の毒でも貴所樣を相手に取り其恥辱をば藤左衛門雪ぎ申さいでは武士の一分相立ち申さぬ、斯樣の場合は貴所樣も御不祥我等も不祥、其分きつと御覺悟下されい

第二十九回

凜然たる藤左衛門が詞に、代官の小幡は怖を爲して、彼は聞ゆる剛のもの潔白の上は何なる事を我等に仕掛け難儀させやうも知れず又仕兼まじき人體、さりとて隷屬その外の手前この儘にて尻籠しては武士の面皮ハテ困つた仕宜とは成り申した、斯と存知したらば始より家搜の容赦を聞屆たら宜つたらうにと心の後悔。

『左樣頑固に申されては自分とて當惑いたすが……

口籠りて、あな氣博の利かぬ隷屬共かな何とか取繕ふて此場を濁せよかしと横目に隷屬を見て謎掛れども、隷屬とて夫知ぬでは無けれど悉ひ口出ては災難の側杖うけては我身の大事かやうの時には口は禍ひの門唯々用心に若は莫しと兩人が互に顏を見合て面を横に背け沈默の德を守り居たるは去とは長官へ對して不實の至り俗に所謂下役根性こそ是非も無けれ代官の小幡は益々困じて返答に支ふるを見て取り藤左衛門は

『小幡殿、是非の御返答如何で御座り申すと膝すり寄せて迫り掛り。今は主客地を易て小幡殿が必至の難儀、時こそ好けれと善七郎は少し進みて

『若輩者の差出口、嗚呼がましいと思召すかは存ぜぬが、北見どの唯今の口上、チト筋合が違はうかと此源内四郎は憚ながら存じ申す……イヤサ北見殿、心を鎭めてお聞なされい、武士の家搜し一身の恥辱と申すは武士相互ひの事、但し唯今御代官殿御邊に向ひ一應の家搜を致すと仰せあつたはコリヤ恐多くも公儀よりの御沙汰で私の事ではおり無い、夫を兎や角と御申しなさるは取も直さず德川殿へ敵對も同前、まこと貴殿が車善七郎匿ふて居られぬとなら御内室の産所であらうが土藏の椽の下であらうが所嫌はずナゼ御詮議のお受け召されぬ、夫で潔白いよいよ知れるが武士の面目、武道の正理は左樣で御座る

辭氣激しく說出せば。藤左衛門は左も悔つたる顏色してジロリと善七郎を下目にして

『ハテ耳障りの講釋めさるな、鹿島の御社で鈴振て祝詞いふ神主たちならいざ知らず、誠の武士が

家捜されておめ〳〵と仕て居る法が何所にあらうぞ、武士道知らいで口出めさるな、源内どの
と一言に跳付れば、善七郎も刀引寄せ片膝突て
『コリヤ異な口上の申さるゝ、藤左どの、神主とて禰宜とて大小挿た武士に二つの道が御座らうか
正直にて隠さぬが神道の極意にて即ち武士の心得、況て是より公儀の御沙汰御代官の御下知、そ
れを彼是申さるゝは貴殿の心中曇があつての事でおじやるか
『何と申す、此藤左衛門心中曇りが有ての事とは謀逆大罪人の車善七を匿ふてばし居るとの事か
『オヽ何にも此源内貴殿の詞の端々に其疑ひを致して居る
『トハ又何の證據のあつてか
『サア昨日當家へ音信参り、御内室な産所とあつて面會なく、其上御子息御息女たち未だ一人のお
出會ないは是ぞ何かの仔細のあつて此源内にお隠し事が御座る證據
『おのれ源内、小人の腸もつて君子を量る嗚呼のしれもの……よし、さらば、小幡殿は兎も角置て
汝に家捜させう、其代に車善七郎いよ〳〵匿ひ居らぬこと潔白に成る上は尋常に汝が獄首申受る
ぞ其場に至り逃隠れの致すなよ
『ムヽ承知いたした、我等も武士の言掛り其方が悪口雑言聞捨には致し置かぬ……車善七郎見當り

次第御代官殿衆に力を併せ見事召捕て御恩賞に與かり其方が一命を其序に取て得さすワ
『其虞言忘れるな……サア小幡殿、北見藤左衛門が家隅から隅まで家捜し召され、何れなりとも勝
手次第……

第三十回

思ひ掛なき吉井源内四郎（善七の假名）が横合からの援兵に北見藤左衛門が腹立まぎれの家捜し承
知。これに勢を得て代官の小幡は俄に景氣立て
『吉井が申さるゝ所は理の當然、藤左殿も承知との上は、それ家捜し、隈々隈々まで改めさせい、
源内四郎、善七搦捕の支度は好な
『好しうおじやり申す、御役人衆御加勢下されませい
と隷屬の兩人と一所に成り刀横たへ襷を懸け、おのれ善七郎唯だ今にも此家より顯れ出なば見事引
組で生捕せう手に餘らば斬て捨やう手筈は斯々是々と言合せ御恩賞は此時じやと手ぐすね引て待搆
へたるぞ可笑き、詮議の目的たる車善七郎が眼前に居るとは代官ちつとも心附かず、サア者ども遠
慮に及ばぬ家捜して車善七狩出せ、此家に隠れ居る事は慥に勘が附てある、間抜な事して袋の鼠取

逃いては相成らぬぞと烈しき下知、心得たりと拂手の雜兵足輕ばら小者百姓加勢の人數合せて凡百四五十人一度にどつと聲を揚げ座敷奥間の納戸の搏或は物置き勝手元土藏米庫薪炭部屋女關使者の間侍部屋下女襲女の臥戸を初め天井裏から床板の下稻荷の社に至るまで隅々限々殘る所なく搜し立て狩り立たれど出るものは鼠ばかり落るものは煤ばかり其危ない梁の上から車が落ると騷げるは車と云ふでう糸引車の破車、たけ虎ならで竹の屑、虎の形の無宿猫は人を怖れて飛出せど善七郎に似たるものさへ見えざりけり

藤左衛門は左もあらんと云はぬ計りの顏して

『如何に小幡殿、御不審は霧れ申したか

『成程當家へは見えぬ樣だが……ハテ斯いふ理では無い筈じやが……

當惑の體を見て

『無いか有るかは存ぜぬが、北見藤左衛門素より匿ふた覺が無ければ車善七郎當家に居やう筈が御座らぬ……斯なれば吉井源内四郎、是へ出て尋常に我等と立合へ今さら兎角の分疏この藤左衛門承知はせぬぞ

刀を左に引そばめて勢ひ掛れば善七郎は雙手を揚て

『北見殿マアお待やれ、車善七の大罪人いよ〳〵お匿ひ召されぬと極つたら貴殿の面晴この上も無い御潔白、併し德川殿御公儀へ御忠節を存じて御代官殿のお肩を持ち囑托の御恩賞に與からいで貴殿と立合ひ孰が負ても互ひの損こりや此儘

『イヽヤ成らぬ、其方先程何と申した、武士に二言は決して無い、サア用意せい、支度せい、猶豫未練を申すに於ては唯一刀に打放すぞ

勢こんで見えければ

『未練は申さぬ、猶豫は願はぬ、如何にも立合ひ申す、ナンノ貴殿ごとき老體、相手にするは安い事だが御怪我なさるがお氣の毒ゆゑ……併し北見殿家搜しだけでは御詮議相濟んで貴殿面晴とは申されまい……小幡殿御覽の通り當家裏續の森から彼なる杉林に掛ては北見藤左衛門持山と承はります然れば森中の茂に潛み車善七郎身を隱し居らうも知れぬアレ御詮議なされては如何で御座りまするな

小幡はパタと膝を打て

『ムヽ、源内四郎、好所に氣が附た、武士の分別天晴〳〵……尤も先程申聞たる如く當村の出口〳〵本道は勿論間道作路樵路みな人數の配つてあれば蟻の這出る所も無いが何さま森中に潛み居る掛

念もある然らば右の口々の人數を次第〳〵に卷寄させ藤左衞門が森林を取卷て狩立ると致さう……ソレ合圖の貝を吹立て卷寄させい

下令に隨ひ足輕が吹立る竹螺に代官が寄手遠卷の人數は實も八方より聲を立て螺を合せて此方へ向て卷よせたり

第卅一回

善七郎は此狀況を見て扨も行渡りたる用意かな愁ひ間道より逃も出したらんには彼人數に取卷れたるらん危き事でありつるよなと心中にては驚愕を爲したれども更に面に顯さず、小幡に對ひて

『殿は何と御覽じますか、拙者物見いたいますには御差圖の卷寄で車善七郎あの中に圍まれ居さうに御座りますが

『ム、自分もさうらしう存じ居るが、併し若も居らぬ其時は、其方いかゞ致す所存であるな、彼藤左殿見事立合ひ申す覺悟か

其邊に藤左衞門が居らぬを幸ひ低聲にて尋ぬれば善七郎も聲を潛めて

『サア其儀に御座ります、彼の老耄の藤左衞門な私し立合まして勝を取るのは譯なからうとは存じまするが併し彼奴を殺しては後日の祟り第一には御身樣の御爲にも宜しう無らうとも考へますれば間合を見て此場を逃出し一先御身樣御屋敷へ忍び夫より陰かに當所を立退ませう是が一番穩かな計ひで御座りますに由て御聞濟の願ひ上まする

餘儀なき賴み、否と言はゞ北見藤左衞門我を相手に難題を申掛るに相違なし誠に痛し痒しの場合に代官の小幡も詮術なく、然らばさうと承知したりけり

卷寄たる果が兎の三四疋は追込だれど車善七郎は扨置き人間らしきものゝ影だにも無し。北見藤左衞門は力身返りて代官の前に突立ち

『サア小幡どの、如何でおじやる。手前邸を始め隅々隈々まで家搜し召され其上に所持の山林殘る所なうお調べ成されましたが、御詮議ものゝ車善七郎居らぬでは御座らぬか……是で御疑念な晴れ申したで御座らうな……然る上は拙者が相手の吉井源内四郎これへお出し下され御身樣この序に勝負の御檢使なし下されい

ナニ源内は居り申さぬとな、コリヤ御身樣あの曲者をお隱し成されたに違ひ無い

『コレ待たれい藤左殿、御代官へ對してはチト詞が過ぎ申す。第一御邊の住居並びに山林の搜し申す事は公儀の御下知この小幡が私の計ひではおり無い、公儀のお調の受たとて御邊に取て敢て

武士の恥辱ではあるまい、併し夫を強て恥辱と申すなら徳川殿へ御訴訟の致されい、自分を相手とは目的が違ひ申さう。次に吉井源内四郎とやらは御邊かたの客じや自分に於ては素より初から見知の者でおざらぬ尤も車善七郎詮議の事で自分へ申立た事はあつたなれど其源内四郎が進退を自分差圖は曾て致さぬ、夫ゆゑ何地へ参つたか立去たか自分は更に存じ申さぬ、御邊勝手に捜いて討なと斬なとそりや存意次第じや

『成ほど左樣仰せらるれば源内の一條は夫迄の事、但し御身樣には是よりして猶も車善七郎御詮議なされませうが、手前は又吉井源内四郎行衛を尋ね申さねば成りませぬ、同じうは御代官衆御人數御繰出しの道筋を伺ひ其外は手前の手人數を以て相固め御申合の願ひ度御座りまする

『心得申した然らば其都合は是なる隷屬等と宜う打合し召されい

云々言付て代官は長居は恐れと己が屋敷へ引返したり。居敷には車善七郎待受て樣子は如何と尋ぬれば小幡は斯々なりしと物語りて

『扨其方此所に長居しては藤左に狙はれ身上が危い、幸ひ本街道は我等が手で固めてある藤左に知られぬ中に早う立退け……信州路へ参るとな……宜しく腹心の者つけて送らする……姿を變て早う立て

行掛の是非なくも善七郎に衣服を與へ聊の路費を贈り藤左衛門が目に掛らぬ樣にと心を配り榛名の村境まで送り出したるぞ可笑かりける

第卅二回

『此まで落延れば最早安心、かの北見藤左衛門、いかに執念深いと申して追蒐て参る氣遣ひは御座るまい、況て御代官衆お固の場所を斯樣に通り越たとは藤左衛門心附く事は御座らぬ、此度の一條に付き小幡殿御芳志の段々源内四郎身に取て心肝に徹し添う存じ奉る、信州訪へ到着いたさば變名を以て御禮の書狀差上るで御座らうが各樣より殿の御前宜しく御執成を願ひまする』と車善七郎は代官より附たる送りの家來に厚く禮を演て別を告げ悠々と榛名の境を去り山一ッ越て後は道傍の石に腰うち掛け四方を見廻して

『先は首尾よう虎口を逃れたが、是から先は何の方へ参ると致さうか

獨語して前途を考へつゝ憩ひ居たりけるが今來し路に當りて馬の蹄音、追手や來つる油斷は成らず と松の小陰に身を寄せて樣子如何と窺ふに、峠を下りて駿馬に鞭ち此方に向ひて駈來るは北見藤左衛門、それと見るより善七郎は冠れる編笠取て高く差上げ打招けば彼方も夫と見知てか馬上ながら

扇を翳して合圖したり、頓て馳附て藤左衛門は馬より下りて

『善七どの當座の計略甘く參つて上首尾で御座つたのゥ

『是と申すも全くは御身様の御工夫、反間苦肉の謀計と兵書の講釋では兼々聽聞の致したが出會たは今日が初めて、實に御計略の程驚入り拙者が危難を遁れたは全く其御蔭に御座りまする

『ナンノ左様お褒に與かる程の儀でも無いが、畢竟は御澄の氣轉が能て我等に向ひ議論のひだう仕掛られて代官をば甘う取込れた故の事じや、併し山狩の後で御澄が居られ無く成たには我等も實は驚いたがあれから、何地に參られたな

『サァ其までは御打合が無かつたなれど、どうで彼小幡をば欺かる上は飽までも心を許させ様と存じて……

小幡が屋敷へ逃入りての次第を物語つたれば、藤左衛門は横手を打て

『そりや上出來御澄の頓智計略の速さ驚き入て此藤左衛門實に感心いたいた、當時德川殿御懐刀の佐渡どの父子（本多佐渡守同く上野介父子）じやと申して夫程の早速は工夫なるまい、是から軍學の御修行召されたら恐く甲州の山本勘介、太閤の竹中半兵衛に續かう仁な御澄で御座らうてな

『甚い御賞詞に與かつて赤面の仕ります是と申すも全く御身様の御恩……夫に附ても代官めが

甘々と計略に乗つたのは我身ながら可笑しうて猿樂の狂言する様な心地が致して御座りましたハ、、、ア

『ハ、、、ア我等も彼折は太郎冠者の勤め申したが、小幡の大名は狂言その儘で御座つたのウハ、、、ア……併し笑ふて居る段では無い、善七どの御澄は是より何所を差て參らる、御所存で御座るな、苦しからずば御落付ならびに向後の御心底の承はり度

『御面會の間も無う右の騒で申入なかつたが、是より關八州駿遠參あたりを修行いたさうと存じての旅さまよひ、次に向後の心底とて別に存ずる仔細も御座りませぬが……

『アイヤ夫承はるに及ばぬ。武士たる者が思ひ込だる所存容易うは口外せぬもの併し善七どの丹波守殿御最期を無念に思ふて德川殿を恨みなさるは失敬ながら心得違ひ……イ、ヤ御澄が家康公に對し奉つて異心の抱れてとは申さぬが、左様の事が弓矢の上では間々ある例じやに由て若や御澄もさうでは有まいかと存じて老人の先案じじや、家康公は日本の聖人この御方が今御座らいでは日本は再び亂世天下の爲に大切な大將それを狙うなど致いては日本への不忠……唯今こそ御澄の御詮議も嚴しいが少し程立ば自づと寛かに成り申さう、德川殿へ御澄のお謝は拙者きつと引請る其代に德川殿を恨んで不所存の思ひ立れたなら此藤左衛門眞先に討手に向ひ御澄の一命きつと

申請る、其段な兼て皆て申入置き申すぞ……
心の程を申述べ意見を加へて別れたりけり

第卅三回

話頭又轉りて、此に住江は德川殿御旗下中にて老輩と聞えたる蜂屋大久保阿部近藤なんど云へる人々の取持にて初めは老女の部屋子に成りて江戸御城の大奥に出たりけるが計らずも阿萬の方の御見出しに與りて御意に叶ひ追々の立身ついに御小姓にまで取立られて御側去らずの宮仕。或日の事なりしが阿萬の方はお附の女中たちを局の小庭に集め自ら差圖して長刀小太刀または懐劍の心得など習はせ中老の某と云へるを師匠にして今日は晴の試合をさせ玉ふ、住江は初めより武藝の嗜は深く包み隱して『私は頓と武藝の心得は御座りませぬ、不調法でおざりますと』斷りて曾て其仲間に入らざりけるは、能あるものを妬むは後宮の常、況て是は新參ものゝ住江が羽振よきを嫉く思へる數人の奥女中。さてこそ彼女め武藝には疎くてあるよな可々目に物見せて耻かかせ日頃の高慢鼻を挫いて服癒せんと罪科も無き住江を悪いぢめせんと言合せて甲乙が住江を中に取箍て

『……アゝそりや可かぬ、住どの、此方じやとて斯御奥に御奉公すりや我輩と同じ樣にスワと云ふ

其時には御部屋樣の御守護を成し場合に由ては恐ながら上樣のお側廻を固めねば成らぬ勤

『御右筆かお茶之間なら手が能書たり茶之湯香花が上手で立派に御奉公は濟ますが御側御小姓は夫では濟まぬ

『縱んば御前樣が武藝の嗜を御吟味ないとて同じ朋輩の私どもが其方の斷り云ふのを左樣かと聞て捨置ては江戸御城大奥の理、大坂方や諸大名衆へ聞えた時に德川樣御家の御恥辱に成りますぞへ

『サア出來ぬ心得ぬとお言やるに由て御師範の御中老へお稽古をお願ひ成るが宜と此中から我輩が口を酸して此方に勸めて居ては無いか

『御奉公が仕て居度ば今日は是非とも試合の中に加入なされい……

口々に並べ立て住江が手を取て只管に立合せんと迫りたり。阿萬之方はアゝ又しても女中たちの人いぢめかな由ない事をと思召したるが去とて女中等が申す所は理の當然いかに御部屋の威勢とて、夫止よ、住は武藝の嗜なうて支は無い、と制し玉ふことも成らず、其上に日頃より住が舉動を見るに全然その嗜が無いとも見えず必ず其心得は有に違ひ無しと女性ながらに萬事に行渡りたる阿萬之方かねて目星を附て居玉ひければ

『コレ住、みンなが言ふは尤じや、心得ないとて耻るに及ばぬ、其を學ぶが稽古と云もの、木長刀なと皮劍なと手に持て立合て見や

仰らるれば女中等は

『サア御前様の御意じや、住どの、早く支度して立合なされや

『左様おざりまするば仰せに任せお稽古を願ひ上ます

『ム、宜い心得じや、……御老中のお直稽古は勿體ない……どなたが住どの、稽古始を敎へて遣はされまするな……誰彼と云ふより此事を言出たは園生どの、マア立合てお遣なさるが宜しう御座りませう

『それではお見出しに與つて此そのふが相手を仕て進ぜやう……サア住どの能う支度して

『未熟もので御座りまするば、園生どの、お手柔に願ひます

住江は今は是非なくも裾高くからけ、手拭とつて鉢巻しかと締め、襷を綾に掛け、腹帶代りのしごきを締直し、立並べたる木長刀の中にて殊に細短なるを取り二振三振ふり試して小脇に挿み、芝の上なる假道場に出で、中腰に成りて一禮し、ヤッと聲掛て立上たる身の構へ、常のなよ〳〵しきに打て變り凛としたる女武者、打込む際のあらばこそ、園生ごときが相手に成らぬ位取り勝負は既に

定まれり。されど住江は相手をば打ことはせで唯々來るを受流し〳〵して相手が疲れて退くを待つのみなれば、入替り立替り七人を相手に試合ども何れも同じ試合にて更に疲るゝ色も無く長刀の働は愈々冴てするどかりけり

第卅四回

住江が伎倆に阿萬の方は左こそと思召し眼力の違はざりしを内心に悅び頗笑て試合を御覽ある。御師範役の中老は住江と女中との試合を暫しと止めて

『住どの天晴のお腕前、サア私がお相手に成ませう

大和流の木長刀脇に挾んで進み出れば、住江は小長刀を下に置て

『これは〳〵御指南番さま、未熟の私し、迚もお前様のお相手は出來兼ますれば平に御川捨を願ひ上まする

丁寧に會釋して斷るを中老は首うち振て

『否々其辭退はきつい御無用、最前からして拜見すると並々ならぬ御手練に感心いたして居ります る、迚もの事のお前の奥の手、秘術の處を御前様へ御覽に入れ度私の望、サア遠慮なしにお立な

さい

『左様ならば御指南番様、一振のお稽古を御願ひ申上まする

雙方一禮して立上り互に構ふる位取り、又別段と見えたりけり。中老は持たる長刀を取直すと見えたるが忽ち水車に廻して切て掛る、心得たりと住江は小長刀を八相に搆へて受たるが寄ては開き開いては寄り秘術を盡す達人名人、足を拂へば躍り越え突て掛ればひらりと外し、二つの長刀は電光石火の如くにて、七八合の打合に優劣のあらばこそ勝負は更に見えざれば流石の阿萬の方を初として多勢の女中たちも、皆茫然として酒に醉へるが如くなり

『待つた』と聲掛て御指南番の中老は身を退けて長刀を下に置けば、住江も同じく長刀取置て下に居たりけり。中老は容を改めて住江に對ひ

『驚き入た御身の長刀、紛方なき靜流の極意水月の傳、とても〳〵私し風情の未熟の長刀及ぶ所で無い御前様のお側に御身がお附き居れては下世話に申す百人力……夫に附ても御身の長刀、誰殿に奥儀の秘傳を授り召されたな

『ハイ別に授かつたと申す事も御座りませぬが幼少のをり亡母の敎で亡父に少々直して貰ふた計りお恥かつて未熟の業まへお恥しう存じまする

飽まで誇らぬ住江が返詞。中老は感じ入て

『實にまこと、能ある鷹は爪を隱すお住どの、御挨拶恐入て御座ります……夫に就ても此關東には至て罕な靜流。私しが先年師匠の話に聞たには、今關八州で靜流の達人は上野の樋口善人か但しは常陸で吉井源内左衛門の内室この二人の外は無いとの事であつた。其二人は唯今では最はや故人に成られたであらうが、シテ御身の亡母上と云しやるは失禮ながら誰殿で誰が御門弟で御座りましたか

『お尋で恐入りまするが唯今お噂なされました吉井源内左衛門の妻が私の實の母で御座ります

『オ、夫では御身が吉井殿の息女であつたか道理こそ勝れた腕前……御前様へ申上ます、唯今御覽あそばした通ほり住みの長刀靜流の名人、殊には素性も正しい武藝の家筋、是からしては私の同役に仰付られ御長刀御指南番に成し下されますやうお願ひ申上まする

阿萬の方は大に悅ばせ玉ひて

『汝が推舉とある上は、此事上の御聽に達した上で取計ふと致しませう……

仰せも未だ畢らぬに、いつの程にか家康公御簾の中より出たまひて

『オ、住とやらが靜流の長刀最前よりして面白う見物いたした、こりや萬や、その住は身ども所望いたして側に置き女中等へ指南させる、當人も不承知はあるまいのウ
御詞をぞ下されたる

第卅五回

有がたき御諚、何かは違背あるべき阿萬の方には畏り奉るよし御請に及ばれ、扨當人の住は如何と尋ねさせ玉へば、素より願ふても無き此身の出世と悅びて御諚次第に御奉公申上たき旨を言上に及びたり、扨それに付ては當人の身元素性ども精しうお取調べの上と申す事にて、頓で夫々の御沙汰を下されたり。家康公の御前に大久保彦左衛門、蜂合助左衛門の兩人は出て

『承はれば阿萬殿召使はれまする住と申す小姓、上には御所望あつて御側に召使はせらるゝと申すこと必定の御儀で御座りまするか

露骨にも問ひ奉つれば家康公は笑を含せて

『何にもさうじや、夫が何と致いたな

『別に何とも致しませぬが、上には其住が身の上素性よう御存知で御座りますか

『其事ならば此方より汝等へ尋ね樣と思ふて居つた……萬ならびに老女が申出には彼女の父は彦坂小刑部が其昔し武道の懇意いたいたもの、又彼が遠緣の叔父と申すは小田原武士で汝等も見知り者じやと申すで無いか

『左樣に御座ります、あの住が父は吉井源内左衛門とか申す兵法者の由、それは小刑部存知の事で私ども頓と承知の致さぬ事におやじります、但し遠緣の又叔父と申しまするは元は小田原で名ある勇士松岡新兵衛、韮山の合戰で高名いたした者唯今では安房の國で富山御堂の清念と申す坊主に成て居りまする、其新兵衛坊主が住を召連て安房より小刑部方へ罷越し住の世話を賴みましたる節に私ども面會いたし何にも新兵衛坊主に相違ない段は御請合の申上まする

『其新兵衛が夜討の高名は此方も其頃承はつて存じ居る、然らば住が身の上素性よう相知て有るで無いか

『イヽヤ夫じやに由て今一應の御分別が願はしう御座ります……先づ第一に心許されぬは新兵衛坊主、年こそ老たれ一廉の曲者、安房の片隅に乞食して居るでも無からう我等肝煎て德川殿へ推擧いたそうと云へは夫は否じや再び武士に成るはフツ〳〵否と斷りまするし、夫なれば江戸へお居やれ責て庵室など修理て一生涯氣樂にして進ぜうと云へば夫も否じや田舍が結句氣安うて好いと

否みまするし、甚だ以て了簡の知れぬ坊主、さりとて世の中を見切て悟を開いた明僧知識とも見えませぬじや、夫故に由斷ならぬ坊主では無いかと存じられまする、其由縁の女の住をば御側近う召寄られてのお寵愛とあつてはチト御宜しう無からうかと考へますれば、此儀だけはお見合せ遊ばします様に私ども兩人より御諫言の申上ます

『ム、信切の諫言今に始めず忝う存ずるが、彦左、助左、安心いたせ、その住をば自分手を附やうと申すで無いぞ

『ハ、、アそりや御手が附うが附まいが岡崎濱松の頃よりして中々箸まめの上様、どうなと思召し次第で御座りますが、兎も角も御側近うは勿體ない、長刀の指南だけで差置れまするが御安泰じやと存じまする

『其儀ならば懸念に及ばぬ、今川浪人武田武士其外北條上杉浮田毛利、昨日まで家康に弓引た家の家來ども自分に奉公せうと申せば器量次第で召抱へ夫々の役目を申付け心置なう召使ふが自分の流儀、ヤレ彼は何家の浪人心許されぬじやの誰は何國の出生由斷が成らぬと申しては天下は治められぬ、用心は我一身の覺悟、腹中は大海の如くで無ては此廣い日本を手に握る事は出來申さぬじや、況て住ごとき年若の女、側近う召使ふに何の仔細があらう大膽の事巧んだら其時に能う言聽せて改心させる分の事じや、其女ごときに寢首かゝれる様な微運では此後の望も成就は成らぬ左やうな不運の家康じやとも思はぬ程に氣遣いたすな、安心して居るが宜いぞ

實に大海の御腹中ついに住江を御小姓の列に加へられ御側近う召使はれければ住江も專ら大切に御奉公を勵みたりけり

第卅六回

扨も車善七郎は榛名の危難を免れ北見藤左衛門に別れを告げてより信濃路に掛りて美濃へ出で京阪の間を徘徊して姑く德川家詮議の氣色を避んと思ひたるに、大垣の城下にて市中の取沙汰を聞ば、德川殿には來春早々御上洛あつて征夷大將軍の宣旨を仰せ蒙り玉ふべしと專ら其噂あり、可々左あらば德川殿道中にて計ふ手段もありぬべし。但し彼北見藤左衛門は我に信義の深き武士なれど德川殿の恩義に服し二心を懷かざる仁、はやくも我が胸中を見拔てか我に對ひて深くも誡しめたる意見の詞。此上は再び彼地へ取て返さんは恐あり、兎も角も此邊に潛みて動靜をこそ窺はめと思案を定め大垣岐阜の邊に居て此年の冬を送りたり

明れば慶長八年、ことしは二三月の頃に德川殿には東海道を上りて御上洛と愈々定め玉ひつる由す

でに海道の諸大名へ公然に其通達ありて江戸御發駕は追て日限取極め仰せ聞けらるべしとの事に聞えたり。善七郎は然らば道中にて徳川殿を待受けんと正月下旬に颯然と美濃を去り尾張路を經て遠州濱松に來り、去にても我身の上の詮議如何と窺ふに、濱松城下に建たる數々の高札張札いづれも徳川殿および領主の觸示どもなるが、其中に

去年水戸表に於て徳川殿に手向いたし候車丹波等が一類之餘黨ども今度殘らず其罪を差免され候間自今以後右之者ども詮議召捕に及ばざるもの也

慶長八年
卯正月　日

本多佐渡守　判
大久保相模守　判

墨くろ〳〵に認めて建たる高札、善七郎は繰返し〳〵讀下して思ひけるは

『徳川殿には去年八月の高札を以て關ヶ原一味の殘黨盡く差免すと觸られたるが、又もや今度この高札、或は北見藤左衛門我に申した詞を守り此善七が命乞致いたかも存ぜぬが、夫にしても殘らず差免すと觸示されたは慾き入たる大腹の御器量成ほど天下の明君と敵も味方も歸伏するは尤じや、ァ、斯る明君の徳川殿を主にも取らず剩へ附狂ふとは我ながら深き罪業、能々武道の冥加に盡果たる善七、實も清念坊が「何事も前世から持て生れた因果じや善と思ひ込だ事が惡にも

なれば惡と恐怖れた事が善にも成る果を見ねば因は悟れぬ是が即ち善惡不二じや」と言はれたが世の中は都てさうしたものであらう……

獨語して高札場を立去りしが、サア斯なる上は日本晴大手を揮て何處を歩ても遠慮は無い。否々さう心は許せまい家康殿とて隨分深い巧を成さる大將と聞て居る殊に本多佐渡守音に聞ゆる古狸この高札で善七に由斷させ不意に寄て召捕る手段、否々夫は小人の心もて君子を計ると申すもの我ながら耻しい心底、征夷大將軍に成て天下を一統しやうと云ふ徳川殿その御目では我等ごときは虻虫同前、大阪の秀頼殿御母子さへ安穩して召置るゝ家康公、何で善七風情を心に搆へて御座らうや、徳川殿ほどの明君に欺られて捕へられたる車善七郎猛虎が一世の名譽物怪の幸ひ、いざ是からは車善七と名乘て横行せうと思ひ定めたり、善七が推察は果して違はざりけり、北見藤左衛門は善七に意見を加へ別れてより江戸へ出で大久保相模守に就て車善七郎助命の事を愁訴なしたるに、相模守も氣の毒に思ひ家康公の御聽に達しければ、素より寛仁大度の明君さらば「一類殘らず免せ」との御諚を下されて斯は御觸示に成たるなり

斯て善七は東海道を下りつるに宇津谷の峠にて思はぬ事に出會ひぬ

第卅七回

扨善七は（車善七郎は赦免の頃より自から郎の一字を去りて善七と名乗りたれば以下みな善七とのみ記す）急ぐ旅にもあらねば心に任せて東海道を下りけるが、若氣の習とて道を貪り未だ日脚は高し同じくは此宇津谷の峠を越て寛やかに宿を求めんとて黄昏すこし前に峠に掛りたるが、何とかは仕たりけん俄に腹の痛を覺えしかば路傍に憩ひて用意の藥を服し徐々と再び登りたるに峠の上なる辻堂に達せし頃には腹痛更に烈しくて一歩も進み難き程に成りければ辻堂の椽に腰うち掛け猶も殘りの藥を取出して服用なしたり。頃しも二月の初餘寒の烈しき山中にて日は已に暮ぬ寒はひたと肌に浸て病は愈々苦さを增しければ善七は苦痛を忍びつゝ其の邊に落散たる枯枝を拾ひ集め燧火すつて燃し附け身を温ためたるに、其の故にや痛も少し寛ぎたり。さても此の辻堂いかなる御佛をや安置したると焚火の光りに能く〳〵見れば施無畏の三字を書せる額面、ムゝ是に座すは大慈大悲の觀音薩埵にてましますよな、旅行ものが途中の惱み救はせ玉へと合掌禮拜なして扉を開き内を見れば戸張は破れて御影あらはに拜ませ玉ひ前机の上には香爐花瓶などの古びたるを並べ粢餅五ッ六ッほど古折敷に載てありぬ、善七は今日晝飯を認めたる計りにて空腹に飢たる折からにしあれば是は

忝しと御佛に對ひて、凡そ佛物を偸む罪は七生まで不具に生るとの御誡示と承りて候ふが、某こと飢に迫りて外に物得べき樣も候はねば是なる御供物某に賜て目前の難儀を救はせ玉へと理申て取下し更に焚火の燃さしに、枯枝を折くべてかの粢餅を燒き殘り無く食竭し手水鉢の水を飲て咽を濕しければ腹も可なりに滿て腹痛も亦頓て癒たりけり有がたき觀世音の御恵み、いざ去ば暇申して立出んと思ひしが、否々此先の道の程夜中の歩行いかゞあるべき、夜寒の風に中りて再び腹痛の苦みを起さんよりは此御堂の中に一夜を明し日出て後に行程をたどるに若じと思ひ直し四邊の落葉を掻集め御堂の扉の内に布散して假の衾と爲し内より扉をはたと鎖し柱に憑れて思はずも華胥の鄉にぞ遊びたる

何かは知らず、御堂の緣の邊にて女の泣聲數人の罵り。善七は睡りを覺し、何事にてあるやらん盜賊共が村の女を拐帶して來るにや樣こそあらめと、靜に身を起し扉の格子の際間より伺ひ見れば、五六人の若い男子が一人の眉目よき處女を中に圍ひ最前善七が焚火したる燃殘の灰の上に枯木ども更に打くべて焚火を爲し彼の處女を劫りつゝ諭せる體は盜賊とも思はれず、不審き事かなと善七は耳を欹てゝ更に其談話を聞けば處女は左ながら雨に惱める山櫻花とも云ふべき風情にて聲も涙に曇らせて

『……エ、そりや貴君がたの無理と云ふもの何に所の習じやて、私には現在歴とした兩親が家にある、夫へ斷らいで途中に待伏して私をば無理無體に擔ぎ出し此山中に連て來て誰某の女房に成れと云はしやりますは筋が違ふ、先づ一番に其誰某は私が嫌ひ、兩親もそれ聞てじやに由て相談を斷らしやつた、夫を貴君がたの是非に媒妁せう是から直に嫁入せいと往生づくめに仕様とさしやりますは餘りの難題……　是ばかりは堪忍して下さりませ……後生じやお情じや

揉口說ども若漢等は中々聞入れず其中にて若漢頭と覺しきが處女を慰めて

『コレお小夜どの、御身さまが言ッしやるは尤じや決して無理とは云はぬが、マア此方の身にも成て見さしやりませ、誰某は阿部郡きつての家柄、我等しき並百姓は途で逢ば冠物とつて腰屈めて旦那どのと敬ふ程の方じや、其方が御身様の器量に惚て嫁御衆にせうと我等もつての申入れ夫をば御身様の兩親衆が木で鼻括つた斷りやう是が許婚の男があつての斷絶なら少しは聞えて居るが、否じやと云ふては我等づれ一同村方の恥じやに由て無理と知て御身様の擔ぎ出いた理……

これ否と言しやりますと言掛りから飛火がして了には御身様町と郡との喧嘩に成らうも知れぬ……

……否でも應でも無事を思ふて得心さしやりませ

非を理に爲して論したり

第卅八回

善七は是を聞て、扨こそ我が推量に違はず彼處女を擔ぎ出し強て嫁入させうとの硬談判でありつるなれ、先づ處女が得心するや如何を確めたる上の事よと猶も耳欹て、聽くとも知らず、若漢等は品を替へて交る交るに口說き論せども、處女は只々許し玉へ堪忍し玉へと云のみにて更に承諾べき氣色も無し、若漢等は大に焦立て、扨も〳〵情剛の娘かな我等かく口を酸して理解を申すに聞入も無く否じや〳〵と言張るは作法を知らぬ不埒の女この上は村へ連行き旦那どの御了簡の聞て計はねば成り申さぬと既に手足を取て宙に釣し再び擔ぎ出さんとす、善七は此前より、何にして依處女を救ひ遣はすべき、左まで惡心とても無い若漢等の百姓ばら痛く打懲さんも笑止なり、唯驚かして追散すに若ずと思ひ付き、去ば我當座の俳優して彼奴等が肝魂を消させくれんと　髪きつて髪ふり亂し前机の香爐の灰を明け倒樣に頭に冥り刀の下緒を以てしかと結び、破戸帳の帛を取て肩に纏ひ　懐紙を花瓶の水に浸して顔に張り附け、餘れる紙を裂て櫛の薬に結付け右の手に持ち、いざと立ちて口笛をヒウ〳〵と嘯きて扉の格子をガタ〳〵と響かせて高らかに

『抑々是は此字津谷の嶺に年經て住居いたす山神なり

と諭ひ出せば若漢等は不意を打れてビックリなし逃出さんとするを見て、善七は扉を明て出で

『いかに若漢ども止れと申すに

大喝すれば、若漢等は焚火の光りに善七が裝束を透し見て皆慄へ出し腰うち抜して恐縮ぬ、善七は左こそと心に可笑さを忍びて

『それなる氏子ども 承 はれ、是へ連たる處女こそ此山神が日頃より大方ならず見初たる女なり

『神變不思議の業通をさしもに得たる我なれど脱離の功なき悲しさは色欲界の煩惱の免れ難しや夢現身は宇津谷に空蟬の戀に眼も泣暮す心の亂ぞ遣瀬なき 『南無大慈大悲の觀世音我願ひ叶はせ玉へと祈誓を掛れば有がたや 『唯頼め淺茅が原のさしも草さしも切なる戀衣靜機山の忍ぶ摺あふ夜を待よ山の神といと嚴重の御告なり 『されば夫なる處女は 忝 くも觀音大菩薩より 某 へ下し賜はる女なり 『賤の男子の汝等が思ひを掛るものならば嗔恚の焰嫉妬の恨目前たる其身の上思ひ知らせて置くべきや

高らかに諭ひつゝ樒の玉串うち振り〳〵若漢等が襟首つかみ手首を捉へて投出したりければ若漢等は肝 魂も身に添はず

『恐入りました、山の神様のお許婚の奥方とも存じませいで擯ぎ出した不調法……

『知らぬ故で御座りますれば、どうか御勘辨を願ひ上ます

『向後この女には指も差させぬ程に今度の所は御免しを

『此通り一同にお願ひ申上まする

首を地に附け拍手うつて拜みければ善七の山の神は

『左あらば此度は免さうずる間早々此を立去申せ

『畏りました……夫では此娘は 私 共が

『府中の親許へ送り屆くると致しませう

『アラ嬉しや百姓ばら立去とこそ

と叱り付れば皆々怖れて雲を霞と逃去たり善七は後を見送りて裝束の品々取脱て堪へ堪へたる笑を一度に吹出して

『ハヽヽヽヽア扨も思はぬ狂言いたいて得も言はれぬ興を催した、心ある人が見物して御座つたら氣違じやと申さるゝであつたらう……夫にしても擯がれた娘は何と致したであらう

焚火を搔立て四邊を見廻せば、無悪や彼の處女は山の神の出現に愕きてや彼方の松の樹の下に氣絶して仆れ居たりけり

第卅九回

善七が宇津谷峠にて計らずも危難を救ひたる處女は駿河國の府中（今の靜岡市）の大町に住居なせる期比奈三郎兵衛信久と云へる酒造家の一人娘にてお小夜と呼べるものなり。抑々此三郎兵衛は元今川義元の家臣にて二百石を知行なし度々の戰場に武功を顯し譽を得たる覺の武士なりけるが、一子三郎太郎は桶狹間の合戰に義元の本陣に在りて勇戰の討死を遂げたり、其後義眞の代になりて三郎兵衛は頻に義眞の惰弱に流れ遊興に耽るを諫め却て義眞に疎まれ君前を退けられたるが、其後武田家とも戰に先陣して痛手を負ひ既に落命するばかりなりしを不思議に命助りしかども腰の關節を鐵砲にて打拔かれたる爲に歩行も叶はぬ畸形ものに成りて知行に退ぞきたり、今川家滅亡の後は知行を失ひて片田舍に潛み纔に惜からぬ露命を繋ぎ居たるに德川殿駿河を領させてより三郎兵衛を尋ね出されたり、是は三郎兵衛が父母にてありける人が家康公いまだ竹千代殿と申して今川家に人質と成りて府中におはせしころ夫婦にて劬はり奉り妻は日々食物ども調へて持參りて殿に勸め召物の事をも御世話申上げ三郎兵衛は御手習あるひは狩なんどの御慰に具し奉りて最も信切に優待したれば殿にも幼心に深く其信切を悅ばせ玉へり。其折三郎兵衛が三四歲にてありしを屢々召連て伺候し『殿、御成尊の上にて世に立たせ玉はゞあはれ此小悴にお目を掛て賜はり候へ』と願ひ殿にも『必ず見捨る事はあらじ心安う思ひ候らへ』と仰せたる事ありき、されば家康公にも其時の事を思ひ出させ玉ひて『其昔し今川家に期比奈三郎兵衛と云ひし武士あり其悴の年齡は余より四ツ五ツも若からんが今に生存へて居るやらん急ぎ尋ね出し由緣の者もあらば召連て參れよ』との御諚を下さる、夫ぞ聞ゆる二代目の期比奈三郎兵衛にて候ふべしとて足腰立たぬ三郎兵衛を尋ね出し駕籠に乘せて家康公の御前に召連れたり、家康公は三郎兵衛が身の上の事を聞召して『腰が立たずとも何かは苦しかるべき、武功の勇士ではあり、殊に我等幼き時に其方が父母に約束したる詞もあれば我等得見棄まじいぞ、元高に五倍して千石の知行を與へ旗本の列に加ふべし』と有がたき御諚を下されたるに、三郎兵衛は涙をはら〳〵と流して『亡父母にて候ひしもの共が聊ばかりの御奉公を左程までに思召し厚き御諚を下し置かるゝこと身に餘りて忝うこそ存じ候へ、去ながら此三郎兵衛は故主の義眞ぬしに疎まれ剩へ戰場にて御覽の如き不具者に相成り今川家退去の砌りに討死をも致さず面目なくも生殘りたる者にて候へば御奉公仕り度も成り難き腰拔の老耄、せめて悴にても存生して候はゞ御馬の先を駈させ度けれど是も疾に討死して候へば其詮も候はず、妻も既に歿りて今は私と幼き娘と父子二人にて候ふなれば此上の御芳恩には晴がましき武士の交りを避け何地の隅にても餘

命を送らせ、故主義元ぬしの菩提をば心任せに弔はせ賜はるやう願ひ奉り候ふ』と浸々願ひけり。家康公も其心底を感じ給ひて、然らば其方が心に任せんが、其方が父母追福の料に當所に於て五百石の田地を永代無年貢にて其方に預くべければ夫をもて酒造いたし餘命を氣樂に送り候へ、我等當所通行の節には罷出て不自由の事もあらば直訴いたし候へ、又其方が娘に聟を取り家名を相續いたさせなば我等へ屆出よ其者の器量に由ては余が家來と成し千石の知行を取らすべきぞ、我等死去の後とても相違はある可からず』とて御朱印二通を書かせ御手づから御判を据させられて三郎兵衛に賜はり其外種々の御引出物をかづけさせ玉ひけり。是よりして三郎兵衛は仰せを畏みて府中の大町に住宅を搆へ五百石作取の田地を有ち酒造を營み德川殿御山緒の浪人とて苗字帶刀は勿論乘馬駕籠御免大番與頭の格式にて格別の御取扱を蒙り府中にては一二を數へらるゝ大家とは成たりけり

第四十回

三郎兵衛は娘お小夜が危難を救ひたる謝詞を厚く善七に述べ兎も角もと座敷に請じて善七の本國姓名を問ひたれば、善七は既に追捕を免されたる身の上なれば何か憚る事のあるべきと若氣の不注意にも常陸浪人車善七猛虎なりと名乘たり三郎兵衛は驚きて

『扨は聞及んだ火の車殿の御子息善七殿で御座りましたか、水戸一揆の御旗揚から那珂川畔の合戰に圍を破つてのお引揚、父上の御首級を御取返しの始末まで世の風說に承て竊に感じ入り申し居た、併し唯今にては追捕の御沙汰も御赦免なつて御座れば御憚りは毛頭ない……武藝御修行とあらば御急ぎの道中でも御座るまい娘の爲には命の親、拙者の爲には家の恥をお救ひ下された大恩人、せめて當分の御滯留三郎兵衛たつてお願ひ申上る

と引留めて饗應に手を盡しての接遇、娘お小夜も其座に出て一方ならぬ恩を謝し猶も其時の狀況ども物語り山の神の出現に氣絶したる由を述べければ、其山の神とは如何なる事ぞと三郎兵衛の尋ねに、善七は據なく實は田舍の若漢等を無難に追散さん爲に斯々の戲謔を爲したる次第と事の概略を語りて

『……右の通りの子供遊び御萩に與かつて面目なう御座ります

と打笑ひつゝ語りたり、三郎兵衛は感じ入て

『イヤ〳〵子供遊びの戲謔で無い、壯年血氣の時には拙者とても覺えが御座るが、左樣な事に出會申せば怒り胸を衝て起り腕の力に任せて打擲、折檻の致し程立て後悔いたすが例であるに貴殿には未だ御若年にて御座りながら彼等が盜賊の惡徒ならぬを御知りなされて手も負せずに追拂ひ其

上に又と再び祟を致さぬ様にとの御託宣、當座の御計ひ勘辨深い成されかた拙者ごときが年老ても中々以て及び難ない御計略、實に感心の致いて恐入り申して御座る

善七の才智武勇を稱して夫より、日毎の盞應に他事なかりけり。善七は家康公、御上洛の日限いまだ發表に成ざれば強て急ぐ旅にもあらず、三郎兵衛父子が留むるに任せて四五日の滯留を成たるに、其中に三郎兵衛が系圖身の上ばなしを聞き心中に思ひけるは

『扨は當家の主人、初より山ある武士とは察したが、家康公どのに夫ほど深い由緒の人でありつるよな、北見藤左衛門と云ひ朝比奈三郎兵衛と云ひかう行く先々にて德川方ばかりに出會も不思議、我が大望の達せざる前表では無からうか……否々虎穴に入らねば虎兒は得がたしと古人の金言、德川方に身を寄て家康殿の進退を探り知るが屈竟一の手段これこそ天の幸なれ……

心を落付て腰を据え三郎公衛お小夜が言ふまに〳〵滯留なし居たり。三郎兵衛は善七が言語舉動を見るに天晴の武士、但し勿體なくも德川殿へ弓引たる丹波が一子怨を懷き居るならんと話の折々に試し見るに、善七に固より深き所存あるなれば嗟氣にも顯はさず、同じ武士に生れたる冥加には德川殿ごとき大將を主に持て見たきにこそなど頻りに譽崇め參らせたり。三郎兵衛は叫ふべくは此善七を我聟金に爲してお小夜の夫と定め其旨を申立て千石の旗本に朝比奈の家名を止めんものをと心

に思ひ掛たるに、思ひは同じ娘のお小夜今年十八の妙齡なるが善七の美男に人知らぬ思ひを焦す初穂に包むとすれど穂に出て召使の侍女等にはや悟られ『御嬢樣の思召しは御尤、蝶鳥のお使は私共が致しませう、何の憚が御座りませう思ひのたけ水莖に言せて下し賜りませ、父上さまにも御聟樣に成され度との御心中、時々御洩し成されまする……』と内内玉章の便りを勸むる迄に成にけり

第四十一回

乳母の乳房くはへし頃はいざ知らず五歲より保傅の侍等が手に育ち七歲から手習ひして實語教よみ覺え九歲で木太刀もち習ひ十五歲で元服して太守に謁見その以來今日まで樣々の事に出會たるが斯る意外の事は唯今が初、德川殿に追拂の觸書まはされたも覺悟の上なれば是程には驚きもせで此先とて剛の者に果狀つけられても臆せぬ心得で居る我なれど此狀には胸を潰かせた先つ頃母上の御生害その御書置をば安房の富山御堂で住江から請取て讀だ時の悲しさは心も膽も張裂る思ひであつたが、夫とて是程の不思議には驚かず無かつたに是は又何と致した事であらう、殊に此善七には未だ契りこそ交さね七生までと約束して生死の大事を一ッにと申合せた夫婦一體の妻もあるに、其事たとひ秘置て言出した事は無けれど他し女に詞交す樣の事あつては我と我心に耻入る次第去とて無下に

突戻して面目失はするは男たるもの〻情知たる計ひでもあるまい、車善七は人の想を汲分ぬ東夷の名殘じやと笑れんも口惜しと、……一通の手紙を膝の上に置き諸手を叉いて考へ入たるは是ぞ善七がお小夜の玉章を侍女より渡されて讀下したる後の當惑なる

淫蕩女が我等に文送つて怪かる振舞おのれ投却して面耻か〻せてくれうと云ふは清僧ぶる賣名坊主が聖人めかす似非本讀が中すこと縱んば容貌の醜い女からじやとて玉章もらうは男の果報、況て是は朝比奈どの御息女で都方はいざ知らず東路には稀なる美人よく〳〵此善七が宇津谷で危難救ふて進ぜたを嬉しいと思はれたればこそ其身を一生涯我に任せうとの心〻それをありがたいとも思はいで耻辱與へては中さば恩を仇で酬ふる道理、それ致いて己れが潔白見するは眞の男子の所爲で無い、所詮これは術よく當所を立退て我も人も操を全うするが萬全の計ごとじやと屹度思ひ定めたるは流石に情をも知り道理をも辨へたる善七なり夫に就ても知らねば成らぬは家康どの江戸發駕の日限、あの三郎兵衛は家康どの通行には其度毎に伺候すると常からの物語り、可々、何と無う話の序に紛して聞て見やう我等立退も其日限を確めた上の事じやと考へ、其夜三郎兵衛と對座の一酌に雜話の中に機を見て

『扨御主人、德川殿には今度の御上洛で愈々征夷大將軍の宣旨蒙らせて公方樣にお成なされるとの

取沙汰、定めて今度は御同勢も常より多くて御立派な御道中で御座りませうてのウ

と問掛れば三郎兵衛は得意氣に首諾て

『我等御直に伺ふたで無ければ確とは中されぬが將軍宣下は一昨年から所司代板倉伊賀守もつて禁裏より度々の御内命、まだ早い〳〵とて德川殿には御辭退遊ばいたが今度は餘儀なう御請なさると中す事じや、又御供連の御同勢は京都御着で御參内の時には大納言家（秀忠公）はじめ公達が御普代衆その外に國持大名衆も夫々御供召れてお美事の行列で御座らうが御道中は御手輕專の德川殿御家風なれば例の通りの御小人數で御座るに違ひは無いと存じ中すよ夫は恐れ入た御事で御座ります……御通行の砌りにも貴下さだめてお出迎なさるで御座りませうてな

『サヅ全體なら、さう致さいでは成り中さぬが、過日も御話申した通り此不具ゆゑ驛外れは愚か一町はなれた所でさへ歩行ならぬ身體、それゆゑ御着の上で當御城へ伺候の致いて謁見を願ひ申すじや、こりや自慢では無いが、乘物で中の御門内まで乘り夫から家來に負はれて御内玄關に上り御小姓衆の肩に掛つて内大臣家の御前に出るのは當時恐らく此三郎兵衛一人で御座るよ誠に以て有がたい事でのウ

誇顔して說出したり

第四十二回

善七は心中に得たりと悅びて

『夫は〳〵御冥加の御事、內大臣家ほどの御大將に謁見するさへ武士の果報、剩て乘物御免で御側近う伺候なさるとは此上も無い御面目、アッ關が原御一戰の節に故主佐竹殿が無川の義理立を成さらいで德川殿へ一途御忠節の御味方なされたならば父丹波も無事に命存らへ此善七ごときも事の序に內大臣家の尊顔の拜する事も出來申したらうに……扨々同じ武士に生れても冥加拙いものは是非なう御座り申すてなア

嘆息すれば。三郎兵衛は日頃わが胸中の望を遂するは此ぞと思ひて少し膝を進めて

『そりや御身樣申さるゝ通りじや、日本廣しと雖も當時德川內大臣殿の上に出る大將は復と二人は御座り無い、良禽は好枝を擇んで住むと云ふ語もあれば武士の出世は主取が第一なり我等も斯樣に身の上の果報は有なれど其果報も唯今では我身一代、賴に致いた悴は疾に世を去り跡に遺るは役に立たぬ小夜一人、內大臣家より知行千石下し置れうと御朱印な下されて所持いたせど此三郎

兵衛が聟に成て家名の相續いたし千石の御旗下に成らうと云ふ程の器量系圖が備はつた養子は今以て無し俗に申す寶の持腐れ、御身樣見たやうな聟養子が有たなら某も安心いたいて冥土へ參るが……シテ見れば果報の拙いは御身樣も我等も同樣で御座るのウ

嘆息しつゝ善七が樣子を窺ひ何と云ふやらんと口氣を引見たるに。善七はさり氣なき體にて

『左樣御案じな成れ召さるな、御身樣じやと申して左までの御老年と申すでは無し御樣にはまだ御年若、唯今にも思召に叶ふた御養子が御座つて御家名は末代御永續と御請合申し上まする……殊に御當家の御養子に成て千石の御知行を拜領いたし德川殿御旗本に列なれば此上も無い仕合せ、系圖も器量も揃ふた仁が幾人も御座りませうに……

程よく挨拶するにぞ。三郎兵衛も得たりと悅び、此上は寧そ一騎打の勝負で倒か仲か手短く直掛合をするこそ好けれ此仁とて望が全くあると見えるにと思ひ定めて更に膝をすり寄せ聲を少し低め力を入れて

『扨善七どの貴殿と某かやうに御懇意の致す上は某が折入ての賴み御承諾は下さるまいかそは別儀でもおり無い、貴殿某の養子に成て小夜と婚禮の致し朝比奈三郎兵衛の家名相續しては下さるまいか……常陸にて車殿御身代に比ぶれば千石は少なからうが德川殿御旗本で千石と申せば先は相

應の高その上に貴殿の御忠勤次第では二千石が五千石萬石以上の大身にも成れると申すもの。殊に主君と仰ぐは申す迄も無い内大臣家で貴殿が儘に成なら御主人に取度と申された御方、また娘の小夜こと御存知通り不器量の上の愚物では御座るが女尊常の事は心得をつて夫の申付に違背いたす樣な者では御座り申さぬ……車御家名は御大切相絶しては御亡父尊靈に對して貴殿御孝行が立ち申さぬは御尤、併し貴殿と小夜との間に出來た子供の中で一人は朝比奈の相續その一人は車家の相續と致され千石の内を上へ願つて分地いたされても某に於ては固より異存はおり無い、又男女一人づゝであつたなら孰をいづれと致されても夫以て苦しう御座らぬ……此儀貴殿御承允下さらうなら三郎兵衛に取ては此上も無い悅び小夜は勿論不承知など申す事は御座らぬ貴殿を夫に持てば願ふても無い女の幸福其上で内大臣家當地御通行の砌り某より御直に願ひ御許し得て貴殿へ聟養子の謁見させ萬事目出たう取極たいが、御承諾の下さるまいかと詞を盡して說出したり

第四十三回

朝比奈三郎兵衛が手詰の談判、さすがの善七も不意を打たれて心中大に驚き。扨は阿小夜殿ばかりか此三郎兵衛殿までが我に目を付け直接に聟養子にせうとの懸合ひ、小夜どの艶書の一條を早くも推察あつての事か、但し夫知いでの懇望か、夫とも我心を引て試さんとの手段であるか、然し他心あつてとは思はれず、三郎兵衛どの心の實は明白に詞の上で顯れてある、何と答を致すべきと挨拶に當惑したれども、扨しもあるべき事ならねば容を更めて

『先以て私ごとき不肖愚昧の若輩ものを御聟養子に成されうとの思召し、此上も無い善七身の冥加に存じまする但し浪人ながらも武士たるもの一身の進退生涯の落着一應は相考へ明朝更めて御請を申上ると仕り度御座りまする……次に阿小夜どの御不承知無いと仰せられますれど一生連添ふ夫婦の間は又格別、御當人御所存を御尋ね無く無理壓制は末々の御不爲これ以て折を御見計ひ篤と御得心の上の事かりそめの御計ひ、私に於ても迷惑かと存じまする……殊に内大臣家の思召し此儀如何御座りませうか、成ほど別段の御高恩の以て追拂は御免なりましたれど德川家御旗に向ふて謀叛の致いた佐竹浪人一揆の總大將車丹波守義久と首札打て水戸青柳口に懸けられた大罪人の悴車善七猛虎現在那珂川畔の合戰に御手向ひ致した曲者いか程に御祟あつても一言御恨の申上やう無い身分の私し、其曲者たとひ改心いたいたとて夫を直に御當家御養子とは内大臣家の御胃慮にて御不興に思召さるゝ恐れ、啓ひ御願立に相成て貴所樣その爲に自然御疎の起り申して

は以ての外の御一大事……實に仰の通り、寛仁大度の大將軍、その御目より御覽あつては善七ごときもの蛔虫とも思召す事は御座りますまいが、貴所樣には又それでも御入念が御大切かと慄ながら存じまする……所詮な個樣なされては如何で御座りまする、先づ此御相談は私しへも未だ御口外下されぬ積りにして、お小夜殿へも勿論何の御話も無く、内大臣家當地通御の砌り貴所さま御伺候の節に御老職を以て何と無う御内慮を御窺ひ成るが宜しう御座らう、善七ていのもの御旗本に召置るゝは御好み遊されぬ樣の御樣子に在せられたれば御相談は素より夫まで、若また仕合よく召使れやうとの思召であつたらば其時こそ改めて私へ御相談の下され度、左樣いたせば事整はいでも諸事は貴所樣御心中一ッに納め誰の面皮も損ねず永く御懇意を繋ぐ事も出來て萬端の都合かと存じまする

理を分て穩に演ければ三郎兵衛は深く感じ入て

『アッ恐入た貴殿の御分別、なる程この三郎兵衛年がひも無う卒爾の申出いて耻入り申したこりや何樣まづ御内慮の伺ひ奉つての事に致さう……ナニ大腹の内大臣家、我等より委細言上いたいたら左樣せいと御諚あるに極つてあるが但し御伺ひの致すが專一、その上で目度たう貴殿つれて謁見……夫から祝言の盃……

もはや萬事定まつたる如き考にて一人悅び、善七は更に打解て

『シテ内大臣家には何日頃に此駿府を通御に成らせられまするな

問掛れば

『サア當月十五日江戸御發駕で神奈川の御泊、十六日が藤澤、十七日が小田原で山中の御狩、十八日が三島、十九日が此駿府で十九日は一日の御滯留、廿日の御立と申す御日取じやゆゑ御内慮を窺ふにも大きに都合が宜してなア

申すにぞ善七は内心にて

『しめた

第四十四回

善七は獨り熟々思ひけるは

『先づ三郎兵衛の方は一寸免れで差向の所は延したものゝ困たはお小夜の方じや、又あの侍女めが今日も返事の催促を遠廻しに爲に來るであらう、夫には我等もほと〳〵閉口の仕る、ハテ何と仕たものであらうな

日頃よりして物堅き善七屈托して取つ置つ考へけるがハタと膝を打て

『コリヤ我等太だ邪路に迷ひ入て危うも恩を仇で酬うと致いた……亡父上の御遺志を承繼ぎ斯やうに辛苦いたすは何の爲、家を捨て身を棄て蔭ながら故主佐竹殿御家を守護せう爲、その爲なら大罪をも犯し此身をも火刑にせられ磔刑に懸らるゝは素より覺悟、去ながら同類でも無い人を連累にしては不本意至極……家康殿の通行を待受るは箱根の山中、指をり數ふれば三日の中、オヽ今夜こそ當家を立退には幸ひの春雨……併し無沙汰では出奔同前、却て三郎兵衛殿父子に疑ひ……丈夫が思ひ定めては復何をか顧みて後髪を引るべき、そこ〳〵に支度を整へ夜に紛れて朝比奈三郎兵衛が家を立退たり、是れ慶長八年八月十五日の夜半の事にてありけり三郎兵衛は斯とも知らず來る十九日に德川殿この駿府に御著あらば直に伺候して車善七の事を申上げん、大氣の御大將御聞屆あそばさるは必定なりと內心に打悅びて臥戸に入り、明れば十六日昨夜の雨も曉より霽ていとも長閑なる彌生の空、アヽ今日は德川殿神奈川を御發召されて藤澤への御日取お道すがらの田舍の花面白う御覽ぜられうなどゝ思ひ遣り奉り、夫に就ても平日早起の善七どのまう巳刻下じゃに（午前十時後）まだ寢間から出てわせられぬは異な事である、若も腹痛でも起つて惱んでは居られるやらんと我が乞聟に成る人と思へば猶更氣に掛りて手を打鳴し侍女を呼び窺せたりけるに、頓て侍女は戻、

りて

申上ます、御客人さま御部屋は御蒲團も取かた付て御所持のお品も見えず、どうやら御出立にでも成ましたかと存じられます

と申しければ三郎兵衛は

『ナニ善七どのが出立さしやつた樣に見えると……左樣な事が有う筈は無が……どれ、我等自分で見に參らう

杖にすがり待女の肩に倚掛りて足ひきずりながら善七が居間と定めたる小座敷に赴き見れば、實にも待女が申し如く善七は居らずして、机の上に一封の書簡を殘し表には「朝比奈三郎兵衛樣御直覽」と認ため裏には「車善七猛虎」と書記して封を加へたるをぞ置きたりけり三郎兵衛は仔細こそあらめと急ぎ封おし切て讀下せば其文體は

拜顏の上にて御意を得べくと存じ候ひしが、却て双方の義理合より無益の差縺をも引起し申すべき哉と懸念いたし態と差控へ、御暇乞をも申上げ奉らず今夜御當地を發足仕り候ふ段、無禮の儀は平に御詫申上候、扨も今度思寄らず御令孃樣の御危難を御救ひ申上候ひしこと御緣と相成り一通ならぬ御懇意を蒙り其上に不肖の私を御當家御養子にとの思召し千萬あり難き仕合に

存じ奉り候ふ、右に付き愚存の程一應申上置き候ふ處、猶更つくづく勘考仕り候ふに假令内大臣家に於せられては此善七が罪科御免仰付られ召使はるべき尊慮に在せられ候ふとも、貴所樣御身分として其儀を御願ひ成され候ふ事は上を憚らざる、無遠慮の至りと諸人の批判一同の是非も必定これあるべくと存じられ候ふ、左ありては貴所樣御家の御不爲に相成り候ふ間此儀は初より御思ひ止り成され御謁見の砌り一言の御申立これ無くて然るべく候ふ、是全く私一己の都合にあらず、是に依て御斷も致さず御當家を立退き申し候ふ、私心底御推察下さる可く候ふ 恐々謹言

慶長八年八月十六日 曉丑の刻

朝比奈三郎兵衛殿

人々御中

車善七猛虎判

第四十五回

此に徳川殿(家康公)には慶長八年三月十五日と云ふに江戸御城を御發駕ありて東海道を打たせられ其日は神奈川宿の御泊、十六日は藤澤、十七日は午頃に小田原城に入らせられ直に山中の御狩を仰

出され數多の勢子を催して鹿兎ども騙立させ御獲物の多き儘に大に興に入らせられ長き春の日も西山に春けども未だ揚貝を吹かせで狩せ給ひけり。彌生の空の例とて晴渡りて長閑なりけるに黄昏ちかき頃より俄に搔曇りて黑雲ひたと覆ひ大雨は車軸を流す計に降出したれば、徳川殿には用意の御駕籠に召させ急ぎ揚貝吹かせて御人數を聚められ山北の境より森中を横ぎりて本道の方へと御歸路を向させらる、左なきだに大木巨樹生茂りて枝を重ね日を掩ひ日中さへ陰暗き谷合の細徑況てや日は已に暮なんとして大雨降しきりたる折なれば山霧深く立籠て五六間さきの處すら確には見えざりけり。御駕籠は此間を急がせて進められ徑は曲り折て極めて嶮しく最狹き處に掛らせたる所に、左の方の森なる木立の中にどんと一發鐵砲の響につれて彈一つ飛來り徳川殿の御駕籠を斜にこそは打貫たれ、スハや曲者それ搜して召捕んと騒ぎ立つ、徳川殿は御駕籠の中よりして『我等怪我は致さぬぞ、其曲者 搜すに及ばぬ、駕籠早う仕つて街道へ出よ』と仰られて後をも顧ずして只管に道を急がせ給へり、後にて見れば彈は御駕籠の左の屋根より入りて御膝の上を過て右の後に貫たれば御體を離る、こと僅に三寸を出ず、今少し彈低かりせば御命にも關る程の灸所に痛手を受させ給ふ可かりしに、天の冥護を得させたる御方とて御運はいとゞ強かりけり(此御駕籠は後に久能山に納められしと云へり)街道に出させて是より如何仕り候はん』と伺ひ奉るに『是まゝ此嶺を越して三

島に仕つれよ』仰せられしかば此夜に入りて箱根を西へ下りて御恙なく三島の宿へぞ入らせ給ひける

扨も車善七は駿府なる朝比奈三郎兵衛が家を十六日の曉まだ夜深きに立退きて、本海道は人目の憚あればとて故と富士の裾野に掛りて足柄に分入り山中の邊に出で何氣なく狀況を窺ひ見るに勢子どもが持場々々に出張れる樣ども彼此に觀たりけり、我が宿意を晴すは此時なりと其夜は奥深き山中に明し、十七日に早天よりして人に知れざる森の中に忍び入り、用意の粮の干飯に飢を凌ぎ德川殿の通行路は必定此と知れたれば馬にまれ駕籠にまれ早う來ませよ目に物見せて車善七が伎倆を知らせ奉らんと一日千秋の思を爲して待受たるに折しも降出したる俄の大雨天の與と心に悅び駿府にて密に調へたる種が島の短銃この雨に火繩を消れじと意を用ひて忍び居たるぞ大膽にも亦不敵なる、彼方より聞えて近づける人馬の足音、あの駕籠こそ德川殿に違ひ無し、南無八幡大菩薩別しては我が本國常陸の鹿島大明神この善七猛虎が孤忠をば哀と思召ば此鐵砲外させ給ふなと心の中に祈念して狙を定めどうと打出したるに手徹して御駕籠にこそは中つたれ、それ曲ものと御同勢の騷ぎ、中つたりとは云ひ條いまだ德川殿生死の程も知ざれば此にて早まり討死すべき時に非ずと急度思ひ返し鐵砲その所に打捨て帶引締め寄らば一刀に切散して命あらん限りは落延んずと覺悟を定め

靜々と森中を忍び出たり、此彼所に見ゆる松明の光り人々の叫び聲、我を追手の來るかと顧み〳〵富士の裾野の方へと足に任せて右へ右へと走りたるに十八日の曉には甲州路の方へ出で追手も亦續いて來らざりけり

第四十六回

『其儘に打捨て置け』と仰はありしかど現在德川殿の御命を無ものにし奉らんと謀りて鐵砲打掛け奉つたる大逆謀叛の曲者、いかで容赦の成べきや、御供の面々は御乘物を守護して宙を飛ばせ三島の宿へ急がれしが後に殘れる御固の輩はソレ僉議せよ草を分つて曲もの搜せよと濕る松明ふり立て樹立谷間の嫌なく狩立たれども、此時車善七は逸早くも雲を霞と其場を立去り殊には大雨の中の夕暮にて箱根の山中は眞の闇夜に異ならねば其足跡さへも知ざりけり

扨も德川殿には十七日の夜半ばかりに三島に着かせ給ひしが、十八日は直ちに駿府へ一日繰越て進ませ給ふか但しは三島へ御逗留あらせ給ふにや如何は遊ばされ候ふと伺ひ奉るに駿府着は明十九日の日取なり今日若いたしなば用意の程も如何あらん幸に今日は天氣も快晴なり今日一日は是に止まり山の此方にて終日狩ぐらせんぞと仰せ出され、昨日の變事をば何とも思召されず最ど御入興

にて御狩せさせ給ひけり。夕暮ごろに三島の御旅館に還らせ給ひけるに、奉行の人々は御前に出て

『扨も昨日箱根の山中にて大逆無道を働いたる曲もの、打捨置いとの御沙汰では御座りまいたが、御警固の者ども御立後にて詮議の致いましたに其曲者と覺しい奴は疾に逃去たと見えて痕跡も知れませぬが、後に取殘いて有たは一挺の種が島、火繩の燃さし筒中の殘滓、是ぞ全く其時相用ひた鐵砲に相違御座りませぬ、此鐵砲に便つて詮議の致しますれば必定相知れませうと存じまする言上に及びて種が島の短筒を差出せば、徳川殿は御手にも取上給はず只一目御覽じて

其鐵砲は其方ども丶存知の如く、我等いまだ濱松に居城の砌り、堺の鐵砲鍛冶を呼寄せて造らせた形であるが……其筒に銘でも彫てあるか、其方ども改て見たか

『ハッ上意の通り御家にて專ら御用に成ました形に御座りますれば、中身改めて見ましたれば、此通り慶長七年造之駿府住人國友宗高と銘切て御座りまする

『さうか

と仰られたる迄にて別に御意も無し、奉行の人々は

『兎もあれ國友宗高を内々相尋づね詮議の仕り度存じまする

と伺ふに

『其分は其方ども心任に致せ

と而已の御沙汰にて更に驚かせ給へる御氣色も在さゞりけり

斯て翌十九日駿府の御城へ入らせ給ふに待受け奉りて奉行の人々は又再び御前へ出て内々申上るやうは

『今朝當地にて鐵砲鍛冶國友宗高と申すもの奉行所へ呼出し内々相尋ねましたる所右の種が島は去る十三日、當御城下朝比奈三郎兵衛方に逗留の武士車善七と申す者へ彈藥火繩とも相添へ金三兩にて賣渡し宗高自身に三郎兵衛宅へ持參いたし右善七居間にて相渡し代金を請取ましたる趣帳面に控へある通り毛頭相違は御座りませぬとの申立に御座ります、依て右宗高は奉行所へ留置きましたが、朝比奈三郎兵衛呼出し詮議いたしませうや、御賢慮伺ひ上まする

『さうか我等へ鐵砲打掛たは火の車丹波が小性であつたか、親に劣らぬ情剛の奴のゥ……否々三郎兵衛は我等幼年の頃より親三郎兵衛同樣に我等へ志篤いもの、彼に限つては我等へ對して左樣の不屆いたす者で無い、是には必ず仔細があらう、唯今にも三郎兵衛杖に倚て參つたら常例の通り目通りさせい、我等直に尋ねて見やう……ハテ案じは少しも無い、其通りに申付い……

第四十七回

徳川殿(家康公)には常に變らぬ麗しき御氣色にて今昔の御物語ども仕たまひしが、頓て御側に侍ふ輩を遠ざけさせて

『三郎兵衛、内々其方に尋ね度ことがある、近う寄れ……佐竹の家老車丹波守と申した勇士の悴善七と申すもの、其方いかなる由縁で世話いたいた、其善七唯今いづれへ參つた包むに及ばぬ有の儘に語り聞せい

との御諚。朝比奈三郎兵衛は畏つて

『其儀は私より内々言上いたしませうと存じ居りましたる所……御前には、どうして車善七私かたへ居りました事を御存知で在せられまするか、實は同人事は

と善七が娘小夜の危難を救ひ送り來りしに付き强て引留め滯留させたる事、善七が若輩に似合はず了簡深く文武の道に達したる事、徳川殿の御仁勇を感じ奉れる事、善七を聟養子にせんと相談に及びたる事、善七の分別には先づ徳川殿御内慮を伺ひ奉りたる上にすべしと申したる事、其後十五日の夜に一通を書置して暇をも告ずして三郎兵衛方を立退たる事ども落も無く言上に及び懐中より善七の書置を取出して御覽に入れ奉る、徳川殿御覽ありて深く思ひ入らせ給へる御氣色にて

『ム、是で全く相分つた、然らば其方は善七立退た後の事存ぜぬな

『同人の書面にも何とも認め御座りませねば一向に承知いたしませぬが殘り惜う存じまする

『さうか、其善七はな、一昨十七日の暮がた箱根の山中にて我等乘物へ鐵砲うち掛て逃去た危う一命果す所であつたぞ

『エ、善七めが左樣の曲事を……左樣とは更に心付かず恐入り奉つて御座りまする

平伏し顔色も變り惣身に冷汗を出し慄へ畏れて控へたり

『イヤ其樣に恐入らいでも可い、其方一向存知せぬ事は我等よう推察して居るじや……善七ごとき大膽の奴が何で其方に心底を悟られる樣な擧動を致さうぞ、年は其方より遙に下でも分別は却つて遙かに上じや……去年丹波が水戸にて一揆の起つた時の始末を後に承知したが、彼善七は父が身の上を案じて秋田から只一人で水戸へ乘付け父丹波が先途を見屆け大勢の寄手が圍の中を切破つて戰場を落延び其後丹波が首級を青柳口より夜に紛れて盗み取り土中に葬り塚印を立て己が名を書記し置て身を隠し、我等より宥免の沙汰に及ばせたると其まゝ本名を名乘て其方へ面會いたした程の奴、中々其方ごときが手に乘らう筈は無い……善にまれ惡にまれ武士の根性はさう無て

は成らぬもの天ばれ末頼もしい魂の小倅じや……夫程の魂の奴じやもの縦か千石ばかりの零數知行に心ひかれて志操を變へ其方の聟養子には成るまいてのウハヽヽア……併し其方に無實の災難を掛まいとて夫とは無しに其方が聟養子の望を思ひ切らせ双方の義理を立て通した計ひ若輩ものには感心な心得方中々行屆いた致し樣……善七の事は是にて其方も思ひ切り養子には外の者を見立て更に申聞い……サア善七事よもや此後其方へ尋ね參る事は決して有まいが若も參つたらば奉行へ申談し繩も打たず枷も掛けず武士の作法にて取扱ひ江戸へなり伏見へなり我等が居所へ連れ參れ我等自から諭して改心させて召仕はう程に其旨能々心得い……

仰含められければ三郎兵衛は漸く心を落附て御厚恩を謝したりけり。去ども奉行の人々は德川殿の御内意を知らざれば車善七の人相書を以て諸國に觸れ嚴しく詮議に及びたり

第四十八回

照準定めて打たる鐵砲たとひ種が島の短筒、たりとも日頃覺えの手練の伎倆たしかに手徹したからは神佛擁護の德川殿武運は强く在すとも縱この善七が銃先は逸れさせ給ふまじと思ひ信じたる車善七猛虎は箱根の山中を夜霧に紛れて遁れ出で甲州路の方へ掛り夫より路を轉じて信濃美濃を經て伊勢

に越え大和に入り兼て浮浪人の隱家と聞えたる吉野十津川の奥に暫し身を潛めて、世の風說を聞居たるに「德川殿には箱根にて危難に遇はせ給ひしと云ふ風聞はあれど別に御用心の氣色も無く定の日數にて東海道を經て上洛せられ、此程勅使には伏見へ參向ありて征夷大將軍の宣旨を下され淳和奬學兩院別當源氏長者右馬寮御監等の御兼官すべて足利殿の御先例に依りて行はれ、德川殿には其翌日御參內あつて拜謝の禮に天顏を拜し給ひ若殿秀忠卿その外の公達たち並びに御家老職の人々も各々官位昇進の恩を蒙りて德川家の威勢まことに旭の昇るに異ならず」との取々の噂にて京都より歸り來れる輩は現に德川殿度々の參內を目前に見物したりと云ふもありけり

善七は此由を傳へ聞て『扨も〳〵家康殿は實に好運の大將にて在すよな、此善七が發たる彈は心を籠し强藥、駕籠の左より右の後へ掛て筋違に打貫たる上からは、鬼神ならばいざ知らず、人間であらば免かるべうは無ものを、何にしてかは助かられけるやらん、敵ながらも武運の程いみじさよ、信とや明大將は飛道具にて打れぬとのこと古老の人の申しゝか今こそ思ひ當なれ、……』と宛然掌中の珠を失ひたる心地して茫然として居たりけるが、『否々武士が思ひ込だる志節は岩石をも射貫たる例もあり、一度や二度仕損じたりとて力を落す事やはある、四度五度は愚かな事、七生までも生れ代つて思ひを遂では父上へ對し奉つて冥土で面を合すやうは無し、急では却つて事成らじ、先づ

時節を待こと肝要なれ』と思ひ返して、尙も心して我身を潛めたり

斯る中に德川殿には京都伏見の掟をも夫々に定め置きやがて、發駕ありて江戸へ歸られ給ひしかば五畿内は原の如くに靜穩には成りぬされど京都には所司代を置れて洛中洛外の沙汰せられ、伏見には御城番ありて取締も嚴く常に大阪へ向ひての用心いと嚴しければ、愍に京阪あたりを徘徊せんは事の敗と考て善七は此年の秋の末より大和の奥を出で奈良へぞ越たりける、奈良は古の帝都にてありければ今も其名殘ありて七大寺、その外名所古跡ども昔忍ばれてゆかしかりけり、善七は武者修行の者なりと名乘て此所にあらんは人目に立つの恐あり如何はすべきと困じたるが『オヽ思ひ附たる事こそあれ、此奈良は猿樂の本場所、金春金剛の兩流は其太夫役者衆この地に在住して年々薪能の神事を勤むると聞及ぶ、幸ひ此善七幼年の頃より母の勸に謠曲仕舞の數々を觀世の太夫より授りて習ひ覺えたれば今に徒然の節には思ひ出して謠ふ事もあり、一つには家康殿に近よる手段、二つには身を忍ぶ方便には猿樂とならんも然るべしと、思ひ附き夫より手蔓を求めて金春太夫の許に伺候し『僕事は生れは下總あたりの武士の忰で候ひしが殊の外の猿樂執心に付き江戸表へ出で觀世殿の第子に相成て稽古いたし候ふに相弟子の讒言を信じて觀世どのには僕を憎まれ、謠曲の節が不器用なりとて故々の叱り果は土足に掛て僕が頭を踏にぢられたる折檻、餘りの殘念さに逐電いたし御門下を蔡ふて此奈良へは參つて候ふ、あはれ御弟子に加へられて御授け下されなば行々は下掛の能を江戸へ持歸り、彼觀世どのが上掛の鼻を挫ぎ申し度と眞實やかに述たりけり

第四十九回

職業競爭と云ふ事は高きにも卑きにも間々ある例ぞかし、金春太夫は素より溫厚の君子にて觀世太夫とて愼み深き人物なれば相互に他の堪能なるを譽こそすれ假初にも惡ざまに罵る事などは無かりけり。されども觀世は足利氏以來京都に時めき殊に德川殿の御意に叶ひて江戸に下りてよりは諸大名がた凡は皆觀世流と成られたる程の勢なるに、夫に引替て金春は故太閤の思召に適ずと言囃されてより兎角は南都へのみ常に住居して都路へ出る事さへ稀なれば其藝道の堪能をすら世には知らぬが多かりけり、其中には金春觀世兩流の末を汲める輩なる脇師連衆立方地謠囃子狂言師の面々は我佛尊としの諺に違はず互に己れが流儀の長所に誇れるまゝ自から他の短所を誹りて果は敵手の太夫の藝能までをも嘲り罵るやうに成りてければ、觀世が今春を面白からず思へる如くに今春も亦觀世をば快く思はずして吳越の念を爲し居たり

斯る處に車善七虎猛は江戸表にて觀世太夫に疎まれて逐電なしたる門人立山藤之丞と變名して金春

の門を音信れ只管に教を乞ひしかば金春太夫は直に其乞を容れ先づ試に一曲を謠はせ一さし舞はせたるに、兼て猿樂の心得はあり殊に天然の美聲に自然の器用ありて並々に勝れたれば、今春は大に悅こび此者ならば往々は我一流を江戸に弘め觀世が向ふを張るべき仕手にも成ぬべしと末頼もしく思ふまゝ直ちに入門を許して弟子の數に加へたり。善七の立山藤之丞は是よりして金春が邸の近所に宿を替へ朝より夕に至るまで師の家に入りて專ら心を猿樂の學に委ね業を勵みける程に未だ一年を經ざるに既にはや金春門人中に指をり數へらるゝ計りの能藝とは成りぬ、其の上に性質穩かにして萬に信だちて師に仕へ友に交り人を貴び己れに誇らず常に長しく學動たれば金春は又無ものに思ひて何事に就ても藤之丞藤之丞とて腹心の列に加へたるに、善七の藤之丞は全く金春の流を習ひ覺え中にも謠と小鼓とは最も其得意の業と諸人に許されたり

善七は斯て身を潛め、内心に思ひけるは

『我この御詮議嚴しい中で江戸へ下るとも家康殿に近づく事は迚も容易うは成り申すまい、愁ひに關東を立廻つて捕はれては一生の無念この上も無い耻辱、心は彌猛に早れども先は暫く能役者に成て時節を待つが上分別。斯とは知らで彼の住江安房にて別れしまゝ已に一年を過ぎ互に便り音信も無く嘸や此善七が身を案じて居らう。……扨も我師の太夫の常の咄に

『徳川殿この次の御上洛にて禁中にて猿樂を催させらるゝとの御豫定にて其節は金春太夫まづ先に召さるゝ由すでに京都より御内命に成たれば其時こそ藤之丞其方を召連れ參る程に天晴首尾よう勤めて我流儀の譽を揚い』との詞……是ぞ正しく天の與へ、咸陽宮の一曲に始皇帝を仕留るか仕損ずるかは木劍ならぬ秘藏の合口……其時こそは日の岡で碟に掛られて草葉の蔭から住江の顏を見やう……

かく思込て奈良に居たりける中に、月日は漸くに立て過ゆく駒の歩に際なく、慶長は已に十年の霜月と成りぬ。扨も徳川殿は深く思召す旨の在して來年二月には右大將殿(秀忠公)御同道にて上洛あられ大將軍の武職を右大將殿に讓られ其身は御隱居ありて大御所に成らせ給ふべしとの御事なれば來年は正月よりして諸大名がた皆京都へ參勤して待受らるべしと聞ゆ、されば禁中は申上るに及ばず二條の御城洛中洛外伏見に掛けて賑ひは聚樂行幸このかたの繁榮にてあるべしとの取沙汰。善七は是を聞て飛立ばかりに悅び居たるに、果せるかな所司代の召狀は金春が許へぞ到着したりける

第五十回